

## 基本計画書

基本計画										
事項	記入欄							備考		
計画の区分	学部の学科の設置									
フリガナ設置者	ガッコウホウジン アジアガクエン 学校法人 亜細亜学園									
フリガナ大学の名称	アジアダイガク 亜細亜大学 (Asia University)									
大学本部の位置	東京都武蔵野市境5丁目8番									
大学の目的	広く教養教育を行うとともに、幅広い職業人を養成するために、深く専門の学術を教授することを目的とし、特に日本及び亜細亜の社会文化の研究と建設的実践に重点を置き、アジアとの融合に新機軸を打ち出す人材を育成する。									
新設学部等の目的	文理融合的な視点でデータを分析できるだけでなく、企業や社会における課題を分析しデータサイエンス・AIの手法を用いて課題解決に結び付けられる人材を育成することを目的とする。このため、中学・高校の復習を兼ねた数学・統計の基礎学習の後、少人数グループによるプロジェクト型演習を通して課題分析力・課題解決力の養成を重視した教育を行う。またアジアの学生と英語でデータサイエンス・AIを学べる環境の充実に努め、AIやテクノロジーが急速に進展するグローバル社会を牽引する人材を育成する。									
新設学部等の概要	新設学部等の名称	修業年限	入学定員	編入学定員	取容定員	学位又は称号	開設時期及び開設年次	所在地		
	経営学部 (Faculty of Business Administration) データサイエンス学科 (Department of Data Science) 計	4	80		320	学士(経営学) (Bachelor of Business Administration)	令和5年4月 第1年次	東京都武蔵野市境 5丁目8番		
同一設置者内における変更状況(定員の移行、名称の変更等)	令和5年4月 新学科設置届出申請予定 経営学部 経営学科 340→325[定員減](△15)、3年次編入55→15[定員減](△40) 法学部 法律学科 340→320[定員減](△20) 国際関係学部 国際関係学科 140→130[定員減](△10) 多文化コミュニケーション学科 140→130[定員減](△10) 都市創造学部 都市創造学科 3年次編入 10→0[定員減](△10)									
教育課程	新設学部等の名称	開設する授業科目の総数				卒業要件単位数				
	経営学部 データサイエンス学科	講義	演習	実験・実習	計	124 単位				
教員組織の概要	学部等の名称			専任教員等					兼任教員等	
	新設	経営学部 データサイエンス学科		教授	准教授	講師	助教	計	助手	
				6人 (6)	2人 (2)	0人 (0)	0人 (0)	8人 (8)	0人 (0)	152 (137)
		計		6 (6)	2 (2)	0 (0)	0 (0)	8 (8)	0 (0)	152 (137)
	既設	経営学部 経営学科		13 (13)	11 (11)	5 (5)	0 (0)	29 (29)	0 (0)	189 (189)
		ホスピタリティ・マネジメント学科		6 (5)	6 (7)	0 (0)	0 (0)	12 (12)	0 (0)	194 (194)
		経済学部 経済学科		14 (13)	9 (9)	3 (1)	0 (0)	26 (23)	0 (0)	187 (187)
		法学部 法律学科		17 (17)	10 (10)	3 (3)	0 (0)	30 (30)	0 (0)	198 (198)
		国際関係学部 国際関係学科		9 (8)	8 (8)	0 (0)	0 (0)	17 (16)	0 (0)	195 (195)
		多文化コミュニケーション学科		10 (10)	4 (4)	2 (2)	0 (0)	16 (16)	0 (0)	212 (212)
		都市創造学部 都市創造学科		9 (9)	5 (5)	3 (1)	0 (0)	17 (15)	0 (0)	195 (195)
		英語教育センター		0 (0)	0 (0)	28 (28)	0 (0)	28 (28)	0 (0)	0 (0)
	分	アジア研究所		4 (4)	0 (0)	1 (1)	0 (0)	5 (5)	0 (0)	0 (0)
		計		82 (79)	53 (54)	45 (41)	0 (0)	180 (174)	0 (0)	— (—)
合計		88 (85)	55 (56)	45 (41)	0 (0)	188 (182)	0 (0)	— (—)		

教員以外の職員の概要	職 種		専 任	兼 任	計					
	事 務 職 員		113 (113)	25 (25)	138 (138)	人				
	技 術 職 員		10 (10)	1 (1)	11 (11)					
	図 書 館 専 門 職 員		8 (8)	0 (0)	8 (8)					
	そ の 他 の 職 員		0 (0)	0 (0)	0 (0)					
計		131 (131)	26 (26)	157 (157)						
校 地 等	区 分	専 用	共 用	共用する他の学校等の専用	計					
	校 舎 敷 地	52,647.49 m <sup>2</sup>	0 m <sup>2</sup>	0 m <sup>2</sup>	52,647.49 m <sup>2</sup>					
	運 動 場 用 地	92,999.21 m <sup>2</sup>	0 m <sup>2</sup>	0 m <sup>2</sup>	92,999.21 m <sup>2</sup>					
	小 計	145,646.70 m <sup>2</sup>	0 m <sup>2</sup>	0 m <sup>2</sup>	145,646.70 m <sup>2</sup>					
	そ の 他	2,431.63 m <sup>2</sup>	0 m <sup>2</sup>	0 m <sup>2</sup>	2,431.63 m <sup>2</sup>					
合 計	148,078.33 m <sup>2</sup>	0 m <sup>2</sup>	0 m <sup>2</sup>	148,078.33 m <sup>2</sup>						
校 舎	専 用	共 用	共用する他の学校等の専用	計						
	62,180.08 m <sup>2</sup> (62,180.08 m <sup>2</sup> )	0 m <sup>2</sup> ( 0 m <sup>2</sup> )	0 m <sup>2</sup> ( 0 m <sup>2</sup> )	62,180.08 m <sup>2</sup> (62,180.08 m <sup>2</sup> )						
教室等	講義室	演習室	実験実習室	情報処理学習施設	語学学習施設					
	102 室	22 室	3 室	11 室 (補助職員0人)	2 室 (補助職員0人)					
専任教員研究室	新設学部等の名称			室 数						
	経営学部 データサイエンス学科			8 室						
図 書 ・ 設 備	新設学部等の名称	図書 〔うち外国書〕 冊	学術雑誌 〔うち外国書〕 種	電子ジャーナル 〔うち外国書〕	視聴覚資料 点	機械・器具 点	標本 点	学部単位での特定不能なため、大学全体の数		
	経営学部 データサイエンス学科	567,954 [173,262] (545,954 [169,762])	4,864 [1,990] (4,864 [1,990])	31,314 [31,314] (31,314 [31,314])	14,313 (14,313)	0 ( 0 )	0 ( 0 )			
	計	567,954 [173,262] (545,954 [169,762])	4,864 [1,990] (4,864 [1,990])	31,314 [31,314] (31,314 [31,314])	14,313 (14,313)	0 ( 0 )	0 ( 0 )			
図 書 館	面積		閲覧座席数		取 納 可 能 冊 数					
	8,967 m <sup>2</sup>		745		821,750					
体 育 館	面積		体育館以外のスポーツ施設の概要				大学全体			
	3,963.00 m <sup>2</sup>		野球場 2面 陸上トラック 1面 サッカー場 1面		武道館 トレーニングルーム テニスコート 10面					
経費の見積り及び維持方法の概要	経費の見積り	区 分	開設前年度	第1年次	第2年次	第3年次	第4年次	第5年次	第6年次	図書購入費に全学部共通で使用する電子ジャーナル・データベースの整備費(運用コスト含む)は含めずに算出。
		教員1人当り研究費等		400千円	400千円	400千円	400千円			
		共同研究費等		3,730千円	3,861千円	3,990千円	4,117千円			
		図書購入費	1,000千円	800千円	1,000千円	800千円	800千円			
	設備購入費	0千円	2,855千円	1,363千円	2,178千円	2,922千円				
学生1人当り納付金	第1年次	第2年次	第3年次	第4年次	第5年次	第6年次				
学生納付金以外の維持方法の概要		1,250千円	1,020千円	1,020千円	1,020千円	— 千円	— 千円			
学生納付金以外の維持方法の概要			学生納付金収入以外にも、手数料収入、寄付金収入、補助金収入等があり、これらの収入も経費の財源として、学生数等の合理的な按分方法で配分し、維持・運営を図る。							

	大 学 の 名 称	亜細亜大学							所 在 地
	学 部 等 の 名 称	修業 年限	入学 定員	編入学 定員	収容 定員	学位又 は称号	定 員 超過率	開設 年度	
既 設 大 学 等 の 状 況	経営学部						1.04		東京都 武蔵野市境 5丁目8番
	経営学科	4	340	3年次 55人	1,470	学士 (経営学)	1.03	昭和45 年度	
	ホスピタリティ・マ ネジメント学科	4	150	—	600	学士 (経営学)	1.06	平成21 年度	
	経済学部 経済学科	4	250	—	1,000	学士 (経済学)	1.05	昭和39 年度	
	法学部 法律学科	4	340	—	1,360	学士 (法学)	1.04	昭和41 年度	
	国際関係学部						1.03		
	国際関係学科	4	140	—	560	学士 (国際関係)	1.05	平成2 年度	
	多文化コミュニケー ション学科	4	140	—	560	学士 (国際関係)	1.01	平成24 年度	
	都市創造学部 都市創造学科	4	145	3年次 10人	600	学士 (都市創造学)	1.04	平成28 年度	
	アジア・国際経営戦略研究科 アジア・国際経営戦略専攻							平成18 年度	
	博士前期課程	2	30	—	60	修士 (経営学)	1.04	平成20 年度	
	博士後期課程	3	5	—	15	博士 (経営学)	0.06		
	経済学研究科 経済学専攻							昭和49 年度	
	博士前期課程	2	15	—	30	修士 (経済学)	0.19	昭和51 年度	
	博士後期課程	3	3	—	9	博士 (経済学)	0.11		
法学研究科 法学専攻							昭和49 年度		
博士前期課程	2	15	—	30	修士 (法学)	0.43	昭和51 年度		
博士後期課程	3	5	—	15	博士 (法学)	0.00			
附属施設の概要	該当なし								

(注)

- 1 共同学科等の認可の申請及び届出の場合、「計画の区分」、「新設学部等の目的」、「新設学部等の概要」、「教育課程」及び「教員組織の概要」の「新設分」の欄に記入せず、斜線を引くこと。
- 2 「教員組織の概要」の「既設分」については、共同学科等に係る数を除いたものとする。
- 3 私立の大学の学部若しくは大学院の研究科又は短期大学の学科又は高等専門学校等の収容定員に係る学則の変更の届出を行おうとする場合は、「教育課程」、「教室等」、「専任教員研究室」、「図書・設備」、「図書館」及び「体育館」の欄に記入せず、斜線を引くこと。
- 4 大学等の廃止の認可の申請又は届出を行おうとする場合は、「教育課程」、「校地等」、「校舎」、「教室等」、「専任教員研究室」、「図書・設備」、「図書館」、「体育館」及び「経費の見積もり及び維持方法の概要」の欄に記入せず、斜線を引くこと。
- 5 「教育課程」の欄の「実験・実習」には、実技も含むこと。
- 6 空欄には、「—」又は「該当なし」と記入すること。



区分	授業科目の名称	配当年次	単位数			授業形態			専任教員等の配置					備考		
			必修	選択	自由	講義	演習	実験・実習	教授	准教授	講師	助教	助手			
全 学 共 通 科 目	選択英語Ⅴ	2・3・4前		1			○								兼4	
	選択英語Ⅵ	2・3・4後		1			○								兼4	
	選択英語Ⅶ	2・3・4前		1			○								兼4	
	選択英語Ⅷ	2・3・4後		1			○								兼4	
	フランス語初級Ⅰ	1・2・3・4前		1			○								兼2	
	フランス語初級Ⅱ	1・2・3・4後		1			○								兼2	
	フランス語初級Ⅲ	1・2・3・4前		1			○								兼2	
	フランス語初級Ⅳ	1・2・3・4後		1			○								兼2	
	フランス語コミュニケーションⅠ	1・2・3・4前		1			○								兼1	
	フランス語コミュニケーションⅡ	1・2・3・4後		1			○								兼1	
	フランス語コミュニケーションⅢ	1・2・3・4前		1			○								兼1	
	フランス語コミュニケーションⅣ	1・2・3・4後		1			○								兼1	
	フランス語中級Ⅰ	2・3・4前		1			○								兼3	
	フランス語中級Ⅱ	2・3・4後		1			○								兼3	
	フランス語中級Ⅲ	2・3・4前		1			○								兼3	
	フランス語中級Ⅳ	2・3・4後		1			○								兼3	
	フランス語応用Ⅰ	2・3・4前		1			○								兼1	
	フランス語応用Ⅱ	2・3・4後		1			○								兼1	
	フランス語応用Ⅲ	2・3・4前		1			○								兼1	
	フランス語応用Ⅳ	2・3・4後		1			○								兼1	
	ヒンディー語初級Ⅰ	1・2・3・4前		1			○								兼1	
	ヒンディー語初級Ⅱ	1・2・3・4後		1			○								兼1	
	ヒンディー語初級Ⅲ	1・2・3・4前		1			○								兼1	
	ヒンディー語初級Ⅳ	1・2・3・4後		1			○								兼1	
	ヒンディー語中級Ⅰ	2・3・4前		1			○								兼1	
	ヒンディー語中級Ⅱ	2・3・4後		1			○								兼1	
	ヒンディー語中級Ⅲ	2・3・4前		1			○								兼1	
	ヒンディー語中級Ⅳ	2・3・4後		1			○								兼1	
	インドネシア語初級Ⅰ	1・2・3・4前		1			○								兼2	
	インドネシア語初級Ⅱ	1・2・3・4後		1			○								兼2	
	インドネシア語初級Ⅲ	1・2・3・4前		1			○								兼2	
	インドネシア語初級Ⅳ	1・2・3・4後		1			○								兼2	
	インドネシア語中級Ⅰ	2・3・4前		1			○								兼1	
	インドネシア語中級Ⅱ	2・3・4後		1			○								兼1	
	インドネシア語中級Ⅲ	2・3・4前		1			○								兼1	
	インドネシア語中級Ⅳ	2・3・4後		1			○								兼1	
	日本語Ⅰ	1・2・3・4前		1			○								兼3	
	日本語Ⅱ	1・2・3・4前		1			○								兼5	
	日本語Ⅲ	1・2・3・4前		1			○								兼3	
	日本語Ⅳ	1・2・3・4前		1			○								兼2	
	日本語Ⅴ	1・2・3・4後		1			○								兼3	
	日本語Ⅵ	1・2・3・4後		1			○								兼5	
日本語Ⅶ	1・2・3・4後		1			○								兼3		
日本語Ⅷ	1・2・3・4後		1			○								兼2		
上級日本語Ⅰ	2・3・4前		1			○								兼2		
上級日本語Ⅱ	2・3・4後		1			○								兼2		
上級日本語Ⅲ	3・4前		1			○								兼1		
上級日本語Ⅳ	3・4後		1			○								兼1		
中級日本語Ⅰ	2・3・4前		1			○								兼2		
中級日本語Ⅱ	2・3・4前		1			○								兼3		
中級日本語Ⅲ	2・3・4前		1			○								兼2		
中級日本語Ⅳ	2・3・4後		1			○								兼2		
中級日本語Ⅴ	2・3・4後		1			○								兼3		
中級日本語Ⅵ	2・3・4後		1			○								兼2		

区分	授業科目の名称	配当年次	単位数			授業形態			専任教員等の配置					備考		
			必修	選択	自由	講義	演習	実験・実習	教授	准教授	講師	助教	助手			
全 学 共 通 科 目	韓国語初級Ⅰ	1・2・3・4前		1				○							兼2	
	韓国語初級Ⅱ	1・2・3・4後		1				○							兼2	
	韓国語初級Ⅲ	1・2・3・4前		1				○							兼2	
	韓国語初級Ⅳ	1・2・3・4後		1				○							兼2	
	韓国語コミュニケーションⅠ	1・2・3・4前		1				○							兼1	
	韓国語コミュニケーションⅡ	1・2・3・4後		1				○							兼1	
	韓国語コミュニケーションⅢ	1・2・3・4前		1				○							兼1	
	韓国語コミュニケーションⅣ	1・2・3・4後		1				○							兼1	
	韓国語中級Ⅰ	2・3・4前		1				○							兼3	
	韓国語中級Ⅱ	2・3・4後		1				○							兼3	
	韓国語中級Ⅲ	2・3・4前		1				○							兼3	
	韓国語中級Ⅳ	2・3・4後		1				○							兼3	
	韓国語応用Ⅰ	2・3・4前		1				○							兼1	
	韓国語応用Ⅱ	2・3・4後		1				○							兼1	
	韓国語応用Ⅲ	2・3・4前		1				○							兼1	
	韓国語応用Ⅳ	2・3・4後		1				○							兼1	
	モンゴル語初級Ⅰ	1・2・3・4前		1				○							兼1	
	モンゴル語初級Ⅱ	1・2・3・4後		1				○							兼1	
	モンゴル語初級Ⅲ	1・2・3・4前		1				○							兼1	
	モンゴル語初級Ⅳ	1・2・3・4後		1				○							兼1	
	モンゴル語中級Ⅰ	2・3・4前		1				○							兼1	
	モンゴル語中級Ⅱ	2・3・4後		1				○							兼1	
	モンゴル語中級Ⅲ	2・3・4前		1				○							兼1	
	モンゴル語中級Ⅳ	2・3・4後		1				○							兼1	
	ポルトガル語初級Ⅰ	1・2・3・4前		1				○							兼1	
	ポルトガル語初級Ⅱ	1・2・3・4後		1				○							兼1	
	ポルトガル語初級Ⅲ	1・2・3・4前		1				○							兼1	
	ポルトガル語初級Ⅳ	1・2・3・4後		1				○							兼1	
	ポルトガル語中級Ⅰ	2・3・4前		1				○							兼1	
	ポルトガル語中級Ⅱ	2・3・4後		1				○							兼1	
	ポルトガル語中級Ⅲ	2・3・4前		1				○							兼1	
	ポルトガル語中級Ⅳ	2・3・4後		1				○							兼1	
	ロシア語初級Ⅰ	1・2・3・4前		1				○							兼2	
	ロシア語初級Ⅱ	1・2・3・4後		1				○							兼2	
	ロシア語初級Ⅲ	1・2・3・4前		1				○							兼1	
	ロシア語初級Ⅳ	1・2・3・4後		1				○							兼1	
	ロシア語中級Ⅰ	2・3・4前		1				○							兼1	
	ロシア語中級Ⅱ	2・3・4後		1				○							兼1	
	ロシア語中級Ⅲ	2・3・4前		1				○							兼1	
	ロシア語中級Ⅳ	2・3・4後		1				○							兼1	
ロシア語応用Ⅰ	2・3・4前		1				○							兼1		
ロシア語応用Ⅱ	2・3・4後		1				○							兼1		
ロシア語応用Ⅲ	2・3・4前		1				○							兼1		
ロシア語応用Ⅳ	2・3・4後		1				○							兼1		
スペイン語初級Ⅰ	1・2・3・4前		1				○							兼5		
スペイン語初級Ⅱ	1・2・3・4後		1				○							兼5		
スペイン語初級Ⅲ	1・2・3・4前		1				○							兼1		
スペイン語初級Ⅳ	1・2・3・4後		1				○							兼1		
スペイン語コミュニケーションⅠ	1・2・3・4前		1				○							兼1		
スペイン語コミュニケーションⅡ	1・2・3・4後		1				○							兼1		
スペイン語コミュニケーションⅢ	1・2・3・4前		1				○							兼1		
スペイン語コミュニケーションⅣ	1・2・3・4後		1				○							兼1		
スペイン語中級Ⅰ	2・3・4前		1				○							兼3		
スペイン語中級Ⅱ	2・3・4後		1				○							兼3		
スペイン語中級Ⅲ	2・3・4前		1				○							兼2		
スペイン語中級Ⅳ	2・3・4後		1				○							兼2		
スペイン語応用Ⅰ	2・3・4前		1				○							兼2		
スペイン語応用Ⅱ	2・3・4後		1				○							兼2		
スペイン語応用Ⅲ	2・3・4前		1				○							兼2		
スペイン語応用Ⅳ	2・3・4後		1				○							兼2		

区分	授業科目の名称	配当年次	単位数			授業形態			専任教員等の配置					備考				
			必修	選択	自由	講義	演習	実験・実習	教授	准教授	講師	助教	助手					
全 学	タイ語初級Ⅰ	1・2・3・4前		1			○								兼1	オムニバス		
	タイ語初級Ⅱ	1・2・3・4後		1			○								兼1			
	タイ語初級Ⅲ	1・2・3・4前		1			○								兼1			
	タイ語初級Ⅳ	1・2・3・4後		1			○								兼1			
	タイ語中級Ⅰ	2・3・4前		1			○								兼1			
	タイ語中級Ⅱ	2・3・4後		1			○								兼1			
	タイ語中級Ⅲ	2・3・4前		1			○								兼1			
	タイ語中級Ⅳ	2・3・4後		1			○								兼1			
	ベトナム語初級Ⅰ	1・2・3・4前		1			○								兼1			
	ベトナム語初級Ⅱ	1・2・3・4後		1			○								兼1			
	ベトナム語初級Ⅲ	1・2・3・4前		1			○								兼1			
	ベトナム語初級Ⅳ	1・2・3・4後		1			○								兼1			
	ベトナム語中級Ⅰ	2・3・4前		1			○								兼1			
	ベトナム語中級Ⅱ	2・3・4後		1			○								兼1			
	ベトナム語中級Ⅲ	2・3・4前		1			○								兼1			
	ベトナム語中級Ⅳ	2・3・4後		1			○								兼1			
	共 通 科 目	<言語と世界>																
		アジアの伝統文化	1・2・3・4前後		2			○									兼1	
		アジアを知る12章	1・2・3・4前後		2			○									兼1	
		アメリカ研究入門Ⅰ	1・2・3・4前		2			○									兼1	
アメリカ研究入門Ⅱ		1・2・3・4後		2			○								兼1			
国際関係論Ⅰ		1・2・3・4前		2			○								兼1			
国際関係論Ⅱ		1・2・3・4後		2			○								兼1			
西洋史Ⅰ		1・2・3・4前		2			○								兼1			
西洋史Ⅱ		1・2・3・4後		2			○								兼1			
中国研究Ⅰ		1・2・3・4前		2			○								兼1			
中国研究Ⅱ		1・2・3・4後		2			○								兼1			
東南アジア研究Ⅰ		1・2・3・4前		2			○								兼1			
東南アジア研究Ⅱ		1・2・3・4後		2			○								兼1			
東洋史Ⅰ		1・2・3・4前		2		○									兼1			
東洋史Ⅱ		1・2・3・4後		2		○									兼1			
日本史Ⅰ		1・2・3・4前		2		○									兼1			
日本史Ⅱ		1・2・3・4後		2		○									兼1			
北東アジア研究Ⅰ		1・2・3・4前		2					○						兼1			
北東アジア研究Ⅱ		1・2・3・4後		2					○						兼1			
Doing HistoryⅠ		1・2・3・4前		2					○						兼1			
Doing HistoryⅡ	1・2・3・4後		2					○						兼1				
海外語学実習Ⅰ	1・2・3・4前		1					○						兼1				
海外語学実習Ⅱ	1・2・3・4後		1					○						兼1				
海外語学実習Ⅲ	1・2・3・4前		1					○						兼1				
海外語学実習Ⅳ	1・2・3・4後		1					○						兼1				
教養基礎（歴史からみた異文化交流）	1・2通		2					○						兼1				
アメリカン・スタディーズⅠ	2・3・4前		4					○						兼1				
アメリカン・スタディーズⅡ	2・3・4後		4					○						兼1				
アジアン・スタディーズⅠ	2・3・4前		4					○						兼1				
アジアン・スタディーズⅡ	2・3・4後		4					○						兼1				
ジャパン・スタディーズⅠ	3・4通		2					○						兼1				
ジャパン・スタディーズⅡ	4通		2					○						兼1				
<表現と芸術>																		
西洋文学Ⅰ	1・2・3・4前		2		○									兼2				
西洋文学Ⅱ	1・2・3・4後		2		○									兼2				
中国文学Ⅰ	1・2・3・4前		2		○									兼1				
中国文学Ⅱ	1・2・3・4後		2		○									兼1				
ヨーロッパの芸術と文化Ⅰ	1・2・3・4前		2		○									兼2				
ヨーロッパの芸術と文化Ⅱ	1・2・3・4後		2		○									兼2				
文章表現	1・2・3・4前		2		○									兼5				
日本の表象文化	1・2・3・4後		2		○									兼4				

区分	授業科目の名称	配当年次	単位数			授業形態			専任教員等の配置					備考				
			必修	選択	自由	講義	演習	実験・実習	教授	准教授	講師	助教	助手					
全 学 共 通 科 目	教養基礎 (近現代日本の文化と表現)	1・2通		2		○										兼1		
	教養基礎 (現代文学入門)	1・2通		2		○										兼1		
	教養基礎 (チェスと文学)	1・2通		2		○										兼1		
	教養基礎 (理論で読む現代文学)	1・2通		2		○										兼1		
	教養基礎 (多様性とアートの教育学)	1・2通		2		○										兼1		
	日本の美術	1・2通		2		○										兼1		
	日本文学 (中古)	1・2・3・4前後		2		○										兼1		
	日本文学 (中世)	1・2・3・4前後		2		○										兼1		
	日本文学 (近世)	1・2・3・4前後		2		○										兼1		
	日本文学 (近現代)	1・2・3・4前後		2		○										兼4		
	詩と詩論	2・3・4前後		2		○										兼1		
	日本の伝統芸能	1・2・3・4前後		2		○										兼1		
	表現とメディア I	2・3・4前		2		○										兼3		
	表現とメディア II	2・3・4後		2		○										兼3		
	文章作成技法	2・3・4前後		2		○										兼5		
	<b>&lt;人間と社会&gt;</b>																	
		経済学 I	1・2・3・4前		2		○										兼1	
		経済学 II	1・2・3・4後		2		○										兼1	
		手話入門 I	1・2・3・4前		2		○										兼1	
		手話入門 II	1・2・3・4後		2		○										兼1	
		社会学 I	1・2・3・4前		2		○										兼1	
		社会学 II	1・2・3・4後		2		○										兼1	
		社会思想史 I	1・2・3・4前		2		○										兼1	
		社会思想史 II	1・2・3・4後		2		○										兼1	
		宗教学 I	1・2・3・4前		2		○										兼1	
		宗教学 II	1・2・3・4後		2		○										兼1	
		女性学	1・2・3・4前後		2		○										兼1	
		政治学 I	1・2・3・4前		2		○										兼1	
		政治学 II	1・2・3・4後		2		○										兼1	
		地誌学 I	1・2・3・4前		2		○										兼1	
		地誌学 II	1・2・3・4後		2		○										兼1	
		日本思想史 I	1・2・3・4前		2		○										兼1	
	日本思想史 II	1・2・3・4後		2		○										兼1		
	文化人類学 I	1・2・3・4前		2		○										兼1		
	文化人類学 II	1・2・3・4後		2		○										兼1		
	法学 I	1・2・3・4前		2		○										兼1		
	法学 II	1・2・3・4後		2		○										兼1		
	建学の精神を考える	1・2後		2		○										兼1		
<b>&lt;こころとからだ&gt;</b>																		
	心理学 I	1・2・3・4前		2		○										兼1		
	心理学 II	1・2・3・4後		2		○										兼1		
	哲学 I	1・2・3・4前		2		○										兼1		
	哲学 II	1・2・3・4後		2		○										兼1		
	倫理学 I	1・2・3・4前		2		○										兼1		
	倫理学 II	1・2・3・4後		2		○										兼1		
	心とからだの健康学	1・2・3・4前後		2		○										兼3		
	スポーツ実習	1・2・3・4通		1						○						兼8		
	スポーツ科学概論	1・2・3・4前		2						○						兼1		
	救急処置・予防法	1・2・3・4後		2						○						兼1		
	スポーツ心理学	1・2・3・4前		2						○						兼1		
	スポーツ生理学	1・2・3・4後		2						○						兼1		
	人体の構造と機能	1・2・3・4前		2						○						兼1		
	スポーツトレーニング論	2・3・4後		2		○										兼1		
	スポーツ特別講義	2・3・4後		2		○										兼1		

区分	授業科目の名称	配当年次	単位数			授業形態			専任教員等の配置					備考			
			必修	選択	自由	講義	演習	実験・実習	教授	准教授	講師	助教	助手				
全 学 共 通 科 目	スポーツの技術と戦術	2・3・4後		2		○										兼1	
	スポーツの測定と評価	2・3・4後		2		○										兼1	
	リーダーシップとコーチング	2・3・4前		2		○										兼1	
	<情報と自然・環境>																
	情報と社会Ⅰ	1前	2			○				1							兼1
	情報と社会Ⅱ	1・2・3・4後		2		○											兼1
	情報リテラシー	1・2・3・4前後		2		○											兼3
	宇宙と物質	1・2・3・4前後		2		○				1							
	環境科学	1・2・3・4前後		2		○											兼1
	自然科学入門Ⅰ	1・2・3・4前		2		○				1							兼1
	自然科学入門Ⅱ	1・2・3・4後		2		○				1							兼1
	数学入門Ⅰ	1・2・3・4前		2		○											兼1
	数学入門Ⅱ	1・2・3・4後		2		○											兼1
	生物学Ⅰ	1・2・3・4前		2		○											兼1
	生物学Ⅱ	1・2・3・4後		2		○											兼1
	地理学Ⅰ	1・2・3・4前		2		○											兼1
	地理学Ⅱ	1・2・3・4後		2		○											兼1
	統計学入門Ⅰ	1・2・3・4前		2		○											兼2
	統計学入門Ⅱ	1・2・3・4後		2		○											兼2
	基礎数理Ⅰ	2・3・4前		2		○											兼2
	基礎数理Ⅱ	2・3・4後		2		○											兼2
	プログラミング言語Ⅰ	1前		2					○		3						
	プログラミング言語Ⅱ	1後		2					○		3						
	基礎数理Ⅲ	2・3・4前		2				○									兼1
	基礎数理Ⅳ	2・3・4後		2				○			1						
	データサイエンス入門	1後	2					○			3						
	表計算とデータサイエンス	1前		2				○			1						兼1
	データサイエンス応用																
	プロジェクトⅠ	3前		2				○			1						
	データサイエンス応用																
	プロジェクトⅡ	3後		2				○			1						
数理の世界探究	3・4後		2				○									兼1	
<人生と進路>																	
キャリアデザイン	1・2前		2			○										兼1	
現代アジアとキャリアデザイン	1・2・3・4後		2			○										兼1	
キャリア・インターンシップ	2通		4			○										兼1	
アジアキャリア開発入門Ⅰ	1・2前		2			○										兼3	
アジアキャリア開発入門Ⅱ	1・2後		2			○										兼3	
キャリアIT入門	2・3・4前		2					○			1						
総合学術演習Ⅰ	3通		4					○								兼6	
総合学術演習Ⅱ	4通		4					○								兼6	
全学共通科目小計 (313科目)		—	10	443	0			—		5	2	0	0	0		—	

区分	授業科目の名称	配当年次	単位数			授業形態			専任教員等の配置					備考				
			必修	選択	自由	講義	演習	実験・実習	教授	准教授	講師	助教	助手					
専 門 科 目	<データサイエンス科目>																	
	人工知能概論 I	1前	2			○			1									
	人工知能概論 II	1後		2		○			1									
	メディアプログラミング I	1前		2		○			1	1								
	メディアプログラミング II	1後		2		○			1	1								
	データサイエンス・コネクタ I	1前		2		○			1									
	データサイエンス・コネクタ II	1後		2		○			1									
	IoT入門	1後		2		○			1									
	データサイエンス・トップマネジメント特別講義	2後	2			○				1								
	自然言語処理	2前		2		○			1									
	データ数理 I	2前		2		○			2									
	データ数理 II	2後		2		○			2									
	データ分析 I	2前		2		○			1									
	データ分析 II	2後		2		○			1									
	データサイエンス・コネクタ III	2前		2		○											兼1	
	データサイエンス・コネクタ IV	2後		2		○											兼1	
	音楽情報処理	2後		2		○			1									
	アルゴリズム入門	2後		2		○			1									
	卒業研究 I	3通	4					○	6	2								
	卒業研究 II	4通	4					○	6	2								
	機械学習とディープラーニング	3前		2		○			1									
	ウェブアプリケーション	3前		2		○			1									
	モバイルアプリケーション	3前		2		○			1									
	DX論	3前		2		○				1								
	バーチャルリアリティ	3後		2		○				1								
	ITセキュリティ	3後		2		○				1								
	<経営科目>																	
	ビジネス入門	1前	2			○											兼7	
	経営学	1後	2			○										兼5		オムニバス
	キャリア論	1・2・3・4前		2		○										兼1		
	ビジネスマナー	1・2・3・4後		1		○										兼3		
	経営と法律	1・2・3・4前		2		○										兼1		
	ビジネス・シミュレーション I	1・2・3・4前		2		○										兼1		
	ビジネス・シミュレーション II	1・2・3・4後		2		○										兼1		
	経営財務論	2・3・4前後		2		○										兼2		
	経営戦略論	2・3・4前		2		○										兼1		
	経営組織論入門	2・3・4前		2		○										兼1		
	人事労務管理概論	2・3・4前		2		○										兼1		
	グローバル経営論	2・3・4前		2		○										兼1		
	会社法	2・3・4前		4		○										兼1		
	ビジネスコミュニケーション I	2・3・4前		2		○										兼1		
	ビジネスコミュニケーション II	2・3・4後		2		○										兼1		
	ITとビジネス	2・3・4後		2		○				1								
トップマネジメント特別講義	3後		2		○				1									
人的資源管理論	3・4前		2		○										兼1			
経営組織論	3・4前		2		○										兼1			
ビジネスモデル分析	3・4前		2		○										兼1			
中小企業論	3・4後		2		○										兼1			
技術マネジメント論	3・4後		2		○										兼1			
産業と技術	3・4前		2		○										兼1			
経営史	3・4前		4		○										兼1			
経営システム論	3・4後		4		○				1									
企業経済学	3・4後		2		○										兼1			
ファイナンス特講	3・4後		2		○										兼1			
組織心理学	3・4後		2		○										兼1			
組織認識論	3・4後		2		○										兼1			
コーポレートガバナンス論	3・4後		4		○										兼1			
ベンチャービジネス論	3・4前		2		○										兼1			
基礎ファイナンス分析	3・4前		2		○										兼1			
キャリアとリーダーシップ	3・4後		2		○										兼1			
グローバルビジネス分析	3・4後		2		○										兼1			
アジアのビジネス環境 I	3・4前		2		○										兼1			
アジアの企業と経営 II	3・4前後		2		○										兼1			
アジアのビジネス環境 II	3・4後		2		○										兼1			

区分	授業科目の名称	配当年次	単位数			授業形態			専任教員等の配置					備考	
			必修	選択	自由	講義	演習	実験・実習	教授	准教授	講師	助教	助手		
専 門 科 目	アジアの企業と経営Ⅲ	3・4前後		2		○									兼1
	ビジネスイシューズⅠ	3・4前		2		○									兼1
	ビジネスイシューズⅡ	3・4後		2		○									兼1
	流通・マーケティング	1後		2		○									兼6
	マネジリアル・マーケティング論	2・3・4後		4		○									兼3
	流通論	2・3・4後		4		○									兼2
	プロダクト・マネジメント論	3・4前		2		○									兼1
	ブランド・マネジメント論	3・4後		2		○									兼1
	マーケティング・コミュニケーション論	3・4前		2		○									兼1
	サービス・マーケティング論	3・4後		2		○									兼1
	消費者行動論	3・4前		2		○									兼1
	マーケティング・リサーチ	3・4前		2		○									兼1
	ソーシャル・マーケティング論	3・4後		2		○									兼1
	デジタル・マーケティング論	3・4後		2		○									兼1
	グローバル・マーケティング論	3・4後		2		○									兼1
	小売マーケティング論	3・4前		2		○									兼1
	サプライチェーン・マネジメント論	3・4前		2		○									兼1
	産業財マーケティング論	3・4後		2		○									兼1
	マーケティング・ケーススタディ	3・4前後		2		○									兼2
	マーケティング論特講	3・4前		2		○									兼1
	会計学	1後	2			○									兼4
	財務会計論	2・3・4後		4		○									兼2
	財務会計特講	3・4前		2		○									兼1
監査論	3・4前		4		○									兼1	
財務分析論	3・4前		2		○									兼1	
企業価値評価	3・4後		2		○									兼1	
管理会計論	3・4後		4		○									兼1	
原価計算論	3・4前		4		○									兼1	
データ解析入門	1・2・3・4後		2		○									兼2	
社会調査法	2・3・4前後		2		○									兼2	
専門科目小計（92科目）	—		18	189	0	—			6	2	0	0	0	—	
合計（405科目）	—		28	632	0	—			6	2	0	0	0	—	
学位又は称号	学士（経営学）				学位又は学科の分野				経済学関係						
卒業要件及び履修方法							授業期間等								
○経営学部データサイエンス学科卒業単位数 124単位 (内訳) 全学共通科目 48～58単位 専門科目 58～68単位 演習科目 8単位							1学年の学期区分			2学期					
							1学期の授業時間			13週					
							1時限の授業時間			105分					

授 業 科 目 の 概 要			
(経営学部 データサイエンス学科)			
区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
全	オリエンテーション・ゼミナール	大学に必要な学習習慣をつけ、論理的な議論ができ、適切な発表ができること、そして4年間の学習計画を自分で立てられるような目的意識を持てるようになることを目的とする。具体的には、本や新聞を読む習慣をつけ、求める資料や文献を探しだし、論理的な思考を身につけ、自分の考えを発表でき、レポート・論文の作成スキルを身につける。また、対話、討論を通じて意見の違いを知り、そうした議論を通じて考えの広がりを経験する。	
	英語 I	意思疎通を図る手段としての英語力を身につけることを目指し、実践的な英語学習を中心とするクラスである。週5回、集中的に英語に接することにより、コミュニケーション能力、特に、聴解力、会話力の向上を目的としている。そのため、受動的に学ぶ姿勢ではなく主体的、積極的な学修態度が要求される。それは「出席」と「参加」の違いでもあり、クラスへ「参加」することにより、一層の英語力の向上が期待できるという方針で授業は進められる。また、TOEIC®形式の練習も随時行う。	
学	英語 II	前期の「フレッシュマン・イングリッシュ I」に続くクラスである。基本的な目的・内容は変わらないが、後期には更に自主的な学習態度が要求される。前期と同じように「参加型」のクラスの中で、英語を用いて課題の発表やプロジェクトなども行われる。英語力の向上の程度は各自の学習態度に大きく左右されることは変わらない。更に積極的・自主的に学ぶ習慣を身につけてもらいたい。また、TOEIC形式の練習も随時行う。	
	アラビア語初級 I	初めて外国語を学ぼうとする学生が一から学習していく初級（読本）のクラスである。I（前期）では、先ず文字の暗唱と発音の練習、文の読み方と文意の理解など、最初に学ばなくてはならない重要な事柄をしっかりと学習していく。発音には特に重点を置く。学習の仕方は言語によって多少異なるが、正確な発音を覚え、正しく読んで、文意を理解できるようにすることは、どの言語でも同じであり、この科目の目指すところである。	
共	アラビア語初級 II	初めて外国語を学ぼうとする学生が一から学習していく初級（読本）のクラスである。II（後期）では、読み方と訳し方について勉強していくことになる。学習の仕方は言語によって多少異なるが、正確な発音を覚え、正しく読んで、文意を理解できるようにすることは、どの言語でも同じであり、この科目の目指すところである。	
	アラビア語初級 III	初めて外国語を学ぼうとする学生が一から学習していくもう一つの初級（文法）クラスである。III（前期）では、先ず発音と読み方を覚えた後、動詞と名詞の特徴を学んでいく。学習の方法は、言語の性質や教材によって異なるが、文法を習得しながら文章を理解していくことは、初級の学習には欠かせない勉強法の一つである。ここでは、名詞や動詞を始めとするいろいろな品詞の形態とその使い方を学びながら、言葉の体系と文の構造を学習していく。	
科	アラビア語初級 IV	初めて外国語を学ぼうとする学生が一から学習していくもう一つの初級（文法）クラスである。IV（後期）では、基礎的な種々の文法事項について勉強していく。学習の方法は、言語の性質や教材によって異なるが、文法を習得しながら文章を理解していくことは、初級の学習には欠かせない勉強法の一つである。ここでは、名詞や動詞を始めとするいろいろな品詞の形態とその使い方を学びながら、言葉の体系と文の構造を学習していく。	
	アラビア語中級 I	外国語初級を履修した学生がさらに力をつけるために学んでいく科目の一つが、読解の学習である。ここでは、ある程度まとまった内容の読み物をじっくり読んでいくことになる。教材を通して、読み方と文法の確認を行いながら、読解力の向上に努めていく。	
目	アラビア語中級 II	外国語中級 I と同様に読解力の向上を目標とする。学習の仕方は、外国語中級 I と変わりはなく、教材の読み物を最後まで正確に読んでいく。易しくとも、一冊のテキストを終わるまで読みきることは、学習者にとって大きな自信となるはずである。	
	アラビア語中級 III	外国語初級を履修した学生がさらに語学力の向上を図っていくもう一つの学習が、文法を体系的に理解していくことである。外国語中級 III では、テキストに従いながら、これまでの学習で見落とししていた部分や不十分だった知識を確認し、少しずつ言葉の体系や文の構造を学んでいく。	
	アラビア語中級 IV	読解と並んで文章構造の体系的な理解は、次へのステップに欠かせない重要な学習である。外国語中級 IV では、外国語中級 III と同様に文法体系の理解を目標とする。各言語独自の慣用的な表現や言い回しなどを学ぶことで、今までの知識を補強し、言葉の構造と特徴を理解していく。	

授 業 科 目 の 概 要			
(経営学部 データサイエンス学科)			
区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
全	中国語初級Ⅰ	初めて外国語を学ぼうとする学生が一から学習していく初級（読本）のクラスである。この科目では、まず文字の暗唱と発音の練習、文の読み方と文意の理解など、最初に学ばなくてはいけない重要な事柄をしっかりと学習していく。発音には特に重点を置く。学習の仕方は言語によって多少異なるが、正確な発音を覚え、正しく読んで、文意を理解できるようにすることは、どの言語でも同じであり、この科目の目指すところである。	
	中国語初級Ⅱ	初めて外国語を学ぼうとする学生が一から学習していく初級（読本）のクラスである。この科目では、読み方と訳し方について勉強していくことになる。学習の仕方は言語によって多少異なるが、正確な発音を覚え、正しく読んで、文意を理解できるようにすることは、どの言語でも同じであり、この科目の目指すところである。	
	中国語初級Ⅲ	初めて外国語を学ぼうとする学生が一から学習していくもう一つの初級（文法）クラスである。この科目では、まず発音と読み方を覚えた後、動詞と名詞の特徴を学んでいく。学習の方法は、言語の性質や教材によって異なるが、文法を習得しながら文章を理解していくことは、初級の学習には欠かせない勉強法の一つである。ここでは、名詞や動詞を始めとするいろいろな品詞の形態とその使い方を学びながら、言葉の体系と文の構造を学習していく。	
	中国語初級Ⅳ	初めて外国語を学ぼうとする学生が一から学習していくもう一つの初級（文法）クラスである。この科目では、基礎的な種々の文法事項について勉強していく。学習の方法は、言語の性質や教材によって異なるが、文法を習得しながら文章を理解していくことは、初級の学習には欠かせない勉強法の一つである。ここでは、名詞や動詞を始めとするいろいろな品詞の形態とその使い方を学びながら、言葉の体系と文の構造を学習していく。	
共	中国語コミュニケーションⅠ	コミュニケーション・ツールとしての外国語能力を養成していく実践科目の一つが、初級の外国語コミュニケーションである。Ⅰ（前期）では、主に基礎的な会話能力を養うために、ネイティブ・スピーカーのもとで日常よく使われる表現や簡単な言い回しを学んでいく。授業の仕方は、言語や教員によって様々だが、受講生はここで生きた言葉の使い方を学んでいく。	
	中国語コミュニケーションⅡ	コミュニケーション・ツールとしての外国語能力を養成していく実践科目の一つが、初級の外国語コミュニケーションである。Ⅱ（後期）も、Ⅰと同様にコミュニケーション・ツールとして外国語を使えるような場が与えられ、その訓練をネイティブと一緒にやっていく。授業の仕方は、言語や教員によって様々だが、受講生はここで生きた言葉の使い方を学んでいく。	
	中国語コミュニケーションⅢ	コミュニケーション・ツールとしての外国語能力を養成していくもう一つの実践科目が、中級の外国語コミュニケーションである。Ⅲ（前期）では、会話能力の向上を図ることはもちろんだが、特に外国語で討論する技術を学び、発表する訓練を行っていく。授業の進め方は、言語や担当者によって異なるが、受講生がコミュニケーション・ツールとして外国語をスムーズに運用できるよう学習していく。	
通	中国語コミュニケーションⅣ	コミュニケーション・ツールとしての外国語能力を養成していくもう一つの実践科目が、中級の外国語コミュニケーションである。Ⅳ（後期）では、受講生はネイティブのもとで普通の授業と同じように積極的に外国語で意見を述べ、議論していくことになる。授業の進め方は、言語や担当者によって異なるが、受講生がコミュニケーション・ツールとして外国語をスムーズに運用できるよう学習していく。	
	中国語中級Ⅰ	中国語初級を履修した学生がさらに力をつけるために学んでいく科目の一つが、読解の学習である。ここでは、ある程度まとまった内容の読み物をじっくり読んでいくことになる。教材を通して、読み方と文法の確認を行いながら、読解力の向上に努めていく。	
目	中国語中級Ⅱ	「中国語中級Ⅰ」と同様に読解力の向上を目標とする。学習の仕方は、「中国語中級Ⅰ」と変わりはないが、教材の読み物を最後まで正確に読んでいく。易しくとも、一冊のテキストを終わりまで読みきくことは、学習者にとって大きな自信となるはずである。	
	中国語中級Ⅲ	中国語初級を履修した学生がさらに語学力の向上を図っていくもう一つの学習が、文法を体系的に理解していくことである。「中国語中級Ⅲ」では、テキストに従いながら、これまでの学習で見落とししていた部分や不十分だった知識を確認し、少しずつ言葉の体系や文の構造を学んでいく。	
	中国語中級Ⅳ	読解と並んで文章構造の体系的な理解は、次へのステップに欠かせない重要な学習である。「中国語中級Ⅳ」では、「中国語中級Ⅲ」と同様に文法体系の理解を目標とする。各言語独自の慣用的な表現や言い回しなどを学ぶことで、今までの知識を補強し、言葉の構造と特徴を理解していく。	
	中国語応用Ⅰ	一年次ないし二年次で外国語を履修した学生がさらに学力を伸ばしていく応用科目の一つが、異文化を通しての語学学習である。Ⅰ（前期）では、新聞や雑誌などの教材を読むことで語学力を養い、併せて人間や文化についても学んでいく。語学力を高めようとする場合には欠かせない言葉と異文化に対する理解をここで深めていくことになる。	

授 業 科 目 の 概 要			
(経営学部 データサイエンス学科)			
区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
全	中国語応用Ⅱ	一年次ないし二年次で外国語を履修した学生がさらに学力を伸ばしていく応用科目の一つが、異文化を通しての語学学習である。Ⅱ（後期）では、Ⅰと同じように文化的な問題に関する外国語の知識を修得しながら、さらに異文化理解を推し進めていく。語学力を高めようとする場合には欠かせない言葉と異文化に対する理解をここで深めていくことになる。	
	中国語応用Ⅲ	一年次ないし二年次で外国語を履修した学生がさらに力をつけていくもう一つの応用科目が、語学的観点からの学習である。Ⅲ（前期）では、各種のテキストを通して、様々な構文の把握、文章表現の方法、それに語法の体系的な理解などについて学んでいく。また授業内容から、この科目は各言語の検定試験の受験対策講座として利用することもできる。	
	中国語応用Ⅳ	一年次ないし二年次で外国語を履修した学生がさらに力をつけていくもう一つの応用科目が、語学的観点からの学習である。Ⅳ（後期）も、授業の仕方は原則としてⅢと変わらないが、様々な言葉や文章に触れながら語学の知識をさらに深めていくことになる。また授業内容から、この科目は各言語の検定試験の受験対策講座として利用することもできる。	
学	ドイツ語初級Ⅰ	初めて外国語を学ぼうとする学生が一から学習していく初級（読本）のクラスである。Ⅰ（前期）では、先ず文字の暗唱と発音の練習、文の読み方と文意の理解など、最初に学ばなくてはいけない重要な事柄をしっかりと学習していく。発音には特に重点を置く。学習の仕方は言語によって多少異なるが、正確な発音を覚え、正しく読んで、文意を理解できるようにすることは、どの言語でも同じであり、この科目の目指すところである。	
	ドイツ語初級Ⅱ	初めて外国語を学ぼうとする学生が一から学習していく初級（読本）のクラスである。Ⅱ（後期）では、読み方と訳し方について勉強していくことになる。学習の仕方は言語によって多少異なるが、正確な発音を覚え、正しく読んで、文意を理解できるようにすることは、どの言語でも同じであり、この科目の目指すところである。	
	ドイツ語初級Ⅲ	初めて外国語を学ぼうとする学生が一から学習していくもう一つの初級（文法）クラスである。Ⅲ（前期）では、先ず発音と読み方を覚えた後、動詞と名詞の特徴を学んでいく。学習の方法は、言語の性質や教材によって異なるが、文法を習得しながら文章を理解していくことは、初級の学習には欠かせない勉強法の一つである。ここでは、名詞や動詞を始めとするいろいろな品詞の形態とその使い方を学びながら、言葉の体系と文の構造を学習していく。	
共	ドイツ語初級Ⅳ	初めて外国語を学ぼうとする学生が一から学習していくもう一つの初級（文法）クラスである。Ⅳ（後期）では、基礎的な種々の文法事項について勉強していく。学習の方法は、言語の性質や教材によって異なるが、文法を習得しながら文章を理解していくことは、初級の学習には欠かせない勉強法の一つである。ここでは、名詞や動詞を始めとするいろいろな品詞の形態とその使い方を学びながら、言葉の体系と文の構造を学習していく。	
	ドイツ語コミュニケーションⅠ	コミュニケーション・ツールとしての外国語能力を養成していく実践科目の一つが、初級の外国語コミュニケーションである。Ⅰ（前期）では、主に基礎的な会話能力を養うために、ネイティブ・スピーカーのもとで日常よく使われる表現や簡単な言い回しを学んでいく。授業の仕方は、言語や教員によって様々だが、受講生はここで生きた言葉の使い方を学んでいく。	
	ドイツ語コミュニケーションⅡ	コミュニケーション・ツールとしての外国語能力を養成していく実践科目の一つが、初級の外国語コミュニケーションである。Ⅱ（後期）も、Ⅰと同様にコミュニケーション・ツールとして外国語を使えるような場与えられ、その訓練をネイティブと一緒にやっていく。授業の仕方は、言語や教員によって様々だが、受講生はここで生きた言葉の使い方を学んでいく。	
科	ドイツ語コミュニケーションⅢ	コミュニケーション・ツールとしての外国語能力を養成していくもう一つの実践科目が、中級の外国語コミュニケーションである。Ⅲ（前期）では、会話能力の向上を図ることはもちろんだが、特に外国語で討論する技術を学び、発表する訓練を行っている。授業の進め方は、言語や担当者によって異なるが、受講生がコミュニケーション・ツールとして外国語をスムーズに運用できるよう学習していく。	
	ドイツ語コミュニケーションⅣ	コミュニケーション・ツールとしての外国語能力を養成していくもう一つの実践科目が、中級の外国語コミュニケーションである。Ⅳ（後期）では、受講生はネイティブのもとで普通の授業と同じように積極的に外国語で意見を述べ、議論していくことになる。授業の進め方は、言語や担当者によって異なるが、受講生がコミュニケーション・ツールとして外国語をスムーズに運用できるよう学習していく。	
	ドイツ語中級Ⅰ	外国語初級を履修した学生がさらに力をつけるために学んでいく科目の一つが、読解の学習である。ここでは、ある程度まとまった内容の読み物をじっくり読んでいくことになる。教材を通して、読み方と文法の確認を行いながら、読解力の向上に努めていく。	

授 業 科 目 の 概 要			
(経営学部 データサイエンス学科)			
区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
全	ドイツ語中級Ⅱ	外国語中級Ⅰと同様に読解力の向上を目標とする。学習の仕方は、外国語中級Ⅰと変わりはないが、教材の読み物を最後まで正確に読んでいく。易しくとも、一冊のテキストを終わりまで読みきることは、学習者にとって大きな自信となるはずである。	
	ドイツ語中級Ⅲ	外国語初級を履修した学生がさらに語学力の向上を図っていくもう一つの学習が、文法を体系的に理解していくことである。外国語中級Ⅲでは、テキストに従いながら、これまでの学習で見落としていた部分や不十分だった知識を確認し、少しずつ言葉の体系や文の構造を学んでいく。	
	ドイツ語中級Ⅳ	読解と並んで文章構造の体系的理解は、次へのステップに欠かせない重要な学習である。外国語中級Ⅳでは、外国語中級Ⅲと同様に文法体系の理解を目標とする。各言語独自の慣用的な表現や言い回しなどを学ぶことで、今までの知識を補強し、言葉の構造と特徴を理解していく。	
	ドイツ語応用Ⅰ	一年次ないし二年次で外国語を履修した学生がさらに学力を伸ばしていく応用科目の一つが、異文化を通しての語学学習である。Ⅰ（前期）では、新聞や雑誌などの教材を読むことで語学力を養い、併せて人間や文化についても学んでいく。語学力を高めようとする場合には欠かせない言葉と異文化に対する理解をここで深めていくことになる。	
学	ドイツ語応用Ⅱ	一年次ないし二年次で外国語を履修した学生がさらに学力を伸ばしていく応用科目の一つが、異文化を通しての語学学習である。Ⅱ（後期）では、Ⅰと同じように文化的な問題に関する外国語の知識を修得しながら、さらに異文化理解を推し進めていく。語学力を高めようとする場合には欠かせない言葉と異文化に対する理解をここで深めていくことになる。	
	ドイツ語応用Ⅲ	一年次ないし二年次で外国語を履修した学生がさらに力をつけていくもう一つの応用科目が、語学的観点からの学習である。Ⅲ（前期）では、各種のテキストを通して、様々な構文の把握、文章表現の方法、それに語法の体系的な理解などについて学んでいく。また授業内容から、この科目は各言語の検定試験の受験対策講座として利用することもできる。	
	ドイツ語応用Ⅳ	一年次ないし二年次で外国語を履修した学生がさらに力をつけていくもう一つの応用科目が、語学的観点からの学習である。Ⅳ（後期）も、授業の仕方は原則としてⅢと変わらないが、様々な言葉や文章に触れながら語学の知識をさらに深めていくことになる。また授業内容から、この科目は各言語の検定試験の受験対策講座として利用することもできる。	
	共	選択英語Ⅰ	読解力と異文化理解の向上を図ることを目的とする科目である。指定テキストを使用し、日米の文化比較的視点から描かれた、様々な場面を想定したリーディングの読解を通して、異文化理解の実際を経験する。フレッシュマン・イングリッシュで学んだ伝達のための訓練を有機的に結び付け、効果的な英語運用能力の向上につなげていく。
選択英語Ⅱ		「選択英語Ⅰ」と同じく読解力と異文化理解の向上を図ることを目的とする科目である。「選択英語Ⅰ」で学んだことを発展させ、指定テキストおよび関連する副教材を通して、特に日米間の事例を検討しながら、異文化理解の実際について考察を深めることによって、更なる英語運用能力の向上につなげていく。	
選択英語Ⅲ		文法知識の定着および読解力の向上を図ることを目的とする科目である。指定テキストを使用して、実際のコミュニケーションの場で必要な文法・語法を身に付けるとともに、主として米英の歴史・文化・社会などに触れた文章の読解を通して、様々なメディア媒体による英文読解力を向上させることを目指す。	
選択英語Ⅳ		「選択英語Ⅲ」と同様、文法知識の定着と読解力の向上を図ることを目的とする科目である。指定テキストおよび関連する副教材等を使用して、重要な文法・語法の用例を具体的な文脈に即して学び、読解力向上に必要な異文化理解の重要性についても学ぶ。様々なメディア媒体によるリーディング教材を使用することで、更なる英文読解力向上を目指す。	
科	英語コミュニケーションⅠ	さまざまな文献、聴覚・視覚教材、コンピューター教材を用いて、英語を聴き取る能力、英語を話す能力を総合的に向上させるためのクラスである。自分の考えや意見を英語で表現する技術を身につけるためには、積極的に参加することが重要である。多様な形で英語を学習することはアメリカ派遣留学プログラムに参加する学生にとっても有益である。	
	英語コミュニケーションⅡ	「英語コミュニケーションⅠ」と同じように、総合的な英語力の向上を目指す。さまざまなテーマを取りあげ、その内容について「英語で」読み、聴き、書き、話すことによって、英語使用に慣れるようにする。アメリカ派遣留学プログラムに参加する学生にとっても役に立つと考えられる。	
	英語コミュニケーションⅢ	この授業では異文化間の問題、サバイバルのための会話、アメリカの大学での学習に必要な英語に重点をおいて指導する。英文作法やプレゼンテーション、また、ディスカッションの技術なども含めて学ぶ。これらは特にアメリカ派遣留学プログラムに参加する学生にとっては準備として必要なスタディ・スキルである。	

授 業 科 目 の 概 要			
(経営学部 データサイエンス学科)			
区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
全	英語コミュニケーションⅣ	ある程度のレベルで英語が使用できる学生を対象とするクラスである。その能力の維持と、さらに向上させることを目的とする。ディスカッションやライティングなども含まれ、多少高度なレベルで、英語のコミュニケーションが図れるようにする。	
	英語コミュニケーションⅤ	留学などで、ある程度英語使用の経験があり、英語でのコミュニケーションが可能な学生を対象とする。それをさらに向上させるために、日常会話のレベルではなく、学術的な場面や職場に必要な英語などを学ぶ。アメリカ派遣留学プログラムに参加した学生にも適したクラスである。	
	英語コミュニケーションⅥ	「英語コミュニケーションⅤ」に続いて英語能力の維持を図り、より高度で実践的な英語使用の場面を通して、さらにその能力を高めることを目的とするクラスである。アメリカ派遣留学プログラムに参加した学生にも適したクラスである。	
学	英語コミュニケーションⅦ	上級レベルの受講者を対象として、多様な場面での英語使用を想定し、難度の高い教材を使用し応用力の養成を目指す。また、教えることを目的とした、コミュニケーション指導についても学ぶ。オーラル・コミュニケーションを重視する傾向がますます強くなっている現状を踏まえ、実践的な英語使用について学ぶ。	
	英語コミュニケーションⅧ	「英語コミュニケーションⅦ」と同じように、上級レベルのクラスである。言語機能を中心に英語使用に関して分析能力も養えるように段階的に学ぶ。それによってコミュニケーションの構造・機能を理解し、指導の際にも有益な知識を身につける。具体的な場面を想定し、それぞれの状況に応じた構文を基礎から応用という段階を踏まえて学び、洗練された表現が使用できることを目指す。	
共	選択英語Ⅴ	英文の読解力と英語による表現力の向上を目指す科目である。指定テキストのリーディング教材および関連する副教材等を使用して、英語の運用能力を高めるために必要な文法事項の確認、語彙の適切な使用、語法についての学習などを、「表現する」という観点から重点的に学ぶことによって、ライティングおよびスピーキングの表現力の向上につなげていくことを目指す。	
	選択英語Ⅵ	「選択英語Ⅴ」と同様、文法知識の定着と英語による表現力の向上を図ることを目的とする科目である。指定テキストおよび関連する副教材等を使用して、特に意見や主張を英語で「表現する」という観点から文法・語彙・語法の学習を行い、ライティングおよびスピーキングの表現力の向上につなげていくことを目指す。	
	選択英語Ⅶ	スピーキング及びリスニングに比重をおきつつ、英語の4技能を総合的に向上させるための科目である。ある程度まとまった内容をもった英文を口頭で表現し、また長めの英文を聴き取ることもできるようになることを目指し、これまでの英語学習で身に付けた英語運用能力をさらに発展させることを目指す。	
通	選択英語Ⅷ	「選択英語Ⅶ」に続くクラスであり、必修英語科目の総仕上げを目的とする科目である。これまでに身に付けた英語運用能力をベースにして、特に聴解力や口頭表現力の更なる向上を目指す。スピーチやプレゼンテーションに求められる、トピックの選択、リサーチの方法、内容の構成、実際の発表といった一連の過程を経験することで、より高度な英語運用能力へとつなげる。	
	フランス語初級Ⅰ	初めて外国語を学ぼうとする学生が一から学習していく初級（読本）のクラスである。Ⅰ（前期）では、先ず文字の暗唱と発音の練習、文の読み方と文意の理解など、最初に学ばなくてはいけない重要な事柄をしっかりと学習していく。発音には特に重点を置く。学習の仕方は言語によって多少異なるが、正確な発音を覚え、正しく読んで、文意を理解できるようにすることは、どの言語でも同じであり、この科目の目指すところである。	
科	フランス語初級Ⅱ	初めて外国語を学ぼうとする学生が一から学習していく初級（読本）のクラスである。Ⅱ（後期）では、読み方と訳し方について勉強していくことになる。学習の仕方は言語によって多少異なるが、正確な発音を覚え、正しく読んで、文意を理解できるようにすることは、どの言語でも同じであり、この科目の目指すところである。	
	フランス語初級Ⅲ	初めて外国語を学ぼうとする学生が一から学習していくもう一つの初級（文法）クラスである。Ⅲ（前期）では、先ず発音と読み方を覚えた後、動詞と名詞の特徴を学んでいく。学習の方法は、言語の性質や教材によって異なるが、文法を習得しながら文章を理解していくことは、初級の学習には欠かせない勉強法の一つである。ここでは、名詞や動詞を始めとするいろいろな品詞の形態とその使い方を学びながら、言葉の体系と文の構造を学習していく。	
	フランス語初級Ⅳ	初めて外国語を学ぼうとする学生が一から学習していくもう一つの初級（文法）クラスである。Ⅳ（後期）では、基礎的な種々の文法事項について勉強していく。学習の方法は、言語の性質や教材によって異なるが、文法を習得しながら文章を理解していくことは、初級の学習には欠かせない勉強法の一つである。ここでは、名詞や動詞を始めとするいろいろな品詞の形態とその使い方を学びながら、言葉の体系と文の構造を学習していく。	
	フランス語初級Ⅳ	初めて外国語を学ぼうとする学生が一から学習していくもう一つの初級（文法）クラスである。Ⅳ（後期）では、基礎的な種々の文法事項について勉強していく。学習の方法は、言語の性質や教材によって異なるが、文法を習得しながら文章を理解していくことは、初級の学習には欠かせない勉強法の一つである。ここでは、名詞や動詞を始めとするいろいろな品詞の形態とその使い方を学びながら、言葉の体系と文の構造を学習していく。	

授 業 科 目 の 概 要			
(経営学部 データサイエンス学科)			
区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
全	フランス語コミュニケーションⅠ	コミュニケーション・ツールとしての外国語能力を養成していく実践科目の一つが、初級の外国語コミュニケーションである。Ⅰ（前期）では、主に基礎的な会話能力を養うために、ネイティブ・スピーカーのもとで日常よく使われる表現や簡単な言い回しを学んでいく。授業の仕方は、言語や教員によって様々だが、受講生はここで生きた言葉の使い方を学んでいく。	
	フランス語コミュニケーションⅡ	コミュニケーション・ツールとしての外国語能力を養成していく実践科目の一つが、初級の外国語コミュニケーションである。Ⅱ（後期）も、Ⅰと同様にコミュニケーション・ツールとして外国語を使えるような場が与えられ、その訓練をネイティブと一緒に行っていく。授業の仕方は、言語や教員によって様々だが、受講生はここで生きた言葉の使い方を学んでいく。	
	フランス語コミュニケーションⅢ	コミュニケーション・ツールとしての外国語能力を養成していくもう一つの実践科目が、中級の外国語コミュニケーションである。Ⅲ（前期）では、会話能力の向上を図ることはもちろんだが、特に外国語で討論する技術を学び、発表する訓練を行っていく。授業の進め方は、言語や担当者によって異なるが、受講生がコミュニケーション・ツールとして外国語をスムーズに運用できるよう学習していく。	
	フランス語コミュニケーションⅣ	コミュニケーション・ツールとしての外国語能力を養成していくもう一つの実践科目が、中級の外国語コミュニケーションである。Ⅳ（後期）では、受講生はネイティブのもとで普通の授業と同じように積極的に外国語で意見を述べ、議論していくことになる。授業の進め方は、言語や担当者によって異なるが、受講生がコミュニケーション・ツールとして外国語をスムーズに運用できるよう学習していく。	
学	フランス語中級Ⅰ	外国語初級を履修した学生がさらに力をつけるために学んでいく科目の一つが、読解の学習である。ここでは、ある程度まとまった内容の読み物をじっくり読んでいくことになる。教材を通して、読み方と文法の確認を行いながら、読解力の向上に努めていく。	
	フランス語中級Ⅱ	外国語中級Ⅰと同様に読解力の向上を目標とする。学習の仕方は、外国語中級Ⅰと変わりはないが、教材の読み物を最後まで正確に読んでいく。易しくとも、一冊のテキストを終わりまで読みきくことは、学習者にとって大きな自信となるはずである。	
	フランス語中級Ⅲ	外国語初級を履修した学生がさらに語学力の向上を図っていくもう一つの学習が、文法を体系的に理解していくことである。外国語中級Ⅲでは、テキストに従いながら、これまでの学習で見落とししていた部分や不十分だった知識を確認し、少しずつ言葉の体系や文の構造を学んでいく。	
通	フランス語中級Ⅳ	読解と並んで文章構造の体系的な理解は、次へのステップに欠かせない重要な学習である。外国語中級Ⅳでは、外国語中級Ⅲと同様に文法体系の理解を目標とする。各言語独自の慣用的な表現や言い回しなどを学ぶことで、今までの知識を補強し、言葉の構造と特徴を理解していく。	
	フランス語応用Ⅰ	一年次ないし二年次で外国語を履修した学生がさらに学力を伸ばしていく応用科目の一つが、異文化を通しての語学学習である。Ⅰ（前期）では、新聞や雑誌などの教材を読むことで語学力を養い、併せて人間や文化についても学んでいく。語学力を高めようとする場合には欠かせない言葉と異文化に対する理解をここで深めていくことになる。	
科	フランス語応用Ⅱ	一年次ないし二年次で外国語を履修した学生がさらに学力を伸ばしていく応用科目の一つが、異文化を通しての語学学習である。Ⅱ（後期）では、Ⅰと同じように文化的な問題に関する外国語の知識を修得しながら、さらに異文化理解を推し進めていく。語学力を高めようとする場合には欠かせない言葉と異文化に対する理解をここで深めていくことになる。	
	フランス語応用Ⅲ	一年次ないし二年次で外国語を履修した学生がさらに力をつけていくもう一つの応用科目が、語学的観点からの学習である。Ⅲ（前期）では、各種のテキストを通して、様々な構文の把握、文章表現の方法、それに語法の体系的な理解などについて学んでいく。また授業内容から、この科目は各言語の検定試験の受験対策講座として利用することもできる。	
	フランス語応用Ⅳ	一年次ないし二年次で外国語を履修した学生がさらに力をつけていくもう一つの応用科目が、語学的観点からの学習である。Ⅳ（後期）も、授業の仕方は原則としてⅢと変わらないが、様々な言葉や文章に触れながら語学の知識をさらに深めていくことになる。また授業内容から、この科目は各言語の検定試験の受験対策講座として利用することもできる。	
目	ヒンディー語初級Ⅰ	初めて外国語を学ぼうとする学生が一から学習していく初級（読本）のクラスである。Ⅰ（前期）では、先ず文字の暗唱と発音の練習、文の読み方と文意の理解など、最初に学ばなくてはならない重要な事柄をしっかりと学習していく。発音には特に重点を置く。学習の仕方は言語によって多少異なるが、正確な発音を覚え、正しく読んで、文意を理解できるようにすることは、どの言語でも同じであり、この科目の目指すところである。	

授 業 科 目 の 概 要			
(経営学部 データサイエンス学科)			
区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
全	ヒンディー語初級Ⅱ	初めて外国語を学ぼうとする学生が一から学習していく初級（読本）のクラスである。Ⅱ（後期）では、読み方と訳し方について勉強していくことになる。学習の仕方は言語によって多少異なるが、正確な発音を覚え、正しく読んで、文意を理解できるようにすることは、どの言語でも同じであり、この科目の目指すところである。	
	ヒンディー語初級Ⅲ	初めて外国語を学ぼうとする学生が一から学習していくもう一つの初級（文法）クラスである。Ⅲ（前期）では、まず発音と読み方を覚えた後、動詞と名詞の特徴を学んでいく。学習の方法は、言語の性質や教材によって異なるが、文法を習得しながら文章を理解していくことは、初級の学習には欠かせない勉強法の一つである。ここでは、名詞や動詞を始めとするいろいろな品詞の形態とその使い方を学びながら、言葉の体系と文の構造を学習していく。	
	ヒンディー語初級Ⅳ	初めて外国語を学ぼうとする学生が一から学習していくもう一つの初級（文法）クラスである。Ⅳ（後期）では、基礎的な種々の文法事項について勉強していく。学習の方法は、言語の性質や教材によって異なるが、文法を習得しながら文章を理解していくことは、初級の学習には欠かせない勉強法の一つである。ここでは、名詞や動詞を始めとするいろいろな品詞の形態とその使い方を学びながら、言葉の体系と文の構造を学習していく。	
	ヒンディー語中級Ⅰ	外国語初級を履修した学生がさらに力をつけるために学んでいく科目の一つが、読解の学習である。ここでは、ある程度まとまった内容の読み物をじっくり読んでいくことになる。教材を通して、読み方と文法の確認を行いながら、読解力の向上に努めていく。	
	ヒンディー語中級Ⅱ	外国語中級Ⅰと同様に読解力の向上を目標とする。学習の仕方は、外国語中級Ⅰと変わりはないが、教材の読み物を最後まで正確に読んでいく。易しくとも、一冊のテキストを終わりまで読みきくことは、学習者にとって大きな自信となるはずである。	
	ヒンディー語中級Ⅲ	外国語初級を履修した学生がさらに語学力の向上を図っていくもう一つの学習が、文法を体系的に理解していくことである。外国語中級Ⅲでは、テキストに従いながら、これまでの学習で見落としていた部分や不十分だった知識を確認し、少しずつ言葉の体系や文の構造を学んでいく。	
学	ヒンディー語中級Ⅳ	読解と並んで文章構造の体系的な理解は、次へのステップに欠かせない重要な学習である。外国語中級Ⅳでは、外国語中級Ⅲと同様に文法体系の理解を目標とする。各言語独自の慣用的な表現や言い回しなどを学ぶことで、今までの知識を補強し、言葉の構造と特徴を理解していく。	
	インドネシア語初級Ⅰ	初めて外国語を学ぼうとする学生が一から学習していく初級（読本）のクラスである。この科目では、まず文字の暗唱と発音の練習、文の読み方と文意の理解など、最初に学ばなくてはならない重要な事柄をしっかりと学習していく。発音には特に重点を置く。学習の仕方は言語によって多少異なるが、正確な発音を覚え、正しく読んで、文意を理解できるようにすることは、どの言語でも同じであり、この科目の目指すところである。	
	インドネシア語初級Ⅱ	初めて外国語を学ぼうとする学生が一から学習していく初級（読本）のクラスである。この科目では、読み方と訳し方について勉強していくことになる。学習の仕方は言語によって多少異なるが、正確な発音を覚え、正しく読んで、文意を理解できるようにすることは、どの言語でも同じであり、この科目の目指すところである。	
	インドネシア語初級Ⅲ	初めて外国語を学ぼうとする学生が一から学習していくもう一つの初級（文法）クラスである。この科目では、まず発音と読み方を覚えた後、動詞と名詞の特徴を学んでいく。学習の方法は、言語の性質や教材によって異なるが、文法を習得しながら文章を理解していくことは、初級の学習には欠かせない勉強法の一つである。ここでは、名詞や動詞を始めとするいろいろな品詞の形態とその使い方を学びながら、言葉の体系と文の構造を学習していく。	
科	インドネシア語初級Ⅳ	初めて外国語を学ぼうとする学生が一から学習していくもう一つの初級（文法）クラスである。この科目では、基礎的な種々の文法事項について勉強していく。学習の方法は、言語の性質や教材によって異なるが、文法を習得しながら文章を理解していくことは、初級の学習には欠かせない勉強法の一つである。ここでは、名詞や動詞を始めとするいろいろな品詞の形態とその使い方を学びながら、言葉の体系と文の構造を学習していく。	
	インドネシア語中級Ⅰ	インドネシア語初級を履修した学生がさらに力をつけるために学んでいく科目の一つが、読解の学習である。ここでは、ある程度まとまった内容の読み物をじっくり読んでいくことになる。教材を通して、読み方と文法の確認を行いながら、読解力の向上に努めていく。	
	インドネシア語中級Ⅱ	「インドネシア語中級Ⅰ」と同様に読解力の向上を目標とする。学習の仕方は、「インドネシア語中級Ⅰ」と変わりはないが、教材の読み物を最後まで正確に読んでいく。易しくとも、一冊のテキストを終わりまで読みきくことは、学習者にとって大きな自信となるはずである。	

授 業 科 目 の 概 要			
(経営学部 データサイエンス学科)			
区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
全	インドネシア語中級Ⅲ	インドネシア語初級を履修した学生がさらに語学力の向上を図っていくもう一つの学習が、文法を体系的に理解していくことである。「インドネシア語中級Ⅲ」では、テキストに従いながら、これまでの学習で見落としていた部分や不十分だった知識を確認し、少しずつ言葉の体系や文の構造を学んでいく。	
	インドネシア語中級Ⅳ	読解と並んで文章構造の体系的理解は、次へのステップに欠かせない重要な学習である。「インドネシア語中級Ⅳ」では、「インドネシア語中級Ⅲ」と同様に文法体系の理解を目標とする。各言語独自の慣用的な表現や言い回しなどを学ぶことで、今までの知識を補強し、言葉の構造と特徴を理解していく。	
	日本語Ⅰ	日本語科目では、大学での学習に必要な基礎的な日本語の技能と知識を学習する。具体的には、テキストを読む能力、講義を聴きノートをとる能力、情報を集め調べる能力、発表する能力、レポートを作成する能力等を養成する。 この科目では、文法能力を育成し正確な文を作成できるようにするため、文法・文型の意味と使い方を学習し、運用能力を養う。	
学	日本語Ⅱ	日本語科目では、大学での学習に必要な基礎的な日本語の技能と知識を学習する。具体的には、テキストを読む能力、講義を聴きノートをとる能力、情報を集め調べる能力、発表する能力、レポートを作成する能力等を養成する。 この科目では、講義やニュース等を視聴し、内容を理解し要約する能力を養う。	
	日本語Ⅲ	日本語科目では、大学での学習に必要な基礎的な日本語の技能と知識を学習する。具体的には、テキストを読む能力、講義を聴きノートをとる能力、情報を集め調べる能力、発表する能力、レポートを作成する能力等を養成する。 この科目では、社会的・文化的なトピックのアカデミックな内容の文章を読み、自らの意見を述べる能力を養う。	
	日本語Ⅳ	日本語科目では、大学での学習に必要な基礎的な日本語の技能と知識を学習する。具体的には、テキストを読む能力、講義を聴きノートをとる能力、情報を集め調べる能力、発表する能力、レポートを作成する能力等を養成する。 この科目は、学部の専門科目を学習する際に必要な専門的な語彙や知識およびレポート作成の技術を学び、専門科目のレポート作成に備える。	
共	日本語Ⅴ	日本語科目では、大学での学習に必要な基礎的な日本語の技能と知識を学習する。具体的には、テキストを読む能力、講義を聴きノートをとる能力、情報を集め調べる能力、発表する能力、レポートを作成する能力等を養成する。 この科目では、「日本語Ⅰ」を受け、より高度な文法能力を育成し正確な文を作成できるようにするため、文法・文型の意味と使い方を学習し、運用能力を養う。	
	日本語Ⅵ	日本語科目では、大学での学習に必要な基礎的な日本語の技能と知識を学習する。具体的には、テキストを読む能力、講義を聴きノートをとる能力、情報を集め調べる能力、発表する能力、レポートを作成する能力等を養成する。 この科目では、「日本語Ⅱ」を受け、より難易度の高い講義やニュース等を視聴し、内容を理解し要約する能力を養う。	
	日本語Ⅶ	日本語科目では、大学での学習に必要な基礎的な日本語の技能と知識を学習する。具体的には、テキストを読む能力、講義を聴きノートをとる能力、情報を集め調べる能力、発表する能力、レポートを作成する能力等を養成する。 この科目では、「日本語Ⅲ」を受け、より難易度の高い社会的・文化的なトピックのアカデミックな内容の文章を読み、自らの意見を述べる能力を養う。	
通	日本語Ⅷ	日本語科目では、大学での学習に必要な基礎的な日本語の技能と知識を学習する。具体的には、テキストを読む能力、講義を聴きノートをとる能力、情報を集め調べる能力、発表する能力、レポートを作成する能力等を養成する。 この科目は、学部の専門科目を学習する際に必要な専門的な語彙や知識を学び、専門的な内容のレポートを作成する。	
	日本語Ⅷ	日本語科目では、大学での学習に必要な基礎的な日本語の技能と知識を学習する。具体的には、テキストを読む能力、講義を聴きノートをとる能力、情報を集め調べる能力、発表する能力、レポートを作成する能力等を養成する。 この科目は、学部の専門科目を学習する際に必要な専門的な語彙や知識を学び、専門的な内容のレポートを作成する。	
	日本語Ⅷ	日本語科目では、大学での学習に必要な基礎的な日本語の技能と知識を学習する。具体的には、テキストを読む能力、講義を聴きノートをとる能力、情報を集め調べる能力、発表する能力、レポートを作成する能力等を養成する。 この科目は、学部の専門科目を学習する際に必要な専門的な語彙や知識を学び、専門的な内容のレポートを作成する。	
科	上級日本語Ⅰ	留学生が日本で希望する職業に就きよりよい社会生活を営むためには、日本語能力試験N1に合格するのみならず、高得点の取得を目指し能力の向上に努め、その能力を活用することが求められる。この科目は、日本語学習でN1レベルに到達した留学生を対象に、学習を続けることにより一層の能力の向上を図り、将来必要となる上級の日本語能力を養うための科目である。春学期は、N1で100～120点を取得することを目標に、文法・読解を中心に学習する。	
	上級日本語Ⅱ	留学生が日本で希望する職業に就きよりよい社会生活を営むためには、日本語能力試験N1に合格するのみならず、高得点の取得を目指し能力の向上に努め、その能力を活用することが求められる。この科目は、日本語学習でN1レベルに到達した留学生を対象に、学習を続けることにより一層の能力の向上を図り、将来必要となる上級の日本語能力を養うための科目である。秋学期は、N1で110～140点を取得することを目標に、文法・読解を中心に学習する。	
	上級日本語Ⅲ	3、4年生次にゼミで論文を執筆する際には、日本語で内容や構成について考え準備し、適切な表現を用いて執筆することが求められる。春学期・秋学期を通じて論文作成について学ぶ科目であるが、まずこの科目では、論文執筆の技術を学びながら、ゼミに積極的に参加し、担当教師や友人に自分の論文について語るができることを目標とする。	
	上級日本語Ⅳ	3、4年生次にゼミで論文を執筆する際には、日本語で内容や構成について考え準備し、適切な表現を用いて執筆することが求められる。春学期・秋学期を通じて論文作成について学ぶ。 この科目では、「上級日本語Ⅲ」で学んだ論文作成の技術を確実に用いて、実際にゼミの論文の執筆を進める。	
目	上級日本語Ⅳ	3、4年生次にゼミで論文を執筆する際には、日本語で内容や構成について考え準備し、適切な表現を用いて執筆することが求められる。春学期・秋学期を通じて論文作成について学ぶ。 この科目では、「上級日本語Ⅲ」で学んだ論文作成の技術を確実に用いて、実際にゼミの論文の執筆を進める。	

授 業 科 目 の 概 要			
(経営学部 データサイエンス学科)			
区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
全	中級日本語Ⅰ	日本語科目では、大学での学習に必要な基礎的な日本語の技能と知識を学習する。具体的には、テキストを読む能力、講義を聴きノートをとる能力、情報を集め調べる能力、発表する能力、レポートを作成する能力等を養成する。 この科目では、文法能力を育成し正確な文を作成できるようにするため、文法・文型の意味と使い方を学習し、運用能力を養う。	
	中級日本語Ⅱ	日本語科目では、大学での学習に必要な基礎的な日本語の技能と知識を学習する。具体的には、テキストを読む能力、講義を聴きノートをとる能力、情報を集め調べる能力、発表する能力、レポートを作成する能力等を養成する。 この科目では、講義やニュース等を視聴し、内容を理解し要約する能力を養う。	
	中級日本語Ⅲ	日本語科目では、大学での学習に必要な基礎的な日本語の技能と知識を学習する。具体的には、テキストを読む能力、講義を聴きノートをとる能力、情報を集め調べる能力、発表する能力、レポートを作成する能力等を養成する。 この科目では、社会的・文化的なトピックのアカデミックな内容の文章を読み、自らの意見を述べる能力を養う。	
学	中級日本語Ⅳ	日本語科目では、大学での学習に必要な基礎的な日本語の技能と知識を学習する。具体的には、テキストを読む能力、講義を聴きノートをとる能力、情報を集め調べる能力、発表する能力、レポートを作成する能力等を養成する。 この科目では、「日本語Ⅰ」を受け、より高度な文法能力を育成し正確な文を作成できるようにするため、文法・文型の意味と使い方を学習し、運用能力を養う。	
	中級日本語Ⅴ	日本語科目では、大学での学習に必要な基礎的な日本語の技能と知識を学習する。具体的には、テキストを読む能力、講義を聴きノートをとる能力、情報を集め調べる能力、発表する能力、レポートを作成する能力等を養成する。 この科目では、「日本語Ⅱ」を受け、より難易度の高い講義やニュース等を視聴し、内容を理解し要約する能力を養う。	
	中級日本語Ⅵ	日本語科目では、大学での学習に必要な基礎的な日本語の技能と知識を学習する。具体的には、テキストを読む能力、講義を聴きノートをとる能力、情報を集め調べる能力、発表する能力、レポートを作成する能力等を養成する。 この科目では、「日本語Ⅲ」を受け、より難易度の高い社会的・文化的なトピックのアカデミックな内容の文章を読み、自らの意見を述べる能力を養う。	
共	韓国語初級Ⅰ	初めて外国語を学ぼうとする学生が一から学習していく初級（読本）のクラスである。この科目では、まず文字の暗唱と発音の練習、文の読み方と文意の理解など、最初に学ばなくてはならない重要な事柄をしっかりと学習していく。発音には特に重点を置く。学習の仕方は言語によって多少異なるが、正確な発音を覚え、正しく読んで、文意を理解できるようにすることは、どの言語でも同じであり、この科目の目指すところである。	
	韓国語初級Ⅱ	初めて外国語を学ぼうとする学生が一から学習していく初級（読本）のクラスである。この科目では、読み方と訳し方について勉強していくことになる。学習の仕方は言語によって多少異なるが、正確な発音を覚え、正しく読んで、文意を理解できるようにすることは、どの言語でも同じであり、この科目の目指すところである。	
	韓国語初級Ⅲ	初めて外国語を学ぼうとする学生が一から学習していくもう一つの初級（文法）クラスである。この科目では、まず発音と読み方を覚えた後、動詞と名詞の特徴を学んでいく。学習の方法は、言語の性質や教材によって異なるが、文法を習得しながら文章を理解していくことは、初級の学習には欠かせない勉強法の一つである。ここでは、名詞や動詞を始めとするいろいろな品詞の形態とその使い方を学びながら、言葉の体系と文の構造を学習していく。	
科	韓国語初級Ⅳ	初めて外国語を学ぼうとする学生が一から学習していくもう一つの初級（文法）クラスである。この科目では、基礎的な種々の文法事項について勉強していく。学習の方法は、言語の性質や教材によって異なるが、文法を習得しながら文章を理解していくことは、初級の学習には欠かせない勉強法の一つである。ここでは、名詞や動詞を始めとするいろいろな品詞の形態とその使い方を学びながら、言葉の体系と文の構造を学習していく。	
	韓国語コミュニケーションⅠ	コミュニケーション・ツールとしての外国語能力を養成していく実践科目の一つが、初級の外国語コミュニケーションである。Ⅰ（前期）では、主に基礎的な会話能力を養うために、ネイティブ・スピーカーのもとで日常よく使われる表現や簡単な言い回しを学んでいく。授業の仕方は、言語や教員によって様々だが、受講生はここで生きた言葉の使い方を学んでいく。	
	韓国語コミュニケーションⅡ	コミュニケーション・ツールとしての外国語能力を養成していく実践科目の一つが、初級の外国語コミュニケーションである。Ⅱ（後期）も、Ⅰと同様にコミュニケーション・ツールとして外国語を使えるような場が与えられ、その訓練をネイティブと一緒にやっていく。授業の仕方は、言語や教員によって様々だが、受講生はここで生きた言葉の使い方を学んでいく。	
目	韓国語コミュニケーションⅢ	コミュニケーション・ツールとしての外国語能力を養成していくもう一つの実践科目が、中級の外国語コミュニケーションである。Ⅲ（前期）では、会話能力の向上を図ることはもちろんだが、特に外国語で討論する技術を学び、発表する訓練を行っていく。授業の進め方は、言語や担当者によって異なるが、受講生がコミュニケーション・ツールとして外国語をスムーズに運用できるよう学習していく。	

授 業 科 目 の 概 要			
(経営学部 データサイエンス学科)			
区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
全	韓国語コミュニケーションⅣ	コミュニケーション・ツールとしての外国語能力を養成していくもう一つの実践科目が、中級の外国語コミュニケーションである。Ⅳ（後期）では、受講生はネイティブのもとで普通の授業と同じように積極的に外国語で意見を述べ、議論していくことになる。授業の進め方は、言語や担当者によって異なるが、受講生がコミュニケーション・ツールとして外国語をスムーズに運用できるよう学習していく。	
	韓国語中級Ⅰ	韓国語初級を履修した学生がさらに力をつけるために学んでいく科目の一つが、読解の学習である。ここでは、ある程度まとまった内容の読み物をじっくり読んでいくことになる。教材を通して、読み方と文法の確認を行いながら、読解力の向上に努めていく。	
	韓国語中級Ⅱ	「韓国語中級Ⅰ」と同様に読解力の向上を目標とする。学習の仕方は、「韓国語中級Ⅰ」と変わりはないが、教材の読み物を最後まで正確に読んでいく。易しくとも、一冊のテキストを終わりまで読みきくことは、学習者にとって大きな自信となるはずである。	
	韓国語中級Ⅲ	韓国語初級を履修した学生がさらに語学力の向上を図っていくもう一つの学習が、文法を体系的に理解していくことである。「韓国語中級Ⅲ」では、テキストに従いながら、これまでの学習で見落としていた部分や不十分だった知識を確認し、少しずつ言葉の体系や文の構造を学んでいく。	
学	韓国語中級Ⅳ	読解と並んで文章構造の体系的理解は、次へのステップに欠かせない重要な学習である。「韓国語中級Ⅳ」では、「韓国語中級Ⅲ」と同様に文法体系の理解を目標とする。各言語独自の慣用的な表現や言い回しなどを学ぶことで、今までの知識を補強し、言葉の構造と特徴を理解していく。	
	韓国語応用Ⅰ	一年次ないし二年次で外国語を履修した学生がさらに学力を伸ばしていく応用科目の一つが、異文化を通しての語学学習である。Ⅰ（前期）では、新聞や雑誌などの教材を読むことで語学力を養い、併せて人間や文化についても学んでいく。語学力を高めようとする場合には欠かせない言葉と異文化に対する理解をここで深めていくことになる。	
	韓国語応用Ⅱ	一年次ないし二年次で外国語を履修した学生がさらに学力を伸ばしていく応用科目の一つが、異文化を通しての語学学習である。Ⅱ（後期）では、Ⅰと同じように文化的な問題に関する外国語の知識を修得しながら、さらに異文化理解を推し進めていく。語学力を高めようとする場合には欠かせない言葉と異文化に対する理解をここで深めていくことになる。	
	韓国語応用Ⅲ	一年次ないし二年次で外国語を履修した学生がさらに力をつけていくもう一つの応用科目が、語学的観点からの学習である。Ⅲ（前期）では、各種のテキストを通して、様々な構文の把握、文章表現の方法、それに語法の体系的な理解などについて学んでいく。また授業内容から、この科目は各言語の検定試験の受験対策講座として利用することもできる。	
共	韓国語応用Ⅳ	一年次ないし二年次で外国語を履修した学生がさらに力をつけていくもう一つの応用科目が、語学的観点からの学習である。Ⅳ（後期）も、授業の仕方は原則としてⅢと変わらないが、様々な言葉や文章に触れながら語学の知識をさらに深めていくことになる。また授業内容から、この科目は各言語の検定試験の受験対策講座として利用することもできる。	
	韓国語応用Ⅲ	一年次ないし二年次で外国語を履修した学生がさらに力をつけていくもう一つの応用科目が、語学的観点からの学習である。Ⅲ（前期）では、各種のテキストを通して、様々な構文の把握、文章表現の方法、それに語法の体系的な理解などについて学んでいく。また授業内容から、この科目は各言語の検定試験の受験対策講座として利用することもできる。	
通	韓国語応用Ⅳ	一年次ないし二年次で外国語を履修した学生がさらに力をつけていくもう一つの応用科目が、語学的観点からの学習である。Ⅳ（後期）も、授業の仕方は原則としてⅢと変わらないが、様々な言葉や文章に触れながら語学の知識をさらに深めていくことになる。また授業内容から、この科目は各言語の検定試験の受験対策講座として利用することもできる。	
	韓国語応用Ⅲ	一年次ないし二年次で外国語を履修した学生がさらに力をつけていくもう一つの応用科目が、語学的観点からの学習である。Ⅲ（前期）では、各種のテキストを通して、様々な構文の把握、文章表現の方法、それに語法の体系的な理解などについて学んでいく。また授業内容から、この科目は各言語の検定試験の受験対策講座として利用することもできる。	
	韓国語応用Ⅱ	一年次ないし二年次で外国語を履修した学生がさらに力をつけていくもう一つの応用科目が、異文化を通しての語学学習である。Ⅱ（後期）では、Ⅰと同じように文化的な問題に関する外国語の知識を修得しながら、さらに異文化理解を推し進めていく。語学力を高めようとする場合には欠かせない言葉と異文化に対する理解をここで深めていくことになる。	
	韓国語応用Ⅰ	一年次ないし二年次で外国語を履修した学生がさらに学力を伸ばしていく応用科目の一つが、異文化を通しての語学学習である。Ⅰ（前期）では、新聞や雑誌などの教材を読むことで語学力を養い、併せて人間や文化についても学んでいく。語学力を高めようとする場合には欠かせない言葉と異文化に対する理解をここで深めていくことになる。	
科	モンゴル語初級Ⅰ	初めて外国語を学ぼうとする学生が一から学習していく初級（読本）のクラスである。Ⅰ（前期）では、先ず文字の暗唱と発音の練習、文の読み方と文意の理解など、最初に学ばなくてはいけない重要な事柄をしっかりと学習していく。発音には特に重点を置く。学習の仕方は言語によって多少異なるが、正確な発音を覚え、正しく読んで、文意を理解できるようにすることは、どの言語でも同じであり、この科目の目指すところである。	
	モンゴル語初級Ⅱ	初めて外国語を学ぼうとする学生が一から学習していく初級（読本）のクラスである。Ⅱ（後期）では、読み方と訳し方について勉強していくことになる。学習の仕方は言語によって多少異なるが、正確な発音を覚え、正しく読んで、文意を理解できるようにすることは、どの言語でも同じであり、この科目の目指すところである。	
	モンゴル語初級Ⅲ	初めて外国語を学ぼうとする学生が一から学習していくもう一つの初級（文法）クラスである。Ⅲ（前期）では、先ず発音と読み方を覚えた後、動詞と名詞の特徴を学んでいく。学習の方法は、言語の性質や教材によって異なるが、文法を習得しながら文章を理解していくことは、初級の学習には欠かせない勉強法の一つである。ここでは、名詞や動詞を始めとするいろいろな品詞の形態とその使い方を学びながら、言葉の体系と文の構造を学習していく。	
	モンゴル語初級Ⅳ	初めて外国語を学ぼうとする学生が一から学習していくもう一つの初級（文法）クラスである。Ⅳ（後期）では、基礎的な種々の文法事項について勉強していく。学習の方法は、言語の性質や教材によって異なるが、文法を習得しながら文章を理解していくことは、初級の学習には欠かせない勉強法の一つである。ここでは、名詞や動詞を始めとするいろいろな品詞の形態とその使い方を学びながら、言葉の体系と文の構造を学習していく。	
目	モンゴル語初級Ⅳ	初めて外国語を学ぼうとする学生が一から学習していくもう一つの初級（文法）クラスである。Ⅳ（後期）では、基礎的な種々の文法事項について勉強していく。学習の方法は、言語の性質や教材によって異なるが、文法を習得しながら文章を理解していくことは、初級の学習には欠かせない勉強法の一つである。ここでは、名詞や動詞を始めとするいろいろな品詞の形態とその使い方を学びながら、言葉の体系と文の構造を学習していく。	
	モンゴル語初級Ⅲ	初めて外国語を学ぼうとする学生が一から学習していくもう一つの初級（文法）クラスである。Ⅲ（前期）では、先ず発音と読み方を覚えた後、動詞と名詞の特徴を学んでいく。学習の方法は、言語の性質や教材によって異なるが、文法を習得しながら文章を理解していくことは、初級の学習には欠かせない勉強法の一つである。ここでは、名詞や動詞を始めとするいろいろな品詞の形態とその使い方を学びながら、言葉の体系と文の構造を学習していく。	
	モンゴル語初級Ⅱ	初めて外国語を学ぼうとする学生が一から学習していく初級（読本）のクラスである。Ⅱ（後期）では、読み方と訳し方について勉強していくことになる。学習の仕方は言語によって多少異なるが、正確な発音を覚え、正しく読んで、文意を理解できるようにすることは、どの言語でも同じであり、この科目の目指すところである。	
	モンゴル語初級Ⅰ	初めて外国語を学ぼうとする学生が一から学習していく初級（読本）のクラスである。Ⅰ（前期）では、先ず文字の暗唱と発音の練習、文の読み方と文意の理解など、最初に学ばなくてはいけない重要な事柄をしっかりと学習していく。発音には特に重点を置く。学習の仕方は言語によって多少異なるが、正確な発音を覚え、正しく読んで、文意を理解できるようにすることは、どの言語でも同じであり、この科目の目指すところである。	

授 業 科 目 の 概 要			
(経営学部 データサイエンス学科)			
区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
全	モンゴル語中級Ⅰ	外国語初級を履修した学生がさらに力をつけるために学んでいく科目の一つが、読解の学習である。ここでは、ある程度まとまった内容の読み物をじっくり読んでいくことになる。教材を通して、読み方と文法の確認を行いながら、読解力の向上に努めていく。	
	モンゴル語中級Ⅱ	外国語中級Ⅰと同様に読解力の向上を目標とする。学習の仕方は、外国語中級Ⅰと変わりはないが、教材の読み物を最後まで正確に読んでいく。易しくとも、一冊のテキストを終わるまで読みきることは、学習者にとって大きな自信となるはずである。	
	モンゴル語中級Ⅲ	外国語初級を履修した学生がさらに語学力の向上を図っていくもう一つの学習が、文法を体系的に理解していくことである。外国語中級Ⅲでは、テキストに従いながら、これまでの学習で見落とししていた部分や不十分だった知識を確認し、少しずつ言葉の体系や文の構造を学んでいく。	
	モンゴル語中級Ⅳ	読解と並んで文章構造の体系的理解は、次へのステップに欠かせない重要な学習である。外国語中級Ⅳでは、外国語中級Ⅲと同様に文法体系の理解を目標とする。各言語独自の慣用的な表現や言い回しなどを学ぶことで、今までの知識を補強し、言葉の構造と特徴を理解していく。	
学	ポルトガル語初級Ⅰ	初めて外国語を学ぼうとする学生が一から学習していく初級（読本）のクラスである。Ⅰ（前期）では、先ず文字の暗唱と発音の練習、文の読み方と文意の理解など、最初に学ばなくてはならない重要な事柄をしっかりと学習していく。発音には特に重点を置く。学習の仕方は言語によって多少異なるが、正確な発音を覚え、正しく読んで、文意を理解できるようにすることは、どの言語でも同じであり、この科目の目指すところである。	
	ポルトガル語初級Ⅱ	初めて外国語を学ぼうとする学生が一から学習していく初級（読本）のクラスである。Ⅱ（後期）では、読み方と訳し方について勉強していくことになる。学習の仕方は言語によって多少異なるが、正確な発音を覚え、正しく読んで、文意を理解できるようにすることは、どの言語でも同じであり、この科目の目指すところである。	
	ポルトガル語初級Ⅲ	初めて外国語を学ぼうとする学生が一から学習していくもう一つの初級（文法）クラスである。Ⅲ（前期）では、先ず発音と読み方を覚えた後、動詞と名詞の特徴を学んでいく。学習の方法は、言語の性質や教材によって異なるが、文法を習得しながら文章を理解していくことは、初級の学習には欠かせない勉強法の一つである。ここでは、名詞や動詞を始めとするいろいろな品詞の形態とその使い方を学びながら、言葉の体系と文の構造を学習していく。	
	ポルトガル語初級Ⅳ	初めて外国語を学ぼうとする学生が一から学習していくもう一つの初級（文法）クラスである。Ⅳ（後期）では、基礎的な種々の文法事項について勉強していく。学習の方法は、言語の性質や教材によって異なるが、文法を習得しながら文章を理解していくことは、初級の学習には欠かせない勉強法の一つである。ここでは、名詞や動詞を始めとするいろいろな品詞の形態とその使い方を学びながら、言葉の体系と文の構造を学習していく。	
共	ポルトガル語中級Ⅰ	外国語初級を履修した学生がさらに力をつけるために学んでいく科目の一つが、読解の学習である。ここでは、ある程度まとまった内容の読み物をじっくり読んでいくことになる。教材を通して、読み方と文法の確認を行いながら、読解力の向上に努めていく。	
	ポルトガル語中級Ⅱ	外国語中級Ⅰと同様に読解力の向上を目標とする。学習の仕方は、外国語中級Ⅰと変わりはないが、教材の読み物を最後まで正確に読んでいく。易しくとも、一冊のテキストを終わるまで読みきることは、学習者にとって大きな自信となるはずである。	
	ポルトガル語中級Ⅲ	外国語初級を履修した学生がさらに語学力の向上を図っていくもう一つの学習が、文法を体系的に理解していくことである。外国語中級Ⅲでは、テキストに従いながら、これまでの学習で見落とししていた部分や不十分だった知識を確認し、少しずつ言葉の体系や文の構造を学んでいく。	
	ポルトガル語中級Ⅳ	読解と並んで文章構造の体系的理解は、次へのステップに欠かせない重要な学習である。外国語中級Ⅳでは、外国語中級Ⅲと同様に文法体系の理解を目標とする。各言語独自の慣用的な表現や言い回しなどを学ぶことで、今までの知識を補強し、言葉の構造と特徴を理解していく。	
通	ポルトガル語初級Ⅰ	初めて外国語を学ぼうとする学生が一から学習していく初級（読本）のクラスである。Ⅰ（前期）では、先ず文字の暗唱と発音の練習、文の読み方と文意の理解など、最初に学ばなくてはならない重要な事柄をしっかりと学習していく。発音には特に重点を置く。学習の仕方は言語によって多少異なるが、正確な発音を覚え、正しく読んで、文意を理解できるようにすることは、どの言語でも同じであり、この科目の目指すところである。	
	ポルトガル語初級Ⅱ	初めて外国語を学ぼうとする学生が一から学習していく初級（読本）のクラスである。Ⅱ（後期）では、読み方と訳し方について勉強していくことになる。学習の仕方は言語によって多少異なるが、正確な発音を覚え、正しく読んで、文意を理解できるようにすることは、どの言語でも同じであり、この科目の目指すところである。	
	ポルトガル語初級Ⅲ	初めて外国語を学ぼうとする学生が一から学習していくもう一つの初級（文法）クラスである。Ⅲ（前期）では、先ず発音と読み方を覚えた後、動詞と名詞の特徴を学んでいく。学習の方法は、言語の性質や教材によって異なるが、文法を習得しながら文章を理解していくことは、初級の学習には欠かせない勉強法の一つである。ここでは、名詞や動詞を始めとするいろいろな品詞の形態とその使い方を学びながら、言葉の体系と文の構造を学習していく。	
	ポルトガル語初級Ⅳ	初めて外国語を学ぼうとする学生が一から学習していくもう一つの初級（文法）クラスである。Ⅳ（後期）では、基礎的な種々の文法事項について勉強していく。学習の方法は、言語の性質や教材によって異なるが、文法を習得しながら文章を理解していくことは、初級の学習には欠かせない勉強法の一つである。ここでは、名詞や動詞を始めとするいろいろな品詞の形態とその使い方を学びながら、言葉の体系と文の構造を学習していく。	
科	ポルトガル語中級Ⅰ	外国語初級を履修した学生がさらに力をつけるために学んでいく科目の一つが、読解の学習である。ここでは、ある程度まとまった内容の読み物をじっくり読んでいくことになる。教材を通して、読み方と文法の確認を行いながら、読解力の向上に努めていく。	
	ポルトガル語中級Ⅱ	外国語中級Ⅰと同様に読解力の向上を目標とする。学習の仕方は、外国語中級Ⅰと変わりはないが、教材の読み物を最後まで正確に読んでいく。易しくとも、一冊のテキストを終わるまで読みきることは、学習者にとって大きな自信となるはずである。	
	ポルトガル語中級Ⅲ	外国語初級を履修した学生がさらに語学力の向上を図っていくもう一つの学習が、文法を体系的に理解していくことである。外国語中級Ⅲでは、テキストに従いながら、これまでの学習で見落とししていた部分や不十分だった知識を確認し、少しずつ言葉の体系や文の構造を学んでいく。	
	ポルトガル語中級Ⅳ	読解と並んで文章構造の体系的理解は、次へのステップに欠かせない重要な学習である。外国語中級Ⅳでは、外国語中級Ⅲと同様に文法体系の理解を目標とする。各言語独自の慣用的な表現や言い回しなどを学ぶことで、今までの知識を補強し、言葉の構造と特徴を理解していく。	
目	ロシア語初級Ⅰ	初めて外国語を学ぼうとする学生が一から学習していく初級（読本）のクラスである。Ⅰ（前期）では、先ず文字の暗唱と発音の練習、文の読み方と文意の理解など、最初に学ばなくてはならない重要な事柄をしっかりと学習していく。発音には特に重点を置く。学習の仕方は言語によって多少異なるが、正確な発音を覚え、正しく読んで、文意を理解できるようにすることは、どの言語でも同じであり、この科目の目指すところである。	
	ロシア語初級Ⅱ	初めて外国語を学ぼうとする学生が一から学習していく初級（読本）のクラスである。Ⅱ（後期）では、読み方と訳し方について勉強していくことになる。学習の仕方は言語によって多少異なるが、正確な発音を覚え、正しく読んで、文意を理解できるようにすることは、どの言語でも同じであり、この科目の目指すところである。	

授 業 科 目 の 概 要 (経営学部 データサイエンス学科)			
区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
全	ロシア語初級Ⅲ	初めて外国語を学ぼうとする学生が一から学習していくもう一つの初級（文法）クラスである。Ⅲ（前期）では、先ず発音と読み方を覚えた後、動詞と名詞の特徴を学んでいく。学習の方法は、言語の性質や教材によって異なるが、文法を習得しながら文章を理解していくことは、初級の学習には欠かせない勉強法の一つである。ここでは、名詞や動詞を始めとするいろいろな品詞の形態とその使い方を学びながら、言葉の体系と文の構造を学習していく。	
	ロシア語初級Ⅳ	初めて外国語を学ぼうとする学生が一から学習していくもう一つの初級（文法）クラスである。Ⅳ（後期）では、基礎的な種々の文法事項について勉強していく。学習の方法は、言語の性質や教材によって異なるが、文法を習得しながら文章を理解していくことは、初級の学習には欠かせない勉強法の一つである。ここでは、名詞や動詞を始めとするいろいろな品詞の形態とその使い方を学びながら、言葉の体系と文の構造を学習していく。	
	ロシア語中級Ⅰ	外国語初級を履修した学生がさらに力をつけるために学んでいく科目の一つが、読解の学習である。ここでは、ある程度まとまった内容の読み物をじっくり読んでいくことになる。教材を通して、読み方と文法の確認を行いながら、読解力の向上に努めていく。	
学	ロシア語中級Ⅱ	外国語中級Ⅰと同様に読解力の向上を目標とする。学習の仕方は、外国語中級Ⅰと変わりはないが、教材の読み物を最後まで正確に読んでいく。易しくとも、一冊のテキストを終わりまで読みきることは、学習者にとって大きな自信となるはずである。	
	ロシア語中級Ⅲ	外国語初級を履修した学生がさらに語学力の向上を図っていくもう一つの学習が、文法を体系的に理解していくことである。外国語中級Ⅲでは、テキストに従いながら、これまでの学習で見落とししていた部分や不十分だった知識を確認し、少しずつ言葉の体系や文の構造を学んでいく。	
	ロシア語中級Ⅳ	読解と並んで文章構造の体系的な理解は、次へのステップに欠かせない重要な学習である。外国語中級Ⅳでは、外国語中級Ⅲと同様に文法体系の理解を目標とする。各言語独自の慣用的な表現や言い回しなどを学ぶことで、今までの知識を補強し、言葉の構造と特徴を理解していく。	
共	ロシア語応用Ⅰ	一年次ないし二年次で外国語を履修した学生がさらに学力を伸ばしていく応用科目の一つが、異文化を通しての語学学習である。Ⅰ（前期）では、新聞や雑誌などの教材を読むことで語学力を養い、併せて人間や文化についても学んでいく。語学力を高めようとする場合には欠かせない言葉と異文化に対する理解をここで深めていくことになる。	
	ロシア語応用Ⅱ	一年次ないし二年次で外国語を履修した学生がさらに学力を伸ばしていく応用科目の一つが、異文化を通しての語学学習である。Ⅱ（後期）では、Ⅰと同じように文化的な問題に関する外国語の知識を修得しながら、さらに異文化理解を推し進めていく。語学力を高めようとする場合には欠かせない言葉と異文化に対する理解をここで深めていくことになる。	
	ロシア語応用Ⅲ	一年次ないし二年次で外国語を履修した学生がさらに力をつけていくもう一つの応用科目が、語学的観点からの学習である。Ⅲ（前期）では、各種のテキストを通して、様々な構文の把握、文章表現の方法、それに語法の体系的な理解などについて学んでいく。また授業内容から、この科目は各言語の検定試験の受験対策講座として利用することもできる。	
科	ロシア語応用Ⅳ	一年次ないし二年次で外国語を履修した学生がさらに力をつけていくもう一つの応用科目が、語学的観点からの学習である。Ⅳ（後期）も、授業の仕方は原則としてⅢと変わらないが、様々な言葉や文章に触れながら語学の知識をさらに深めていくことになる。また授業内容から、この科目は各言語の検定試験の受験対策講座として利用することもできる。	
	スペイン語初級Ⅰ	初めて外国語を学ぼうとする学生が一から学習していく初級（読本）のクラスである。Ⅰ（前期）では、先ず文字の暗唱と発音の練習、文の読み方と文意の理解など、最初に学ばなくてはならない重要な事柄をしっかりと学習していく。発音には特に重点を置く。学習の仕方は言語によって多少異なるが、正確な発音を覚え、正しく読んで、文意を理解できるようにすることは、どの言語でも同じであり、この科目の目指すところである。	
	スペイン語初級Ⅱ	初めて外国語を学ぼうとする学生が一から学習していく初級（読本）のクラスである。Ⅱ（後期）では、読み方と訳し方について勉強していくことになる。学習の仕方は言語によって多少異なるが、正確な発音を覚え、正しく読んで、文意を理解できるようにすることは、どの言語でも同じであり、この科目の目指すところである。	
目	スペイン語初級Ⅲ	初めて外国語を学ぼうとする学生が一から学習していくもう一つの初級（文法）クラスである。Ⅲ（前期）では、先ず発音と読み方を覚えた後、動詞と名詞の特徴を学んでいく。学習の方法は、言語の性質や教材によって異なるが、文法を習得しながら文章を理解していくことは、初級の学習には欠かせない勉強法の一つである。ここでは、名詞や動詞を始めとするいろいろな品詞の形態とその使い方を学びながら、言葉の体系と文の構造を学習していく。	

授 業 科 目 の 概 要			
(経営学部 データサイエンス学科)			
区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
全	スペイン語初級Ⅳ	初めて外国語を学ぼうとする学生が一から学習していくもう一つの初級（文法）クラスである。Ⅳ（後期）では、基礎的な種々の文法事項について勉強していく。学習の方法は、言語の性質や教材によって異なるが、文法を習得しながら文章を理解していくことは、初級の学習には欠かせない勉強法の一つである。ここでは、名詞や動詞を始めとするいろいろな品詞の形態とその使い方を学びながら、言葉の体系と文の構造を学習していく。	
	スペイン語コミュニケーションⅠ	コミュニケーション・ツールとしての外国語能力を養成していく実践科目の一つが、初級の外国語コミュニケーションである。Ⅰ（前期）では、主に基礎的な会話能力を養うために、ネイティブ・スピーカーのもとで日常よく使われる表現や簡単な言い回しを学んでいく。授業の仕方は、言語や教員によって様々だが、受講生はここで生きた言葉の使い方を学んでいく。	
	スペイン語コミュニケーションⅡ	コミュニケーション・ツールとしての外国語能力を養成していく実践科目の一つが、初級の外国語コミュニケーションである。Ⅱ（後期）も、Ⅰと同様にコミュニケーション・ツールとして外国語を使えるような場が与えられ、その訓練をネイティブと一緒に進んでいく。授業の仕方は、言語や教員によって様々だが、受講生はここで生きた言葉の使い方を学んでいく。	
	スペイン語コミュニケーションⅢ	コミュニケーション・ツールとしての外国語能力を養成していくもう一つの実践科目が、中級の外国語コミュニケーションである。Ⅲ（前期）では、会話能力の向上を図ることはもちろんだが、特に外国語で討論する技術を学び、発表する訓練を行っていく。授業の進め方は、言語や担当者によって異なるが、受講生がコミュニケーション・ツールとして外国語をスムーズに運用できるよう学習していく。	
共	スペイン語コミュニケーションⅣ	コミュニケーション・ツールとしての外国語能力を養成していくもう一つの実践科目が、中級の外国語コミュニケーションである。Ⅳ（後期）では、受講生はネイティブのもとで普通の授業と同じように積極的に外国語で意見を述べ、議論していくことになる。授業の進め方は、言語や担当者によって異なるが、受講生がコミュニケーション・ツールとして外国語をスムーズに運用できるよう学習していく。	
	スペイン語中級Ⅰ	外国語初級を履修した学生がさらに力をつけるために学んでいく科目の一つが、読解の学習である。ここでは、ある程度まとまった内容の読み物をじっくり読んでいくことになる。教材を通して、読み方と文法の確認を行いながら、読解力の向上に努めていく。	
	スペイン語中級Ⅱ	外国語中級Ⅰと同様に読解力の向上を目標とする。学習の仕方は、外国語中級Ⅰと変わりはないが、教材の読み物を最後まで正確に読んでいく。易しくとも、一冊のテキストを終わるまで読みきくことは、学習者にとって大きな自信となるはずである。	
	スペイン語中級Ⅲ	外国語初級を履修した学生がさらに語学力の向上を図っていくもう一つの学習が、文法を体系的に理解していくことである。外国語中級Ⅲでは、テキストに従いながら、これまでの学習で見落としていた部分や不十分だった知識を確認し、少しずつ言葉の体系や文の構造を学んでいく。	
科	スペイン語中級Ⅳ	読解と並んで文章構造の体系的な理解は、次へのステップに欠かせない重要な学習である。外国語中級Ⅳでは、外国語中級Ⅲと同様に文法体系の理解を目標とする。各言語独自の慣用的な表現や言い回しなどを学ぶことで、今までの知識を補強し、言葉の構造と特徴を理解していく。	
	スペイン語応用Ⅰ	一年次ないし二年次で外国語を履修した学生がさらに学力を伸ばしていく応用科目の一つが、異文化を通しての語学学習である。Ⅰ（前期）では、新聞や雑誌などの教材を読むことで語学力を養い、併せて人間や文化についても学んでいく。語学力を高めようとする場合には欠かせない言葉と異文化に対する理解をここで深めていくことになる。	
	スペイン語応用Ⅱ	一年次ないし二年次で外国語を履修した学生がさらに学力を伸ばしていく応用科目の一つが、異文化を通しての語学学習である。Ⅱ（後期）では、Ⅰと同じように文化的な問題に関する外国語の知識を修得しながら、さらに異文化理解を推し進めていく。語学力を高めようとする場合には欠かせない言葉と異文化に対する理解をここで深めていくことになる。	
	スペイン語応用Ⅲ	一年次ないし二年次で外国語を履修した学生がさらに力をつけていくもう一つの応用科目が、語学的観点からの学習である。Ⅲ（前期）では、各種のテキストを通して、様々な構文の把握、文章表現の方法、それに語法の体系的な理解などについて学んでいく。また授業内容から、この科目は各言語の検定試験の受験対策講座として利用することもできる。	
目	スペイン語応用Ⅳ	一年次ないし二年次で外国語を履修した学生がさらに力をつけていくもう一つの応用科目が、語学的観点からの学習である。Ⅳ（後期）も、授業の仕方は原則としてⅢと変わらないが、様々な言葉や文章に触れながら語学の知識をさらに深めていくことになる。また授業内容から、この科目は各言語の検定試験の受験対策講座として利用することもできる。	

授 業 科 目 の 概 要 (経営学部 データサイエンス学科)			
区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
全	タイ語初級Ⅰ	初めて外国語を学ぼうとする学生が一から学習していく初級（読本）のクラスである。この科目では、まず文字の暗唱と発音の練習、文の読み方と文意の理解など、最初に学ばなくてはならない重要な事柄をしっかりと学習していく。発音には特に重点を置く。学習の仕方は言語によって多少異なるが、正確な発音を覚え、正しく読んで、文意を理解できるようにすることは、どの言語でも同じであり、この科目の目指すところである。	
	タイ語初級Ⅱ	初めて外国語を学ぼうとする学生が一から学習していく初級（読本）のクラスである。この科目では、読み方と訳し方について勉強していくことになる。学習の仕方は言語によって多少異なるが、正確な発音を覚え、正しく読んで、文意を理解できるようにすることは、どの言語でも同じであり、この科目の目指すところである。	
	タイ語初級Ⅲ	初めて外国語を学ぼうとする学生が一から学習していくもう一つの初級（文法）クラスである。この科目では、まず発音と読み方を覚えた後、動詞と名詞の特徴を学んでいく。学習の方法は、言語の性質や教材によって異なるが、文法を習得しながら文章を理解していくことは、初級の学習には欠かせない勉強法の一つである。ここでは、名詞や動詞を始めとするいろいろな品詞の形態とその使い方を学びながら、言葉の体系と文の構造を学習していく。	
学	タイ語初級Ⅳ	初めて外国語を学ぼうとする学生が一から学習していくもう一つの初級（文法）クラスである。この科目では、基礎的な種々の文法事項について勉強していく。学習の方法は、言語の性質や教材によって異なるが、文法を習得しながら文章を理解していくことは、初級の学習には欠かせない勉強法の一つである。ここでは、名詞や動詞を始めとするいろいろな品詞の形態とその使い方を学びながら、言葉の体系と文の構造を学習していく。	
	タイ語中級Ⅰ	タイ語初級を履修した学生がさらに力をつけるために学んでいく科目の一つが、読解の学習である。ここでは、ある程度まとまった内容の読み物をじっくり読んでいくことになる。教材を通して、読み方と文法の確認を行いながら、読解力の向上に努めていく。	
	タイ語中級Ⅱ	「タイ語中級Ⅰ」と同様に読解力の向上を目標とする。学習の仕方は、「タイ語中級Ⅰ」と変わりはないが、教材の読み物を最後まで正確に読んでいく。易しくとも、一冊のテキストを終わりまで読みきくことは、学習者にとって大きな自信となるはずである。	
共	タイ語中級Ⅲ	タイ語初級を履修した学生がさらに語学力の向上を図っていくもう一つの学習が、文法を体系的に理解していくことである。「タイ語中級Ⅲ」では、テキストに従いながら、これまでの学習で見落としていた部分や不十分だった知識を確認し、少しずつ言葉の体系や文の構造を学んでいく。	
	タイ語中級Ⅳ	読解と並んで文章構造の体系的な理解は、次へのステップに欠かせない重要な学習である。「タイ語中級Ⅳ」では、「タイ語中級Ⅲ」と同様に文法体系の理解を目標とする。各言語独自の慣用的な表現や言い回しなどを学ぶことで、今までの知識を補強し、言葉の構造と特徴を理解していく。	
	タイ語中級Ⅳ	読解と並んで文章構造の体系的な理解は、次へのステップに欠かせない重要な学習である。「タイ語中級Ⅳ」では、「タイ語中級Ⅲ」と同様に文法体系の理解を目標とする。各言語独自の慣用的な表現や言い回しなどを学ぶことで、今までの知識を補強し、言葉の構造と特徴を理解していく。	
科	ベトナム語初級Ⅰ	初めて外国語を学ぼうとする学生が一から学習していく初級（読本）のクラスである。この科目では、まず文字の暗唱と発音の練習、文の読み方と文意の理解など、最初に学ばなくてはならない重要な柄をしっかりと学習していく。発音には特に重点を置く。学習の仕方は言語によって多少異なるが、正確な発音を覚え、正しく読んで、文意を理解できるようにすることは、どの言語でも同じであり、この科目の目指すところである。	
	ベトナム語初級Ⅱ	初めて外国語を学ぼうとする学生が一から学習していく初級（読本）のクラスである。この科目では、読み方と訳し方について勉強していくことになる。学習の仕方は言語によって多少異なるが、正確な発音を覚え、正しく読んで、文意を理解できるようにすることは、どの言語でも同じであり、この科目の目指すところである。	
	ベトナム語初級Ⅲ	初めて外国語を学ぼうとする学生が一から学習していくもう一つの初級（文法）クラスである。この科目では、まず発音と読み方を覚えた後、動詞と名詞の特徴を学んでいく。学習の方法は、言語の性質や教材によって異なるが、文法を習得しながら文章を理解していくことは、初級の学習には欠かせない勉強法の一つである。ここでは、名詞や動詞を始めとするいろいろな品詞の形態とその使い方を学びながら、言葉の体系と文の構造を学習していく。	
目	ベトナム語初級Ⅳ	初めて外国語を学ぼうとする学生が一から学習していくもう一つの初級（文法）クラスである。この科目では、基礎的な種々の文法事項について勉強していく。学習の方法は、言語の性質や教材によって異なるが、文法を習得しながら文章を理解していくことは、初級の学習には欠かせない勉強法の一つである。ここでは、名詞や動詞を始めとするいろいろな品詞の形態とその使い方を学びながら、言葉の体系と文の構造を学習していく。	
	ベトナム語中級Ⅰ	外国語初級を履修した学生がさらに力をつけるために学んでいく科目の一つが、読解の学習である。ここでは、ある程度まとまった内容の読み物をじっくり読んでいくことになる。教材を通して、読み方と文法の確認を行いながら、読解力の向上に努めていく。	

授 業 科 目 の 概 要			
(経営学部 データサイエンス学科)			
区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
全	ベトナム語中級Ⅱ	外国語中級Ⅰと同様に読解力の向上を目標とする。学習の仕方は、外国語中級Ⅰと変わりはないが、教材の読み物を最後まで正確に読んでいく。易しくとも、一冊のテキストを終わりまで読みきることは、学習者にとって大きな自信となるはずである。	
	ベトナム語中級Ⅲ	外国語初級を履修した学生がさらに語学力の向上を図っていくもう一つの学習が、文法を体系的に理解していくことである。外国語中級Ⅲでは、テキストに従いながら、これまでの学習で見落としていた部分や不十分だった知識を確認し、少しずつ言葉の体系や文の構造を学んでいく。	
	ベトナム語中級Ⅳ	読解と並んで文章構造の体系的理解は、次へのステップに欠かせない重要な学習である。外国語中級Ⅳでは、外国語中級Ⅲと同様に文法体系の理解を目標とする。各言語独自の慣用的な表現や言い回しなどを学ぶことで、今までの知識を補強し、言葉の構造と特徴を理解していく。	
学	アジアの伝統文化	アジアでは国境ができる前から人々は陸をつたい、海を渡って移動し、それとともにさまざまな芸能、音楽、文化が広まってきた。そのため、それらの様式には類似性や共通点が多く、その一方でその地域の風土によって生み出されたユニークで、強烈な個性を現すような独自の芸能や音楽も存在している。これらの表現を通してさまざまな社会的・精神的要素を知ることは、その土地やそこに住む人々をより深く理解し、その文化に親しむための重要な一歩となる。特にアジアの音楽を中心に文化の特質と相互関係を解説する。	
	アジアを知る12章	アジアには民主主義国家、社会主義国家、家産制国家、都市国家まで、大小さまざまな多様なタイプの国々から成っている。それだけでなく歴史や文化も、民族も宗教も実に多様な国家群により構成されている。このような多様で、可能性に満ちたアジアの魅力を学び、アジアへの関心をより一層深めてもらうのが本講義の目的である。ここではアジアの各国や諸問題を理解するうえで最も重要と思われるテーマを取りあげて、1回ごとと完結の形で授業を進める。	【オムニバス】 専任教員による講義7回、外部講師による講義6回
共	アメリカ研究入門Ⅰ	アメリカの歴史を多層的に捉えることを目指す。まず空間・経済・労働という基礎過程から始める。次に、多民族国家アメリカを構成する民族の多様性ということを考える。そして、そのような多様性を統合する政治思想、政治制度を扱う。さらに、世界におけるアメリカの位置を歴史的に考えることによって、時事的な出来事の深い理解を助けることを目的にする。以上のように、この科目は、多文化社会アメリカの歴史入門である。	
	アメリカ研究入門Ⅱ	他の民族と異なり、強制的にアメリカに連れてこられた黒人の問題は、現在の多民族社会の中で最も深刻な問題だといわれている。しかし、現在、黒人の階層分化も著しく、単に黒人問題として割り切れないところもある。この科目は、それらを歴史的に解明することを目指す。歴史的には根底に奴隷制がある黒人差別の問題を、人権・自由・平等などの基本的な思想と関連づけて、奴隷制の時代から現代に至るまで考えていく。アメリカ黒人に関しては「アメリカ研究入門Ⅰ」の一部として概観だけを扱うことになっている。「アメリカ研究入門Ⅱ」では、それをさらに詳細に、深く、多角的に、アメリカ史の中に黒人を位置づける試みをする。	
科	国際関係論Ⅰ	国際関係論は国際社会の現象を対象として、紛争・戦争の歴史や構造を解明し、協力による平和の追求を目的とする学問である。人間の営みには連続性があり、歴史を知らずして、現在や未来の国際関係を語ることはできない。「国際関係論Ⅰ」は、国際関係を動かし、その歴史を形成する原理・メカニズムを中心に国際関係の動きを見ていく。とりわけ、グローバリゼーションの展開する中で、国際関係がどのように変動してきたかを解明していく。	
	国際関係論Ⅱ	国際関係論は国際社会の現象を対象として、紛争・戦争の歴史や構造を解明し、協力による平和の追求を目的とする学問である。国際社会は、現在大きな変動期を迎えており、従来の国際関係諸現象を理解するための基本概念にもその変化が多く見られる。「国際関係論Ⅱ」は国民国家システム、国家安全保障、国際的相互依存という三つの側面における変容を考察し、諸概念の再検討を行うことによって、国際関係に対立する理解力や分析力を養う。異なった民族、異質な文化・価値観との対立を乗り越え、共生の道を模索し、平和の研究を深めていく。	
目	西洋史Ⅰ	歴史とは、人間社会の過去から現代に至る変遷である。政治・経済・思想・文化・科学・外交・社会・階級・美術・都市などの変遷を考察するところに、おのずとそれぞれの分野の歴史が生ずることになる。また、ドイツ、フランス、イギリス、アメリカなどの地域的変遷を考察する各国史も生じてくる。「西洋史Ⅰ」は、主として中世または近代初期にかけての時代を中心に論じる。	
	西洋史Ⅱ	歴史とは、人間社会の過去から現代に至る変遷である。政治・経済・思想・文化・科学・外交・社会・階級・美術・都市などの変遷を考察するところに、おのずとそれぞれの分野の歴史が生ずることになる。また、ドイツ、フランス、イギリス、アメリカなどの地域的変遷を考察する各国史も生じてくる。「西洋史Ⅱ」は、主として近代初期以降について論じる。	

授 業 科 目 の 概 要			
(経営学部 データサイエンス学科)			
区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
全	中国研究 I	「中国研究」は、中国に関心を抱き、中国をもっと知りたい学生を対象とする案内コースである。「中国研究I」では、現在中国が直面している国内問題や新たに登場した現象を取り上げ、中国の政治・経済・社会構造について学ぶ。その際に、各問題の現状を知るだけでなく、その歴史的な背景についても考える。現代中国に関する基礎知識や観点を習得することを通じて、中国理解を深める。	
	中国研究 II	「中国研究」は、中国に関心を抱き、中国をもっと知りたい学生を対象とする案内コースである。現在の中国を理解するには、中国の現代史を知ることが必要となる。なぜなら現在の中国は国際環境や国内情勢の変化に対して講じられたさまざまな試行錯誤の結果、歴史的に形成されたと考えられるからである。「中国研究II」では、1945年以降の政治・外交を中心に、中国の歴史的な歩みを学ぶ。	
学	東南アジア研究 I	東南アジアは近年目覚ましい経済発展を遂げ、かつASEANに象徴される地域的統合を進めている。本講義はこうした東南アジアの包括的な理解を目的とする。「東南アジア研究 I」では、地域の歴史的背景と地理的特質、第二次世界大戦後の歩み、ASEANの結成と進展一を取り上げ、また、東南アジア経済を事実上動かしている華僑・華人の役割と中国及び東南アジア各国の華僑政策を検討し、かつ考えていく。	
	東南アジア研究 II	東南アジアは近年目覚ましい経済発展を遂げ、かつASEANに象徴される地域的統合を進めている。本講義はこうした東南アジアの包括的な理解を目的とする。「東南アジア研究 II」では、現代の東南アジアを理解するために、東南アジアの特徴について説明をした上で、主要国の政治と経済を中心に現状と課題を考察する。また、日本と東南アジアとの関係、とりわけ日本の政府開発援助（ODA）が東南アジアの開発・発展に与えた影響を検討し、かつ考えていく。	
共	東洋史 I	本講義は中国を中心とする東アジア世界の形成過程についての理解を深め、その文化の独自性と多様性を考察することにより、歴史的思考力を培い、国際社会で主体的に生きる一員として必要な自覚と資質を養うことを目的とする。「東洋史 I」は、古代文明の誕生から、最後の王朝・清が最盛期を迎える時期までの政治・経済・社会・文化を考察し、近代以前における中国の歴史を多面的に理解することを目的とする。	
	東洋史 II	本講義は中国を中心とする東アジア世界の形成過程についての理解を深め、その文化の独自性と多様性を考察することにより、歴史的思考力を培い、国際社会で主体的に生きる一員として必要な自覚と資質を養うことを目的とする。「東洋史 II」は、清代後期から現代に至るまでの政治・経済・社会・文化を考察し、近現代における中国の変容過程を多面的に理解することを目的とする。	
通	日本史 I	戦争体験者が希少となり、平和が自明のことと思われがちな今日、戦争について語り、研究することも、とかく忌避されがちである。しかし、わが国の過去の行為をどう評価するにせよ、戦争の原因とその経過、さらには当時の社会情勢を知らずしては何も語ることができないはずである。「日本史 I」では、帝国主義時代と日本の開国、日清・日露戦争を振り返り、今日の日本を知るための手がかりとする。「すべての歴史は現代史である」(B. クローチェ) ことを踏まえて近・現代史を考察する。	
	日本史 II	戦争体験者が希少となり、平和が自明のことと思われがちな今日、戦争について語り、研究することも、とかく忌避されがちである。しかし、わが国の過去の行為をどう評価するにせよ、戦争の原因とその経過、さらには当時の社会情勢を知らずしては何も語ることができないはずである。「日本史 II」では、改めて昭和の戦争を考え、現代日本を理解する手がかりとしたい。「すべての歴史は現代史である」(B. クローチェ) ことを踏まえて近・現代史を考察する。	
目	北東アジア研究 I	北東アジアといっても広い。本講座では、モンゴルと南北朝鮮を取りあげる。中国の周辺国という点で共通しているが、その文化、政治、経済、歴史、中国とのかかわりは驚くほど違う。それぞれの国の色を紹介し、各国についての基本的理解を図るとともに、モンゴルについてはその歴史と新たな国づくりの問題、南北朝鮮については政治、経済動向等、最近の動きも紹介したい。	
	北東アジア研究 II	「北東アジア II」では、「北東アジア研究 I」に引き続き、モンゴルと南北朝鮮を取りあげ、より深く、また、視点を変えて論じる。それぞれの国の特色を紹介し、各国についての基本的理解を図るとともに、モンゴルについてはその歴史と新たな国づくりの問題、南北朝鮮については政治、経済動向等、最近の動きも紹介したい。	
	Doing History I	“History” is not just a sequence of historical facts, but the product of historians’ various interpretations and perspectives. This course is designed more for “doing” history by reconsidering historiography from critical viewpoints through active discussions rather than just “learning” history. Learning through key debates, we discuss various historical topics in the course ‘Doing History I mainly focuses on historiography from ancient to early modern times.	

授 業 科 目 の 概 要			
(経営学部 データサイエンス学科)			
区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
全	Doing History II	“History” is not just a sequence of historical facts, but the product of historians’ various interpretations and perspectives. This course is designed more for “doing” history by reconsidering historiography from critical viewpoints through active discussions rather than just “learning” history. Learning through key debates, we discuss various historical topics in the course-Doing History II mainly focuses on historiography from modern to contemporary times.	
	海外語学実習 I	海外語学実習は、語学研修等で外国語を学び、当該外国語を公用語とする国々の文化について学ぶことで、語学能力にとどまらない広範なコミュニケーション能力を涵養するための科目である。語学能力は、その言語を用いる話者とのコミュニケーションにおいて最低限必要な能力であるが、コミュニケーション相手の価値観を知らずしては、正しいコミュニケーションは成立しない。海外語学実習は、こうした話者間の異文化の壁を乗り越えたコミュニケーションを実践する能力の獲得を目指す。なお、単位の認定にあたっては、語学研修の授業時間と成績、当該外国語を公用語とする国や都市の文化の調査研究報告書をもって、適切に評価する。	
	海外語学実習 II	海外語学実習は、語学研修等で外国語を学び、当該外国語を公用語とする国々の文化について学ぶことで、語学能力にとどまらない広範なコミュニケーション能力を涵養するための科目である。語学能力は、その言語を用いる話者とのコミュニケーションにおいて最低限必要な能力であるが、コミュニケーション相手の価値観を知らずしては、正しいコミュニケーションは成立しない。海外語学実習は、こうした話者間の異文化の壁を乗り越えたコミュニケーションを実践する能力の獲得を目指す。なお、単位の認定にあたっては、語学研修の授業時間と成績、当該外国語を公用語とする国や都市の文化の調査研究報告書をもって、適切に評価する。	
	海外語学実習 III	海外語学実習は、語学研修等で外国語を学び、当該外国語を公用語とする国々の文化について学ぶことで、語学能力にとどまらない広範なコミュニケーション能力を涵養するための科目である。語学能力は、その言語を用いる話者とのコミュニケーションにおいて最低限必要な能力であるが、コミュニケーション相手の価値観を知らずしては、正しいコミュニケーションは成立しない。海外語学実習は、こうした話者間の異文化の壁を乗り越えたコミュニケーションを実践する能力の獲得を目指す。なお、単位の認定にあたっては、語学研修の授業時間と成績、当該外国語を公用語とする国や都市の文化の調査研究報告書をもって、適切に評価する。	
共	海外語学実習 IV	海外語学実習は、語学研修等で外国語を学び、当該外国語を公用語とする国々の文化について学ぶことで、語学能力にとどまらない広範なコミュニケーション能力を涵養するための科目である。語学能力は、その言語を用いる話者とのコミュニケーションにおいて最低限必要な能力であるが、コミュニケーション相手の価値観を知らずしては、正しいコミュニケーションは成立しない。海外語学実習は、こうした話者間の異文化の壁を乗り越えたコミュニケーションを実践する能力の獲得を目指す。なお、単位の認定にあたっては、語学研修の授業時間と成績、当該外国語を公用語とする国や都市の文化の調査研究報告書をもって、適切に評価する。	
	教養基礎（歴史からみた異文化交流）	ゼミ形式による少人数でおこなう基礎教養科目である。担当教員の専門分野に関わる特定のテーマについて、通常の講義とは一味ちがうかたちで学び、論じ、考える授業が期待できる。	
科	アメリカン・スタディーズ I	本科目では、アメリカの歴史について、この国の文化、政治、社会がどのように変遷してきたのかを学ぶ。ここではまずアメリカ文化のルーツを考え、歴史的な出来事があるように現代の社会、経済、政治や環境面における価値観に反映されているのかを検証していく。	
	アメリカン・スタディーズ II	本科目では、アメリカ社会について多様な視点から考察していく。専門的な内容を学ぶために学部科目担当の教授の講義にも参加し、ノートテキングなどの学習方法も取り入れていく。	
	アジアン・スタディーズ I	本科目では、近年著しく発展を遂げ、その存在感を増している「アジア」に焦点をあて、アジア諸国の歴史・社会・文化などについて基礎的な知識を英語で学ぶことを目的とする。アジア諸国がどのような歴史の変遷を経て、現在のどのような国家体制となったのか、またそれがどのように社会・文化に反映されているかを現地での体験を通して学び、「アジア」についての理解を深めることが目標である。	
	アジアン・スタディーズ II	本科目では、近年著しく発展を遂げ、その存在感を増している「アジア」に焦点をあて、アジア諸国の政治・経済・外交などについて基礎的な知識を英語で学ぶことを目的とする。現在のアジア諸国がどのように形作られているかを理解するために、政治制度や行政機構について学ぶ。さらに経済面での成長や諸外国との関係、同じアジア圏内諸国との貿易についても学び、アジア地域経済の現状を理解することをめざす。	
目	ジャパン・スタディーズ I	ASEAN奨学金留学生など留学生対象の科目である。本科目は、ビジネス日本語の学習など実践的な日本語能力を習得すると同時に、インターンシップを通じて日本社会、日本の企業文化などへの理解を深め、将来、日本およびアジア各国のビジネスシーンなどで活躍できる能力を身に付けることを目的とする実践的学習を行う科目である。	

授 業 科 目 の 概 要			
(経営学部 データサイエンス学科)			
区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
全	ジャパン・スタディーズⅡ	ASEAN奨学金奨学生など留学生対象の科目である。3年次開講の「ジャパン・スタディーズⅠ」を履修済みであることが必要である。本科目は、ビジネス日本語の学習など実践的な日本語能力を強化すると同時に、日本社会、日本の企業文化などへの理解を深め、詳細、日本およびアジア各国のビジネスシーンなどで活躍できる実践的能力を身に付けることを目的とする。	
	西洋文学Ⅰ	西洋文学について歴史的背景を視野に入れて概観し、散文芸術の発生からその発展過程をたどり、20世紀につながる流れを代表的な作品を通して論述する。特にギリシア、イギリス、フランス、ドイツ等の代表的文学作品を通して、作品の鑑賞とその時代背景、作家の思想、及び人間洞察、神話・伝説との関連、作品の芸術性等を考察する。歴史的な経緯、例えばギリシア悲劇からシェイクスピア劇へと続く演劇の歴史や、地域的な特徴、例えばフランス文学に一貫している「モラリスト文学」と「心理小説」に着目しながら作家の感覚や心理、そして人間描写の巧みさ等の理解を図る。「西洋文学Ⅰ」では、上記の内容からいくつかを取りあげて講義する。	
学	西洋文学Ⅱ	西洋文学について歴史的背景を視野に入れて概観し、散文芸術の発生からその発展過程をたどり、20世紀につながる流れを代表的な作品を通して論述する。特にギリシア、イギリス、フランス、ドイツ等の代表的文学作品を通して、作品の鑑賞とその時代背景、作家の思想、及び人間洞察、神話・伝説との関連、作品の芸術性等を考察する。歴史的な経緯、例えばギリシア悲劇からシェイクスピア劇へと続く演劇の歴史や、地域的な特徴、例えばフランス文学に一貫している「モラリスト文学」と「心理小説」に着目しながら作家の感覚や心理、そして人間描写の巧みさ等の理解を図る。「西洋文学Ⅱ」では、「西洋文学Ⅰ」で扱ったものとは異なる時代、異なる地域について講義する。	
	中国文学Ⅰ	中国文学は外国からの影響をほとんど受けずに発展してきたという特徴がある。また文学と政治が緊密な関係にあるので、歴史の流れと文学の発展の連関を縦軸に、詩人作者の人生（政権の担い手としては不遇の場合もあるが）とその文学に表現された内容、技法等を横軸に考察、講義する。「中国文学Ⅰ」は周王朝時代の『詩経』（中国最古の詩集。BC500年頃に纏められた）から、あらゆる詩型が出揃い完成を見た唐詩までを学ぶ。	
共	中国文学Ⅱ	中国文学は外国からの影響をほとんど受けずに発展してきたという特徴がある。また、文学と政治が緊密な関係にあるので、歴史の流れと文学の発展の連関を縦軸に、詩人作者の人生（政権の担い手としては不遇の場合もあるが）とその文学に表現された内容、技法等を横軸に考察、講義する。「中国文学Ⅱ」は唐代の代表的な詩人、王維・李白・杜甫・白楽天・韓愈・杜牧などの人生と作品の考察と近体詩の決まりを特に韻律を理解するため、七言絶句の作詩を試みさせる。	
	ヨーロッパの芸術と文化Ⅰ	ヨーロッパの芸術と文化は現代を生きる我々の考え方や感じ方に大きな影響を与えている。これを学ぶことは我々が生きる世界と我々自身を知るために必要であり、また、我々の知性と感性を高めることにも貢献してくれるはずである。さらに、ヨーロッパの文化理解を根底に置いたヨーロッパ芸術の受容は、受講者各自にとって純粋な愉しみ、人生における持続的な感動の源泉ともなりうるものである。本科目は、その可能性を見出す、あるいは広げるための端緒となるであろう。	
科	ヨーロッパの芸術と文化Ⅱ	「ヨーロッパの芸術と文化Ⅰ」を発展させ、受講者がヨーロッパの芸術を自発的に享受することができるようにする。「ヨーロッパの芸術と文化Ⅰ」で学んだ、ヨーロッパの文化的背景の理解をもとに、受講者自身が芸術作品を（自己流ではなく）的確に味わい、芸術を通じた美的体験・思想的体験を深化させる。この科目を通じ、芸術鑑賞が本来の意味での生涯学習であり、芸術とのかかわりを持つことは人生をより愉しく、そして豊かにしてくれることを実感できるようにする。	
	文章表現	現在、IT化の波により、パソコン・ワープロが普及し、その結果、ある意味で器用な文章の「書き手」が増えてきている。たしかにこれまで原稿用紙に向かって格闘していた労苦は著しく減少し、氾濫する情報を、手際良くスピーディに処理できるようになった。が、その反面、表現として生み落とされた文章は、いかにも没個性的で、責任主体の不明瞭な平板なものが増えてきていること。これもまた、もう一つの事実である。「文章表現」は、このような現代の状況を生視野におさめつつ、個人的で力感あふれる文章づくりを学生に指導していく。大学生活に必要な論文の作成能力を養成するとともに、卒業後の社会における実践的かつ創造的な文章表現能力を身につけさせることを目標とする科目である。	
目	日本の表象文化	本科目では、主に近代以降に生み出された日本語による「書きことば」（エクリチュール）とその文化表象について、具体的なテキストに即しつつ考察する。ここには当然文学作品は含まれるが、美術や写真、音楽、放送、広告のコピーや社会的・政治的標語などのような、これまで文学には分類されてこなかった表現の数々をも取りあげていく。近現代の日本において、人々の知性や心性、感覚や価値観、ふるまいや行動などを形づくり、またこれらに多元的に作用していったさまざまな文化表象を読み解くことを、授業の目的とする。	

授 業 科 目 の 概 要			
(経営学部 データサイエンス学科)			
区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
全	教養基礎（近現代日本の文化と表現）	ゼミ形式による少人数でおこなう基礎教養科目である。担当教員の専門分野に関わる特定のテーマについて、通常の講義とは一味ちがうかたちで学び、論じ、考える授業が期待できる。	
	教養基礎（現代文学入門）	ゼミ形式による少人数でおこなう基礎教養科目である。担当教員の専門分野に関わる特定のテーマについて、通常の講義とは一味ちがうかたちで学び、論じ、考える授業が期待できる。	
	教養基礎（チェスと文学）	ゼミ形式による少人数でおこなう基礎教養科目である。担当教員の専門分野に関わる特定のテーマについて、通常の講義とは一味ちがうかたちで学び、論じ、考える授業が期待できる。	
	教養基礎（理論で読む現代文学）	ゼミ形式による少人数でおこなう基礎教養科目である。担当教員の専門分野に関わる特定のテーマについて、通常の講義とは一味ちがうかたちで学び、論じ、考える授業が期待できる。	
学	教養基礎（多様性とアートの教育学）	ゼミ形式による少人数でおこなう基礎教養科目である。担当教員の専門分野に関わる特定のテーマについて、通常の講義とは一味ちがうかたちで学び、論じ、考える授業が期待できる。	
	日本の美術	日本の美術の発生は、先史古墳時代の土器に認められる。続く奈良時代は中国文化の受容で知られ、その流入が止む平安期の王朝時代にはいわゆる国風文化が栄える。武士に政権が移った鎌倉時代には再び大陸の影響をうける。室町時代とその後の動乱を経て、江戸時代に入ると鎖国政策がとられるが、徳川幕府の安定した治世下に豊かな町民文化が開花した。そして近代に到達すると美術にも明治維新が起こる。しなやかにしたたかに外来文化との交流を続けた日本美術は、どのような形象を創り出してきたのか。また西欧近代との直面という衝撃にさらされたとき、どのような変貌を遂げたか。この授業では、美術を通して日本の文化と創造力への理解を深めていく。	
共	日本文学（中古）	近代以前の日本文学、すなわち日本の古典文学について、社会人として必要十分な教養や知識を授ける科目である。日本文学史（古典）は上代・中古・中世・近世と時代区分されるが、ここではおもに中古（平安時代＝およそ9-12世紀）の作品を対象とする。中古文学は、かな（平仮名）による表現、和歌の隆盛、物語文学の多作によって特徴づけられる。これらのなかから著名な古典作品を作り上げ、読解するとともに、同時代の思想や文化、風俗についての理解と考察を深める、単に文章の通釈をおこなうのみならず、そこに内包される歴史性や現代性をも読み解く講義になる。	
	日本文学（中世）	近代以前の日本文学、すなわち日本の古典文学について、社会人として必要十分な教養や知識を授ける科目である。日本文学史（古典）は上代・中古・中世・近世と時代区分されるが、ここではおもに中世（鎌倉時代＝およそ13-14世紀、室町時代＝およそ15-16世紀）の作品を対象とする。中世文学は、前代にひき続き韻文（和歌・連歌）と散文（物語）を二本柱としながら、古典研究や芸能の方面にも展開を示した。これらのなかから著名な古典作品を取り上げ、読解するとともに、同時代の思想や文化、風俗についての理解と考察を深める、単に文章の通釈をおこなうのみならず、そこに内包される歴史性や現代性をも読み解く講義になる。	
科	日本文学（近世）	近代以前の日本文学、すなわち日本の古典文学について、社会人として必要十分な教養や知識を授ける科目である。日本文学史（古典）は上代・中古・中世・近世と時代区分されるが、ここではおもに近世（江戸時代＝およそ17-19世紀）の作品を対象とする。近世文学は、都市の発達と本格的な出版の開始を背景として、同時代の韻文や散文、演劇はもちろん、国学や舌耕（落語等）の分野も開拓し、集積した古典の各ジャンルをも受け継ぎ、多彩な様相を示した。これらのなかから著名な古典作品を取り上げ、読解するとともに、同時代の思想や文化、風俗についての理解と考察を深める、単に文章の通釈をおこなうのみならず、そこに内包される歴史性や現代性をも読み解く講義になる。	
	日本文学（近現代）	日本は中国大陸・朝鮮半島をはじめとする他国との文化接触によって、自国の文化を多様で豊かなものとして育て上げてきた。明治維新以降は、これに欧米諸国との関係が加わり、近代化のなかで日本文化は複雑な色合いをもつに至る。特に20世紀以降、文学という文化表象は、近代化のもとで格闘する人々の心性や知性の表現の器として形成され、新聞・雑誌・書物などの媒体を通して読者に提供されてきた。「日本文学（近現代）」は、主に明治期以降の近代から現代に至る文学を、上記の観点から分析し、21世紀を生き抜くヒントを得ることを目的とする。	
目	詩と詩論	本科目では、日本の近現代詩、短歌、俳句を対象に、その鑑賞及び理論的考察を行う。詩言語における音声、リズム、隠喩、象徴、異化等のさまざまな技法を分析・考察するとともに、作品はもちろん著名な詩人についての理解も進め、さらに詩の歴史や優れた詩人を輩出した同時代の文化を多面的に学ぶ。現代の文化・言語の状況を視野におさめつつ、実践的に21世紀にふさわしい新しい「詩学」を学習する。	

授 業 科 目 の 概 要			
(経営学部 データサイエンス学科)			
区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
全	日本の伝統芸能	国際社会で自己の立場を確立するにあたり、基盤となるのは自身のよって立つ文化への広範な理解である。この観点から、本科目では日本の伝統芸能について学ぶ。伝統芸能は広くは絵画、工芸、茶道、華道などの芸道や民俗芸能なども含み、狭義には能・狂言、人形浄瑠璃・歌舞伎などの舞台芸術を指す。日本の伝統芸能の素養を身につけることにより、多様な文化に直面しても翻弄されることなく自立性を保ち、グローバル化された現代社会を生き抜くための一助としてほしい。	
	表現とメディアⅠ	表現が社会や文化を形づくりにあたって果たしている役割は、思いのほか大きい。それはその社会や文化の中で生きる人々の思考や感覚・欲望まで作り出している場合があり、現代に生きる私たちにとって、見逃せない問題である。「表現とメディアⅠ」では、主に言語による表現を中心に取りあげるが、歴史や社会と表現を別々に捉えるのではなく、それらの関係のあり方や、そこから生み出されてくるものを複合的に問題にしていく。個々の表現が相異なる時代状況とさまざまにかかわり合いながら示す多彩なはたらきを捉え、それらを多角的に考察することが、この科目の目的である。	
学	表現とメディアⅡ	表現が社会や文化を形づくりにあたって果たしている役割は、思いのほか大きい。それはその社会や文化の中で生きる人々の思考や感覚・欲望まで作り出している場合があり、現代に生きる私たちにとって、見逃せない問題である。「表現とメディアⅡ」では、言語による表現に加え、図像・映像表現もより積極的に取りあげる。その場合でも、表現・メディア状況・歴史・社会を別々に捉えるのではなく、それらの関係のあり方と、そこから生み出されてくるものを複合的に問題にする。個々の表現が相異なる時代状況とさまざまにかかわり合いながら示す多彩なはたらきを捉え、それらを多角的に考察することが、この科目の目的である。	
	文章作成技法	インターネットが普及し、誰もが容易に情報を手に入れられる時代になった。だが、日々更新され増殖する膨大な情報量を前にして、われわれ現代人は、時にその取り扱いに窮し、なす術なく立ち止まることすらある。「文章作成技法」は、そのような情報洪水 (Information Pollution) の時代において、受講者である学生たちがどのようにして情報を収集し、それら情報の適否を判断したら良いか、また、各情報の有用性・有益性をどのようにして分析すべきかを学び、それら一連の学修成果としての発展的レポートを作成する科目である。文章作成の基礎を踏まえた上で、より発展・応用的な文章技法の能力を備えることはもちろん、卒業後に参加する社会や組織、ビジネスの現場において、主体的な思考力・企画力・創造力を備えた社会人となるための地力を養う科目として位置付けられる。	
共	経済学Ⅰ	ミクロ経済学の基礎事項について学習する。ミクロ経済学の基本的道具は需要と供給という概念であるが、それらがどう決定され、結果としてさまざまな市場において価格がどのように決定されるかについて理解することを目的とする。また、さまざまな経済現象を需要と供給という道具でどのように理解できるか、さらに規制がどのように市場に影響するか、についても学習する。	
	経済学Ⅱ	マクロ経済学の基礎事項について学習する。主として国民所得とは何か、それはどのように決定されるのか、また利子率と国民所得はどのように関係しているかについて学習する。ビジネスを行ううえで景気動向などを知ることが必須であると思われるので、景気などのマクロ経済指標とその読み方についての基本的理解も目的としている。	
科	手話入門Ⅰ	手話という聴覚障害者のコミュニケーションツールの初歩レベルを学び、あわせて、聴覚障害者を取り巻く社会的環境を持つ諸問題を取りあげて、聴覚障害者のおかれた状況への理解を広げ、手話文化という「異文化」に対する理解をもつことを目的とする。初歩レベルとは、自己紹介や挨拶などにはじまり簡単な日常の会話ができるレベルをいう。手話の学習とともに、聴覚障害者との交流も進めることが望ましい。	
	手話入門Ⅱ	「手話入門Ⅰ」の上級科目である。手話の初級レベルを学び、あわせて、聴覚障害者を取り巻く社会的環境の諸問題の理解や手話文化という「異文化」に対する理解を深めることを目的とする。また、手話を学ぶことによって、通常の発話コミュニケーションのあり方そのものを振り返り、自己表現と他者理解の基本を理解するよう指導する。初級レベルとは、日常の基本的な会話と簡単な意見交換ができるレベルをいう。手話の学習とともに、聴覚障害者との交流も進めることが望ましい。	
目	社会学Ⅰ	社会学は社会諸科学の一専門領域であるとともに、社会諸科学を研究するうえでの基礎的な知見としての存在意義を有している。本学の全学共通科目の「社会学Ⅰ」では学生が、社会諸現象（経営・経済・法など）を分析するうえでの基礎的な諸概念を修得することを目的とする。また、社会諸現象全般について、学生の幅広い関心を喚起することも講義の目的の一つである。	
	社会学Ⅱ	「社会学Ⅱ」では、社会学の基礎的な諸概念を現実の社会諸現象に適用するトレーニングを行う。より具体的には講師が、現代社会のアクチュアルな諸問題をめぐる講義を行う。そのことを通じて学生が、現実の諸問題について社会的にアプローチすることができるように導く。	

授 業 科 目 の 概 要			
(経営学部 データサイエンス学科)			
区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
全	社会思想史Ⅰ	社会思想史とは人間が社会の中で生き、行動するために認識しなくてはならない社会の総体的把握であり、社会認識、社会改革、社会通念の思想である。しかしそれは文化伝統、政治思想や宗教思想、哲学的世界観、科学思想、文芸思潮などの認識を抜きにしては語れないから必然的にそれらを抱合することになる。社会批判、伝統批判、社会革新の思想の歴史である社会思想史は、したがって、時代が進むにつれ、また社会が異なるにつれ、各時代、各社会の社会思想史が成立することになる。日本は明治以後、西洋の制度や思想を受容してきたので、西欧の社会思想と日本の社会思想との比較思想が必要となり、「社会思想史Ⅰ」では西洋の社会思想を中心に論ずる。	
	社会思想史Ⅱ	社会思想史とは人間が社会の中で生き、行動するために認識しなくてはならない社会の総体的把握であり、社会認識、社会改革、社会通念の思想である。しかしそれは文化伝統、政治思想や、宗教思想、哲学的世界観、科学思想、文芸思潮などの認識を抜きにしては語れないから必然的にそれらを抱合することになる。社会批判、伝統批判、社会革新の思想の歴史である社会思想史は、したがって、時代が進むにつれ、また社会が異なるにつれ、各時代、各社会の社会思想史が成立することになる。日本は明治以後、西洋の制度や思想を受容してきたので、西欧の社会思想と日本の社会思想との比較思想が必要となり、「社会思想史Ⅱ」では日本の社会思想を中心に論ずる。	
学	宗教学Ⅰ	宗教を学ぶうえで重要なことは、それが個人の幸福や国家・民族社会の安定にどのように貢献しているかを理解することである。今日、宗教が個人の精神活動や民族社会を支える理念として、きわめて重要であることを認識している人は少なくない。「宗教学Ⅰ」では世界宗教といわれる仏教、キリスト教、イスラム教の基本的教義と歴史を中心に解説する。	
	宗教学Ⅱ	「宗教学Ⅱ」では、「宗教学Ⅰ」で取りあげた世界宗教といわれる仏教、キリスト教、イスラム教の基本的教義と歴史の解説を前提に、それが時代的、地域的にどのような影響を与えたか、そして、「そもそも宗教は人間にとって何なのか」という人間中心の視点も踏まえて総合的に宗教を考察することを目的とする。	
共	女性学	価値観の多様化に伴うモラル喪失が問題にされる一方、社会的には少子高齢化がかなりの勢いで進む現代において、男女が互いの人格を尊重して共生することは重要な課題である。「女性学」は、男女共生の観点から、青年期に遭遇する恋愛・結婚・出産・育児などの問題を、近年の法律及び論争などを参照して、個人的なレベルから社会的なレベルまでの幅で考察することを目的とする。	
	政治学Ⅰ	「政治学Ⅰ」は専門科目ではなく、政治学を初めて学習するための科目である。その学習の内容は主として、(1)さまざまな社会現象の中で政治とはどのような特徴をもち、どのような役割を果たしているのかということであり、(2)政治の主要な担い手にはどのようなものがあり、それがどのような役割を果たしているのかということであり、(3)現代政治の主要な制度や体制の特徴を理解することである。主として政治のミクロ的側面を対象とし、個人や集団の主張や政治参加という「政治過程」を対象とする。	
通	政治学Ⅱ	「政治学Ⅱ」は「政治学Ⅰ」と同様、専門科目ではなく、政治、特に現代政治を理解するために最小限必要な知識や理論を学習することを目的とするものである。主として政治のマクロ的側面を対象とし、政治権力の側からの「統治過程」を対象とすることになる。	
	地誌学Ⅰ	人間の諸活動は地域社会と密接にかかわっている。地誌学は、一般地理学とは異なり、限られた地域の文化・自然の全ての要素を調べ、地域的特性を明らかにする部門である。自然分野の観点からだけでなく、我々の先人たちがどのようにして地域に適合した生活・文化を作りあげてきたのかを、人文・歴史・社会などの各方面の学問と重ね合わせながら、地域と地域に土着した生活文化について論じる。「地誌学Ⅰ」では、上記の内容からいくつかを取りあげ、解説する。	
科	地誌学Ⅱ	人間の諸活動は地域社会と密接にかかわっている。地誌学は、一般地理学とは異なり、限られた地域の文化・自然の全ての要素を調べ、地域的特性を明らかにする部門である。自然分野の観点からだけでなく、我々の先人たちがどのようにして地域に適合した生活・文化を作りあげてきたのかを、人文・歴史・社会などの各方面の学問と重ね合わせながら、地域と地域に土着した生活文化について論じる。「地誌学Ⅱ」では、「地誌学Ⅰ」で取りあげた以外の内容について解説する。	
	日本思想史Ⅰ	日本思想史は、日本思想すなわち日本の文化伝統の歴史であり、歴史的に形成されてきた日本の社会と文化を、歴史学、宗教学、美術史学、神話学、文学、民俗学、文化人類学などの研究成果に立って問題にする。しかも文化伝統を離れては、真に実り豊かな思想や文化の創造はありえないから、「深い泉の国」(インモース神父)の文化学としての日本思想史は、古代日本から現代日本までの、文化伝統の創造的発展の系譜を追求することになる。日本は明治以後、西洋の制度や思想を受容してきたから、一般に、日本思想史は幕末明治維新までを扱う「日本思想史」とそれ以降の政治指導者・知識人・民衆の政治社会思想から文化論までを扱う「近代日本思想史」とに分かれる。「日本思想史Ⅰ」は主として幕末明治維新までを論ずる。	
目			

授 業 科 目 の 概 要			
(経営学部 データサイエンス学科)			
区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
全	日本思想史Ⅱ	日本思想史は、日本思想すなわち日本の文化伝統の歴史であり、歴史的に形成されてきた日本の社会と文化を、歴史学、宗教学、美術史学、神話学、文学、民俗学、文化人類学などの研究成果に立って問題にする。しかも文化伝統を離れては、真に実り豊かな思想や文化の創造はありえないから、「深い泉の国」（インモース神父）の文化学としての日本思想史は、古代日本から現代日本までの、文化伝統の創造的発展の系譜を追求することになる。日本は明治以後、西洋の制度や思想を受容してきたから、一般に、日本思想史は幕末明治維新までを扱う「日本思想史」とそれ以降の政治指導者・知識人・民衆の政治社会思想から文化論までを扱う「近代日本思想史」とに分かれる。「日本思想史Ⅱ」は主として近代日本思想史を論ずる。	
	文化人類学Ⅰ	文化人類学は、人の営みである文化現象の分析を通して「文化」、さらに「人類」とは何かを追究する学問である。研究対象となる領域には、婚姻、家族、親族、民族、社会といった組織の構造とそこで繰り広げられる、経済、政治、法、宗教、儀礼といった文化の形態が含まれる。フィールドワークという実証的手法によって世界のさまざまな集団の文化を比較し、異文化に対する理解力を養うことを目的とする。「文化人類学Ⅰ」ではこの中からいくつかを取りあげ、解説する。	
学	文化人類学Ⅱ	文化人類学は、人の営みである文化現象の分析を通して「文化」、さらに「人類」とは何かを追究する学問である。研究対象となる領域には、婚姻、家族、親族、民族、社会といった組織の構造とそこで繰り広げられる、経済、政治、法、宗教、儀礼といった文化の形態が含まれる。フィールドワークという実証的手法によって世界のさまざまな集団の文化を比較し、異文化に対する理解力を養うことを目的とする。「文化人類学Ⅱ」では「文化人類学Ⅰ」で扱わなかった内容の中からいくつかを取りあげ、解説する。	
	法学Ⅰ	初めて法学を学ぶ学生諸君に法学に対する興味や関心をもってもらい、基本的な法原則・法概念そして法の適用（解釈）などを修得してもらおうことが、本講義の目的である。主に民事法に関連した具体的な事例や判例を教材に用いて、市民感覚、みずからの考え、意見などと照らし合わせながら法的な問題解決に接近していくための基礎を学ぶ。	
共	法学Ⅱ	初めて法学を学ぶ学生諸君に法学に対する興味や関心をもってもらい、基本的な法原則・法概念・法解釈などを修得してもらおうことが、本講義の目的である。主に刑事法に関連した具体的な事例や判例を教材に用いて、みずからの考え、意見、感覚などと照らし合わせながら法的な問題解決に接近していくための基礎を学ぶ。	
	建学の精神を考える	亜細亜大学の歴史、教育理念、建学の精神等を学び、大学で学ぶ意味を考える。主に初代学長太田耕造先生の思想を学び、その教育への志を理解する。そして、受講生同士で話し合い、グループワークをする中で、受講生が亜細亜大学で学ぶ自分なりの意味を見だし、四年間の主体的な学びへと踏み出す場とする。	
科	心理学Ⅰ	人間の行動・意識・無意識を研究対象とし、生理学や生物学、物理学、精神医学、統計学、コンピュータ科学といったさまざまな科学の発想と研究手法を取り入れ、人間及び人間社会の理解を追究する学問である。具体的な研究領域としては、発達（児童、青年、老年）、知覚・感覚、学習、認知（記憶、知能、思考）、性格、臨床、社会、組織があるが、これらの講義を通じて、自己理解を深めると同時に共感的な他者理解ができるような目を養うことを目的とする。	
	心理学Ⅱ	人間の行動・意識・無意識を研究対象とし、生理学や生物学、物理学、精神医学、統計学、コンピュータ科学といったさまざまな科学の発想と研究手法を取り入れ、人間及び人間社会の理解を追究する学問である。具体的な研究領域としては、発達（児童、青年、老年）、知覚・感覚、学習、認知（記憶、知能、思考）、性格、臨床、社会、組織があるが、これらの講義を通じて、自己理解を深めると同時に共感的な他者理解ができるような目を養うことを目的とする。「心理学Ⅱ」では「心理学Ⅰ」で扱わなかった領域について講義する。	
目	哲学Ⅰ	古来以来、諸学問の起源として座してきた哲学。近代以降も諸学の主人として任してきた哲学が、現代の科学技術主義化の中でいかなる役目と位置を持ちうるか。今日の行きすぎた諸学が生み出す科学主義の悪しき側面を、総合的な視点から正していくことが哲学に課せられた課題であるといえる。この科目では、科学技術の諸現象を挙げながら、哲学の「総合」としての役割を考える。	
	哲学Ⅱ	現代ほど「人間」という概念があいまいになりつつある時代はないかもしれない。「人間」の地位と、その復権という視点から、哲学史の中で変遷してきた「人間」の概念を明らかにしつつ、現代における「人間」の意味を明らかにし、今後われわれが対処すべき哲学的課題に迫ることを目的とする。	

授 業 科 目 の 概 要			
(経営学部 データサイエンス学科)			
区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
全	倫理学Ⅰ	「よく生きること」についての自覚的反省を試み、受講生に自分なりの道徳的価値についての準拠枠を自覚させ、受講生同士の討論を通じて、異なる準拠枠に対する理解を深めることを目的とする。文学部ではないので、学説史的内容は最小限にとどめ、以下のような分野にかかわる同時代的課題のいくつかを取りあげて、そのトピックスを中心に、道徳的な認識と善悪の判断のあり方を考察する。生命倫理、環境倫理、戦争と平和、法と道徳、宗教と道徳、経済倫理、幸福論等。	
	倫理学Ⅱ	「よく生きること」についての自覚的反省を試み、受講生に自分なりの道徳的価値についての準拠枠を自覚させ、受講生同士の討論を通じて、異なる準拠枠に対する理解を深めることを目的とする。文学部ではないので、学説史的内容は最小限にとどめ、以下のような分野にかかわる同時代的課題の内、「倫理学Ⅰ」で取りあげなかったトピックスを中心に、道徳的な認識と善悪の判断のあり方を考察する。生命倫理、環境倫理、戦争と平和、法と道徳、宗教と道徳、経済倫理、幸福論等。	
学	心とからだの健康学	心身の状態が良好で充実した日常生活を送ることは、大学生活における勉学やクラブ活動などで各人の可能性を最大限に伸ばすための必須条件である。また、卒業後の社会生活でも、個人の能力や特性を最大限に発揮して活躍するための基盤となるものである。「心とからだの健康学」では食事と栄養、健康的な睡眠法、身体活動の重要性、肥満の予防法、生活習慣病の予防法、メンタルケアなど、幅広い内容から幾つかを取りあげて、健康に暮らすために必要な知識を、実学として科学的・体系的に理解する。	
	スポーツ実習	多くのスポーツは生涯にわたって楽しむことができ、趣味や生きがいとして非常に有意義な活動である。体育では生涯スポーツにふさわしいさまざまな種目や体力トレーニングのクラスを開講して授業を展開する。毎回の授業では、身体活動を行ってスキルや身体能力の向上を目指すだけでなく、ルール、審判法、試合進行の知識など生涯スポーツ実践の素養を修得する。さらに、視覚教材による技術分析、傷害の予防法、コンディショニング法、トレーニング理論、スポーツ栄養学など、質の高いスポーツ活動に必要な不可欠なスポーツ科学の理論についても大学レベルでの理解を深める。	
共	スポーツ科学概論	スポーツ科学は、人文・社会科学から自然科学まで多岐にわたる分野で構成されている。この科目では、スポーツを様々な視点から科学的に捉え、スポーツ科学の基礎知識についての理解を深めることを目的とする。	
	救急処置・予防法	スポーツを行う者にとって救命・救急処置法は必須の知識である。この科目では、日常あるいはスポーツ現場特有の救命、救急処置に必要な知識や具体的な方法を概説し、実際に対応可能となることを目的とする。また、障害の予防方法についての理解も深める。	
	スポーツ心理学	スポーツ心理学は、スポーツにおける心理的諸問題について研究する応用科学分野の学問である。この科目では、スポーツの場面にみられる心理的問題、その予防や対処の方法など、スポーツにおける「心」についての理解を深めることを目的とする。	
	スポーツ生理学	スポーツ生理学は、生理学（ヒトの身体機能について探求する）の応用領域である。この科目では、身体運動を行なった際に生体内で生じている変化を、細胞、組織、器官、器官系など様々な視点から概観し、その現象としくみについて探求していくことを目的とする。	
科	人体の構造と機能	この科目は、人体の構造と機能の基礎的な内容を理解し、私たちの日常生活においてそれらを役立てることができる能力を育成するものである。この科目の学問的な基礎となるものは、「解剖学」と「生理学」である。これらが扱う基礎的事項を、日々暮らしている私たち自身に当てはめて関連付けながら理解することで、自身の健康状態を正しく観察し、生活に科学的な視点を持つことができるようになる。	
	スポーツトレーニング論	この科目では、トレーニングの諸要素と原理・原則を理解し、筋力、パワー、スピード、持久力などを維持・向上させる具体的なトレーニング方法を学ぶことを目的とする。さらにスポーツ種目別のトレーニング方法を検証する。	
目	スポーツ特別講義	この科目は、スポーツ推薦入試で入学し、現在体育会に所属している学生を主な対象としたキャリア教育プログラムである。スポーツ業界や公務員など、社会で活躍されている方々から現在携わっている仕事についての話を直接伺い、自身の卒業後のキャリアを考えるきっかけとすることを目的とする。	
	スポーツの技術と戦術	スポーツ技術の分析及びトレーニング方法を理解し、さらにゲームにおける各種スポーツの競技力向上における戦術理論を紹介する。さらに各スポーツ種目別の技術・戦術を検証する。	

授 業 科 目 の 概 要			
(経営学部 データサイエンス学科)			
区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
全	スポーツの測定と評価	指導者が安全かつ効果的な指導を行うためには、指導対象の形態の特徴、技術・体力レベルを正確に把握する必要がある。また、競技者自身も把握することで、自己の身体的特徴についてより理解が深まる。この科目では、形態計測や体力測定とデータ分析、評価の意義、各種測定、分析、評価方法についての理解を深めることを目的とする。	
	リーダーシップとコーチング	スポーツに指導のために必要な指導方法とチームを率いるための実践的な統率力を学ぶ。さらに各スポーツ種目別に最適な方法を検証する。	
	情報と社会Ⅰ	現代社会を語る上で情報の視点は不可欠であり、同時に情報は社会の中でとらえなければその特質は見えてこない。そこで、この講義は現代社会と情報の関わりについて幅広い知識をもとに洞察できる素養を身につけることを目的とする。	
	情報と社会Ⅱ	この科目は、ここ数十年の間に私たちの仕事や生活並びに社会そのものに大きな変革をもたらし、今後もとどまるところを知らない情報並びに情報技術のしくみや本質を正しく理解するとともに、社会に与える影響について洞察を得ることを目的とする。	
学	情報リテラシー	目的に応じて情報を主体的に収集・分析・加工・創造・発信することで問題解決を図る能力（情報リテラシー）はどの学問領域においても重要で、大学教育の基礎となるものである。今日の情報化社会において、情報通信技術(ICT)はコミュニケーション手段としてなくてはならないツールで、その活用能力を身に付けることは重要である。一方、ICTを活用していく上で大切な情報モラル、セキュリティ、著作権等の情報倫理についても、きちんと理解させることとする。更に、授業では情報の活用という観点から、様々なデータに隠された真の情報を読みとることの大切さについても学習させる。	
	宇宙と物質	宇宙について人類は各時代に夢を描いてきた。科学が発展するにつれて宇宙の謎はかえって深まり、一般的に物理学の分野で際立って人気がある。宇宙に関する観測技術が驚異的に進歩し、高エネルギー物理学の進展とともに、宇宙の研究はいまや精密科学の領域に入ってきている。宇宙の進化、銀河、天体やまた物質の起源など興味あるテーマを観測事実に基づき科学的思考方法で講義する。これらのテーマはミクロの世界も含めて総合的な把握が要求され、基礎的な部分も必要に応じて学んでいく。	
通	環境科学	科学技術の進展に伴い経済を発展させ物質的に豊かな社会を築くことが人類の生存条件をよくすると信じられてきたが、予想に反して人類の生活の場が人類の生存に敵対的になってきている。この負の現象が環境問題であり、現代社会の最重要な課題の一つとなってきた。「環境科学」は自然環境に関する成り立ちや環境問題の発生メカニズムを科学的に理解すると共に各自が得た知識を生かしながら総合的に把握する。現状認識を踏まえて環境保全の実体を分析して環境保全のあるべき姿を模索する。	
	自然科学入門Ⅰ	「自然科学入門Ⅰ」は、物理学・化学・生物学などの自然科学がもっている学問としての性質を理解することを直接的な目的としているが、最終的には、科学的思考法とはどのようなものなのかを身に付けることを目的としている。このような目的を達成するためには、自然科学の成り立ちといった縦断的アプローチや、ある事項を個々の学問から多角的に扱う横断的アプローチ、そしてそれらを織り混ぜた組織的アプローチなどが考えられ、それぞれが実際の講義内容になるであろう。	
科	自然科学入門Ⅱ	「自然科学入門Ⅱ」は、物理学・化学・生物学などの自然科学がもっている学問としての性質を理解することを直接的な目的としているが、最終的には、科学的思考法とはどのようなものなのかを身に付けることを目的としている。このような目的を達成するためには、自然科学の成り立ちといった縦断的アプローチや、ある事項を個々の学問から多角的に扱う横断的アプローチ、そしてそれらを織り混ぜた組織的アプローチなどが考えられ、それぞれが実際の講義内容になるであろう。	
	目	数学入門Ⅰ	「数学入門Ⅰ」は、ベクトルと行列、ベクトルと行列の役割、連立一次方程式の解法などを主要な学習目標とする。コンピュータのアルゴリズムやプログラミングを作成するうえで最低限必要となる論理的な考え方を「正比例」をキーワードにして学ぶ。正比例を一般化した線形性の概念を使って社会科学の分野に現れるさまざまな現象の理解とそれらをモデル化する代表的な方法を修得する。さらに、各種の公務員試験や教員試験の問題を取りあげながら「線形数学」の分野の基本事項について実践的に学習する科目である。
数学入門Ⅱ		「数学入門Ⅱ」は、無限小の世界における正比例を一般化した「微分」の概念を使って社会科学の分野に現れるさまざまな現象の理解とそれらをモデルとする代表的な方法を習得する。コンピュータのアルゴリズムやプログラミングを作成するうえで最低限必要となる論理的な考え方を「連続と無限小」をキーワードにして学ぶ。さらに、各種の公務員試験や教員試験の問題を取りあげながら「微分と積分」の分野の基本事項について実践的に学習する科目である。	

授 業 科 目 の 概 要			
(経営学部 データサイエンス学科)			
区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
全	生物学Ⅰ	生物学では、生命体の諸現象（生命現象・遺伝・進化・形態・行動・生態など）を自然科学の手法で分析し、そこから生命体に関する基本的な原理や法則を理解することを目的とする。また、進歩の著しい遺伝子工学の基礎知識として、1. 遺伝現象と遺伝子という発想、2. DNAの構造、3. 発生・行動・進化と遺伝子、4. 遺伝子の利用、について学び、遺伝子に関わる今日の社会的課題にある程度の判断が下せるようになることを目指す。「生物学Ⅰ」ではこの中のいくつかの領域を講義する。	
	生物学Ⅱ	生物学では、生命体の諸現象（生命現象・遺伝・進化・形態・行動・生態など）を自然科学の手法で分析し、そこから生命体に関する基本的な原理や法則を理解することを目的とする。また、進歩の著しい遺伝子工学の基礎知識として、1. 遺伝現象と遺伝子という発想、2. DNAの構造、3. 発生・行動・進化と遺伝子、4. 遺伝子の利用、について学び、遺伝子に関わる今日の社会的課題にある程度の判断が下せるようになることを目指す。「生物学Ⅱ」では「生物学Ⅰ」で扱わなかった領域について講義する。	
	地理学Ⅰ	地理学は自然と人間との関わりを追求する科学である。多様な自然の中で人間がどのように生活しているか？人間は自然をどのように改変してきたか？その歴史は？今は？これらの問いを明らかにするために様々なアプローチが用意されている。「地理学Ⅰ」では、自然と人間との関わりについて理解を深めるための手段のひとつである『地形図（国土交通省国土地理院発行）』の使い方・読み方に関する講義に加え、我々の日常生活に不可欠な「水」に関する講義を行う。地下水や河川水、湖沼のもつ特性と飲料水や産業への利用に伴う様々な環境問題についてその歴史と現状、課題を中心に講義を行う。	
	地理学Ⅱ	地理学は自然と人間との関わりを追求する科学である。多様な自然の中で人間がどのように生活しているか？人間は自然をどのように改変してきたか？その歴史は？今は？これらの問いを明らかにするために様々なアプローチが用意されている。「地理学Ⅱ」では、人間生活の舞台となる大地（『地形』）の成り立ちについて、また我々人間を含めたあらゆる生物を取り巻く『大気』の状況について、主として自然地理学の観点から講義を行う。	
共	統計学入門Ⅰ	統計学は文系、理系を問わず非常に応用範囲の広い学問である。「統計学入門Ⅰ、Ⅱ」を通して統計学の入門レベルを概観することになるが、「統計学入門Ⅰ」では、統計学を理解する上で欠くことの出来ない確率が中心的テーマである。日常使われる確率が、数学的にはどのように表現されるのかしっくり聞いてほしい。	
	統計学入門Ⅱ	統計学は文系、理系を問わず非常に応用範囲の広い学問である。「統計学入門Ⅰ、Ⅱ」を通して統計学の入門レベルを概観することになるが、特に「統計学入門Ⅱ」では、統計学の中心部にふれるので、自分の専門のどんな所に統計学の応用があるのか常に気をつけてもらいたい。そういうことを考える習慣を身につけてもらいたい。	
通	基礎数理Ⅰ	文科系の学生に不足しがちな数理的な基礎知識と論理的な思考方法を学習し、将来専門的な科目を勉強する際に必要とされ、卒業後社会人として必要不可欠でもある「問題分析力」と「最後まで考え抜く力」を遺憾なく発揮できるようにするための基盤を養成する科目である。「基礎数理Ⅰ」では、受講者の多くが数学を苦手としていることを考慮し、入門レベルにおける数学の知識を再確認しながら、数理的な考え方の基本や論理的なものの見方を講義し、基礎的な問題演習を通じてこれら考え方や見方を修得する事ができるよう指導する。	
	基礎数理Ⅱ	文科系の学生に不足しがちな数理的な基礎知識と論理的な思考方法を学習し、将来専門的な科目を勉強する際に必要とされ、卒業後社会人として必要不可欠でもある「問題分析力」と「最後まで考え抜く力」を遺憾なく発揮できるようにするための基盤を養成する科目である。「基礎数理Ⅱ」では「基礎数理Ⅰ」と同程度の水準（またはレベル）を前提に、より進んだ内容の修得を目指す。就職試験における数理分野の問題解決能力や各種資格試験及び大学院への進学に際して必要とする数理的素養と論理的思考方法の基礎的な知識と能力を培うことを学習目標とする。	
目	プログラミング言語Ⅰ	与えられたアプリケーションソフトウェアを操作するだけでは、コンピュータを自由に活用することはできない。コンピュータ上で自分のやりたい事を自分の手で実現するための第一歩としてプログラミングの基礎について学習する。「プログラミング言語Ⅰ」では汎用プログラミング言語コンパイラシステムを使ってその言語の文法、プログラミング技法、データ処理方法等を中心に学習する。プログラミング言語としては、JAVA、C(C++)言語、アセンブラ（CASLⅡ）、Ruby等を使用する。これらの中から1言語以上を開講する。	
	プログラミング言語Ⅱ	「プログラミング言語Ⅰ」で学んだ知識と実習を基盤として、「プログラミング言語Ⅱ」ではより高度で実践的なプログラミング技術について学習する。「プログラミング言語Ⅰ」では基本的なプログラミングを理解し、実際に自分で入力して実行する過程が中心であったが、「プログラミング言語Ⅱ」ではプログラミングはもろろんのこと、自分でコーディングに必要な前処理からデバッグまで一人でできるようになることを目標とする。使用する汎用言語にもよるが、概ね多次元配列の処理やデータ処理がプログラミングでき、簡単なエディタ程度のアプリケーションの製作を目標とする。原則として、「プログラミング言語Ⅰ」と「プログラミング言語Ⅱ」は同一の汎用プログラミング言語を履修する。	

授 業 科 目 の 概 要			
(経営学部 データサイエンス学科)			
区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
全	基礎数理Ⅲ	学問研究においては、論理的思考力が必須である。情報を収集・整理し、これを正確かつ簡潔に伝える文章にまとめること、また、自分の見解を論理的に述べ、相手の見解を理解した上でこれと議論することは、いかなる学問にも共通するプロセスであろう。また、人間関係が重視される日常生活でも、論理的思考が重要な場面は多い。職業の場で意思決定が求められても、論理的に思考しなければ正しい決定は下せない。プレゼンテーションの機会が与えられても、論理性に欠けると他者の理解や納得を得ることができないのである。本講義では、このように学問の場でも日常生活においても不可欠とされる論理的な思考力を、各自の能力に応じたクラスに分かれて習得するよう努める。	
	基礎数理Ⅳ	情報通信技術の飛躍的な発達により、学問研究のあり方が大きく変容した。金融・経済、マーケティングなどの分野では、日々刻々と大量のデータが集積されている。法や政治の領域でも、新たな統計法により、公的統計が国民の合理的な意思決定のための基盤となる重要な情報であることを認め、公的統計の体系的整備と統計データの利用促進が図られることとなった。現在社会では、さまざまなデータを解析し利用する能力が不可欠である。そこで、本講義では、社会科学の各分野における事象の数的処理に関する知識と技術を習得させ、これを実際に活用する能力と態度を育成することを目的とする。	
学	データサイエンス入門	近年、マーケティング分野や医療分野をはじめとする産業界の多くの分野でデータサイエンスが重要な役割を果たしている。データサイエンスを各分野で効果的に応用するためには、「データの適切な扱いと前処理」、「適切なアルゴリズムの選択」、「結果の適切な解釈」を習得する必要がある。本科目では、データサイエンス分野で広く用いられているプログラミング言語を使用し、実データを使った演習を通じてこれらの内容を習得する。	
	表計算とデータサイエンス	表計算ソフトは、企業において各種集計やグラフ作成などの日常業務に利用されるだけでなく、データサイエンスにおいても基本的な統計分析やより高度な分析のためのデータの準備に活用される基本的なツールとなっている。この科目では、各種集計やグラフ作成などの基本的な利用法から始め、各種データの基本的な統計分析を統計的な背景も含めた上で理解し、表計算ソフトとプログラミングを組み合わせたより高度な活用法までを習得することを目的とする。	
共	データサイエンス応用プロジェクトⅠ	多くのデータがデジタル化され利用可能になった今日、大量のデータをコンピュータで分析することにより新たな知を発見するデータサイエンスが注目されている。本科目は、実際のデータの取得・分析・活用を体験することにより、数理・データサイエンス・AIの知識を他の分野に応用できるようにすることを目的とするPBL科目である。各クラスの担当教員の専門分野などからクラスごとにテーマを選び、データの可視化や各分野のデータの取得・分析・活用に関する実習を行う。	
	データサイエンス応用プロジェクトⅡ	多くのデータがデジタル化され利用可能になった今日、大量のデータをコンピュータで分析することにより新たな知を発見するデータサイエンスが注目されている。本科目は、実際のデータの取得・分析・活用を体験することにより、数理・データサイエンス・AIの知識を他の分野に応用できるようにすることを目的とするPBL科目である。Ⅱでは、Ⅰに引き続き、各クラスの担当教員の専門分野などからクラスごとにテーマを選び、より高度なデータ分析の手法や機械学習・AIに関するプログラミングなどを実習する。	
科	数理の世界探究	主として自然現象あるいは社会現象を対象に数理的なものの見方や捉え方について、基礎となる概念や手法に加えてコンピュータやインターネット上の有効な資料や資源を活用しながら、最先端の数理科学や統計科学の成果について紹介する。その際、社会科学系の学生にその本質部分を理解できるように身近な現象や事例を基にして導入部分の敷居を低くしながら、考察対象となる現象やデータの数理科学的あるいは統計科学的な体系化とモデル化について探究する科目である。	
	キャリアデザイン	キャリアデザインは、職業を中心とした人生をどのように過ごすかを計画すること、すなわち、これからの時間をどのように過ごすかを考えることである。キャリアデザインでは、将来自分がどのような仕事に就き、どのような人生を送りたいか等、将来の自分のイメージし、そこの至るプロセスを計画する。また、キャリア形成に必要な二つの柱（内部環境と外部環境）を理解し、併せて社会で求める就職基礎能力とコミュニケーションスキルを高めることを目的とする。	
目	現代アジアとキャリアデザイン	アジア地域で働く上での心がけや、具体的に必要となる能力・資格（法、経済、会計、語学など）の修得の必要性と修得の工夫、実際に現在アジアで活躍している、あるいはその長年の経験をしたさまざまな領域のトップランナーの楽しみや苦労などの具体的な体験を交えた講義により理解させることを目的とする。	
	キャリア・インターシップ	各学生が実際に企業活動の実体に触れることによって、実社会の諸問題（企業の仕組みや仕事の流れ、就業規則、社会人や企業人としての意識など）を学び、それぞれに職業観・就業観を育成して従来の職業選択や進路決定に役立たせるとともに、その後の大学生活全体の見直しと学業意欲の方向性・専門性（履修科目の体系化など）を見出す動機付けとなることを目的としている。つまり、本講義では、学生の学外研修による体験学習を通じて、各学生の職業意識の形成と大学内での学習効果の向上を期待している。	

授 業 科 目 の 概 要			
(経営学部 データサイエンス学科)			
区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
全 学 共 通 科 目	アジアキャリア開発入門Ⅰ	海外インターンシップに臨む人のための科目である。アジアと関わる産業、業界、企業などへの関心を明らかにし、その基礎的理解を深めつつ社会人としてのマナーを修得し、国内地域、企業、機関などで働く方へのインタビューを实践し「現場から学ぶ」姿勢を養う。	
	アジアキャリア開発入門Ⅱ	海外インターンシップに臨み、アジアとの関係を持って自分の将来を考える人のための科目である。グループワークを通じて自身のグローバルキャリア形成について具体的に考え、将来の自身の「夢」の実現への過程をイメージする。	
	キャリアIT入門	Society4.0である現在、誰もがIT（情報技術を日常的に活用し、企業活動やビジネスはITなしでは成り立たなくなっている。さらに近年では、IT化やデジタル化を超え、デジタルトランスフォーメーションが必要とされており、就職や起業を目指す人が自己のキャリア開発としてITと経営全般に関する知識を身につけることはますます重要になってきている。そこで本科目では、国家資格であるITパスポート試験の出題範囲に相当するIT知識と企業経営の基礎知識について演習問題を通して実践的に学ぶことによりITを弱みから強みに変えることを目的とする。	
	総合学術演習Ⅰ	2年次までの学修から得た学問的関心を深化させ、学生自身で調査、考案できるようになることを目指す。内容は教員の専門分野に応じたプログラムを提供する。	
	総合学術演習Ⅱ	3年次までの学修から得た学問的知見を発展させ、4年間の学修の成果となる卒業研究を行なう。内容は教員の専門分野に応じたプログラムを提供する。	

授 業 科 目 の 概 要				
(経営学部 データサイエンス学科)				
区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考	
専 門 科 目	デ イ エ ン ス	人工知能概論Ⅰ	コンピュータが人間の知能を模倣するしくみについて概観する。まず、知能とは何かを考察し、次に機械学習のさまざまな方法論について学んだ後、それらを用いて実現できる音声・画像・言語などの認識モデルを考える。またエージェントのコミュニケーションやゲームの理論などの応用課題を俯瞰する。	
		人工知能概論Ⅱ	人工知能には機械学習だけでは実現できない、論理推論という課題がある。ここではまず論理の基礎について学び、さらに人間の持つ知識や信念をコンピュータのデータ構造としてどのように表現するかを講義する。さらにこれらを活用して、法律の推論など具体的な社会応用例を述べる。本講は、CLILにより英語で講義を行う。	
		メディアプログラミングⅠ	ゲーム開発の手法は、ゲームソフトのみならずインタラクティブメディアやバーチャルリアリティコンテンツの開発に広く利用されている。この科目では、代表的なゲーム開発環境をとりあげ、ゲーム開発環境の基本的な使い方や3Dモデリングの基礎など、ゲーム開発の基本的な内容を学習する。	
		メディアプログラミングⅡ	ゲーム開発の手法は、ゲームソフトのみならずインタラクティブメディアやバーチャルリアリティコンテンツの開発に広く利用されている。この科目では、代表的なゲーム開発環境をとりあげ、コーディングを中心とした開発や複数のソフトウェアを連携させた開発など、ゲーム開発の発展的な内容を学習する。	
		データサイエンス・コロキウムⅠ	この科目は、データサイエンスを学ぶ導入レベルの学生が、データサイエンスやAIが具体的にどのように活用されているかについて双方向の講義、実習、プレゼン、討論などアクティブラーニングを取入れ、データサイエンスの可能性を学ぶ。取り上げるテーマは技術や社会の動向を踏まえ、毎年度見直す。	
		データサイエンス・コロキウムⅡ	この科目は、データサイエンスを学ぶ基礎レベルの学生が、データサイエンスやAIが具体的にどのように活用されているかについて双方向の講義、実習、プレゼン、討論などアクティブラーニングを取入れ、データから価値を創造する方法や意義について学ぶ。取り上げるテーマは技術や社会の動向を踏まえ、毎年度見直す。	
		IoT入門	実際に小型のIoTデバイスを用いて実習を行うことにより、IoTシステムに関する基礎知識と応用センスを体得することを目標とする。シングルボード型の小型IoTデバイスを用い、PCからリモート接続し、プログラミングを行い、IoTデバイスのセンサからデータを取得する方法を学ぶ。これらの実習を通じて、リモート接続の方法や基本的なUNIXコマンドなどを習得することも目的とする。	
		データサイエンス・トップマネジメント特別講義	データサイエンスやAIは机上の学問ではなく、社会をよりよくするために実践する手段である。企業が実際にどんな課題解決に取り組んでいるのかを最も把握しているのは企業のトップであり、トップのリーダーシップなしには持続しない。そこで本科目は、企業におけるデータサイエンスやAIの活用事例について開発・導入の背景、課題の克服、顧客価値や社会価値の向上などの具体的な成果について企業のトップが講義を行う。本科目を受講することによりプロジェクトの総体とDXにおける経営者の役割の重要性について洞察を深めることがねらいである。	
		自然言語処理	人工知能が実現できたかどうかの尺度に、人間の言語の認識が挙げられる。本講では、コンピュータを用いた言語処理を実現するために、まず基礎的な文法理論・意味論を学ぶ。次に統計的処理を用いた言語認識・生成技術を履修する。またこれらにより、自然言語文の機械翻訳や文章の要約などの応用技術を学ぶ。	
		データ数理Ⅰ	機械学習などのデータサイエンス・AIの手法を原理から理解し応用するためには、一定の数理的な知識が不可欠となる。そこで本科目では、データサイエンス・AIで用いられるベクトルや行列などの数理について入門レベルから学び、基本的な原理を理解するとともに具体的な課題への応用方法を身につけることを目的とする。	
		データ数理Ⅱ	機械学習などのデータサイエンス・AIの手法を原理から理解し応用するためには、一定の数理的な知識が不可欠となる。そこで本科目では、データサイエンス・AIで用いられる関数や最適化などの数理について入門レベルから学び、基本的な原理を理解するとともに具体的な課題への応用方法を身につけることを目的とする。	
		データ分析Ⅰ	社会科学や行動科学などで扱われるデータを対象として、心理統計学を基礎に基本的な分析手法について学ぶ。実際にデータの分析を行うことにより、分析手法の仕組みの理解や結果の解釈などを身につけることを目指す。データ分析用のプログラミング言語やソフトウェアを使用し、度数分布表の作成等の基礎的な内容から、t検定や分散分析の初歩までを扱う。	
データ分析Ⅱ	「データ分析Ⅰ」に続き、社会科学や行動科学などで扱われるデータを対象として、心理統計学を基礎に発展的な分析手法について学ぶ。実際にデータの分析を行うことにより、分析手法の仕組みの理解や結果の解釈などを身につけることを目指す。データ分析用のプログラミング言語やソフトウェアを使用し、回帰分析やパス解析、因子分析等の多変量解析を中心に扱う。			

授 業 科 目 の 概 要			
(経営学部 データサイエンス学科)			
区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
専 門 科 目	データサイエンス・コロキウムⅢ	この科目は、データサイエンスを学ぶ中級レベルの学生が、データサイエンスやAIをビジネス課題や社会課題に応用する手順について、双方向の講義、実習、プレゼン、討論などアクティブラーニングを取入れ、学習する。取り上げるテーマは技術や社会の動向を踏まえ、毎年度見直す。	
	データサイエンス・コロキウムⅣ	この科目は、データサイエンスを学ぶ中・上級レベルの学生が、データサイエンスやAIの知識やスキルの向上を図ることを目的とし、双方向の講義、実習、プレゼン、討論などアクティブラーニングを取入れ、学習する。取り上げるテーマは技術や社会の動向を踏まえ、毎年度見直す。	
	音楽情報処理	音楽は人間特有の情動表現であり、人工知能を考える上で、特に創造性とは何かを考察する格好の題材である。かつ、音楽は言語との類似性が指摘され、楽曲の表現には文法を用いたデータ表現がなされる。本講では、音楽の多様な数理的側面を捉え、コンピュータによる作曲・編曲・検索と情動認知を考える。	
	アルゴリズム入門	この科目では、ソートや探索、フローチャートなどの、データサイエンスの基盤となるアルゴリズムの基礎について学ぶ。ソートについては、バブルソート、選択ソート、挿入ソート、探索についてはリスト探索、木探索などの基本的なアルゴリズムをとりあげる。	
	卒業研究Ⅰ	卒業研究は、自ら研究の企画を立て、最終目標を設定し、調査、分析、制作、開発などの研究活動を経て所定の様式にて報告・提出を行うことで完結する。本科目は2年計画の1年目に相当し、学生は担当教員の専門領域の中から研究テーマを選択する。授業はプレゼン、討論、演習の形で実施されるので授業中と授業外に主体的・能動的な取り組みが必要である。秋学期末に向け、1年目の報告をまとめていく。	
	卒業研究Ⅱ	本科目は卒業研究の2年目であり、卒業研究Ⅰの成果をもとにさらに研鑽を行い、学術的に質を高め、秋学期末に向け、2年間の集大成として卒業研究をまとめていく。授業は卒業研究Ⅰと同様にプレゼン、討論、演習の形で実施されるので授業中と授業外に主体的・能動的な取り組みが必要である。	
	機械学習とディープラーニング	この科目では、機械学習とディープラーニングの初歩について学習する。データから学習する機械学習の原理、代表的な機械学習アルゴリズム、機械学習アルゴリズムの評価手法について学習する。	
	ウェブアプリケーション	ウェブアプリケーションとはインターネットのウェブ技術を基盤とする応用ソフトウェアであり、ブラウザがあれば利用できるため様々な分野で活用されている。本科目では、まずウェブサーバやデータベースに関する基礎知識を学んだ後、典型的なフレームワークを用いてウェブアプリケーションの開発を行う。	
	モバイルアプリケーション	スマートフォンなどのモバイル端末上で実行できるモバイルアプリケーションは数多く存在し、日常的に活用されている。モバイルアプリケーションの開発には、デバイスの種類や画面サイズが多岐に渡り、デバイス固有の機能があるなど、その他のアプリケーションにはない課題がある。本科目ではこうした状況を踏まえ、モバイルアプリケーション開発の基礎を学ぶ。	
	DX論	DXとは、既存価値にとらわれず、デジタル技術を活用して変革を続け、社会や顧客への提供価値を高め続ける活動・プロセスであり、あらゆる業界に必要とされている。AIやデータサイエンスを駆使するためにはデータを取得するしくみを構築・運用する必要があり、DXはデータサイエンスの基盤であり、手段である。そこで本科目では事例研究や演習を通じDXのプロセスを学ぶことによりDXの本質とデータから価値を創出するしくみについて洞察を得ることを目的とする。	
	バーチャルリアリティ	バーチャルリアリティはゲームのみならず産業界の多くの分野で活用されている。この科目では、メディアプログラミングⅠ・Ⅱで学習したゲーム開発環境の知識に基づき、バーチャルリアリティコンテンツの作成について学習する。実際に各自が作成したコンテンツを、バーチャルリアリティのヘッドセットを使用して体験する。	
	ITセキュリティ	この科目では、AIの活用に必要なITセキュリティの基礎について学ぶ。セキュリティの3要素（機密性、可用性、完全性）、電子署名、公開鍵認証基盤、ブロックチェーンなどについて学習する。	

授 業 科 目 の 概 要			
(経営学部 データサイエンス学科)			
区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
専 門 科 目	ビジネス入門	この科目では、実際の企業の事例をもとにビジネスの基礎的な仕組みや、企業が属している産業や経済といったマクロな経営環境の中で、企業がどのように行動し、またマクロ環境の影響を受けるのかについて学ぶ。ビジネスの仕組みや企業を取り巻くマクロ環境について学ぶことは、ビジネスの面白さに気づくことに加え、企業や業界を分析する視点を養い、企業の経営戦略を理解する上でも重要である。本科目は企業経営を初めて学ぶ1年生向けの導入科目に位置づけられる。	
	経営学	この科目では、組織・人材・財務・戦略といった、企業が活動する上で欠くことのできない主要分野について、その生成から今日までの発展プロセスに関する基本的内容について学ぶ。企業活動の主要分野について学ぶことは、現代の企業経営を考察するための基礎的能力を養成することに加え、2年次以降に経営の専門分野を深く学習する上でも重要である。本科目は企業経営を初めて学ぶ1年生向けの基礎科目に位置づけられる。	【オムニバス】 履修分野 組織・人事・財務・戦略
	キャリア論	この科目では、キャリアの定義とその概念の拡大の背景、個人のキャリア発達のプロセス、キャリア発達に影響を与える要因、キャリア発達がもたらすものといったキャリアに関わる理論や基本的考え方について学ぶ。キャリアの理論や基本的考え方を学ぶことは、個人の大学卒業後の進路を決定するだけでなく、職業経験を通じた自己の成長や、職業とそれ以外の生活のバランスの上にとった人生全体の幸せを追求していく上で重要である。本科目はキャリア関連科目における基礎科目に位置づけられる。	
	ビジネスマナー	本科目は、ビジネスの場面で効果的に仕事を進め、社会人として快適な生活を営むために、ビジネスにふさわしい振る舞いや姿勢および社会人に求められる心構えや考え方を学ぶ。ビジネスマナーならびに社会人に相応しい振る舞いを実践できるようになることは、インターンシップや就職活動に取り組む上でも重要である。ビジネスや社会で求められるマナーの基礎知識の習得と実践を通じ、ビジネスパーソンおよび社会人として相応しい振る舞いができるようになることを目的とし、キャリア関連科目における1年生向けの実践科目に位置づけられる。	
	経営と法律	私たちが生活していくうえで、企業で働いたり企業から商品やサービスの提供を受けたり、また、それらが作り出す文化など、企業活動とは多くの接点も持っている。しかし、企業の活動は、ある時は法律や社会の規範を逸脱し、生活者の安全や快適な生活を脅かすことも少なくない。たとえばブラックバイト（企業）で働かされたり、アンケートなどを名目にした誘い込みを用いた違法な商品の勧誘・販売、高利の金融、クーリングオフなどの消費者の権利の秘匿・不通知などもある。また、知らず知らずのうちに自分が加害者に仕立て上げられていくようなこともある。本科目は企業、経営や社会の法的側面を知るための入門科目であり、このような被害に遇わない様にするために、また、遇ってしまったらどのようにすればよいのか、誰が、どのような法律が自分たちを守ってくれるのか、などについて実際の身近な事例に基づいて講義する。	
	ビジネス・シミュレーションⅠ	企業の大小を問わず、ビジネスの世界は人々の意思決定にもとづいて動いている。この科目では、経営・経済意思決定シミュレーション・ソフトを使用し、具体的な話し合いと意思決定体験を通して、意思決定と責任の重さについて学習する。またシミュレーションを通して、経済社会における共存の仕組みと自己の果たす役割を学んでいく。経営学全般の導入的な科目である。	
	ビジネス・シミュレーションⅡ	ビジネス・シミュレーションⅡでは、経営上の意思決定の重要性を基に企業・社会が必要とされる起業マインドの養成ならびにビジネス創造のための発想と展開の視点と方策を学ぶ。今後の社会、企業では、あらゆる業種において職位・職種を超えて、変化に対応し新たな価値を創造するビジネスが求められる。本講義では、受講者は自らを起業家として仮想した上で、現実社会への洞察と内省に基づき、新たなビジネスの創造と具現化を試みる。その過程により社会と企業の捉え方、さらに自己の潜在力への気づきを促すことを目指す。	
	経営財務論	経営財務は、会社の資金（カネ）にかかわるマネジメントにかかわる。会社が事業を行うに際し、どのような資金調達の手段があり、どのような基準でそれを選択すればいいか、またどのような資金運用の手段があり、どのような基準でそれを選択すればいいか。以上について基本的な事項を学習する。	
	経営戦略論	この科目では、企業が存続・発展していく際に、企業内部に経営資源を開発・活用しつつ、市場で競争優位を構築していくシナリオを立案するといった経営戦略論の基礎を学ぶ。経営戦略の策定、基本的な競争手段の構築、内外の環境分析、経営資源の配分といった、企業経営を理解する上での基本科目に位置付けられる。	
	経営組織論入門	この科目では、組織の定義、組織の成立要件、組織構造、組織運営といった経営組織論の基本的事柄について学ぶ。経営学を学ぶ上でも、ビジネス実践の場においても、多数の人びとが織り成す組織という存在について知ることは必要不可欠である。この科目は、経営組織論の基本的な用語や概念を理解し、それらを用いて、組織について整合的に論じることのできる能力を身につけることを目標とする入門科目である。	

授 業 科 目 の 概 要			
(経営学部 データサイエンス学科)			
区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
専 門 科 目	人事労務管理概論	この科目は、経営の要素といわれる「ヒト」「モノ」「カネ」「情報」のうちの「ヒト」について学ぶもので、一般的に人事管理といわれる領域についての学習する。他の要素と異なり、人は状況や時間経過とともに変化するので、定量的な管理だけでなく定性（質）的な管理も重要になり、働く人々を取り巻く法律や制度とおかれている状況に関する知識の涵養は、企業経営を学ぶうえで非常に重要である。この科目は、1年次の必修科目で学んだことを受けて、人に関する領域の学習するための基礎科目にあたる。	
	グローバル経営論	この科目では、グローバル企業の経営の諸側面について、基礎的な事項を中心に学んでいく。グローバルな視点に立ち、欧米アジアの主要企業が、どのような戦略・組織体制のもと、経営を実践しているかを理解することは重要である。1年次における経営関連科目の基礎学習を踏まえ、分野横断的に、事例研究などを通じて、実践的な知識やノウハウを習得することを旨とする。	
	会社法	本科目では、会社法を中心に学修する。会社法は企業法の基本であり、最重要な科目である。会社法は、経済活動の主体である会社企業、とりわけ株式会社の組織に関する法制度を言及する組織法である。現代社会において、株式会社の重要性は大きく、したがって講義内容も単なる法制度の理解だけでなく、判例や時事的問題も詳細に取り上げる必要がある。	
	ビジネスコミュニケーション I	This is a listening speaking course designed for intermediate level Business Department students. The course focuses on the English used in a business environment. Every member of the class is expected to participate. Each semester students may have to make a group presentation.	
	ビジネスコミュニケーション II	This is a listening speaking course designed for intermediate level Business Department students. The course focuses on the English used in a business environment. Every member of the class is expected to participate. Each semester students may have to make a group presentation.	
	ITとビジネス	情報技術（IT）やもののインターネット（IoT）はビジネスや企業経営だけではなく、私たちの生活も大きく変えつつある。今後、IoTを活用したさまざまな製品、システム、サービス、ビジネス等が創出されることは言うまでもなく、一方で技術が先行し、社会のしくみ制度が追いついていない側面もあり、こうした分野の知識や洞察力が不可欠になる。そこで、本科目では、企業や社会の諸課題を解決するためにITユーザーの視点から現状におけるITの動向並びに学び、ITに関する洞察力を養うことを目的とする。	
	トップマネジメント特別講義	実業界の第一線でトップとして活躍されている経営者の方々から、企業経営の実際を直接聞いて、これまで学んできた経営学の理論に、実践としての経営を融合することを目的とした科目である。講義の共通テーマはその年にふさわしいものが選ばれるが、実際の企業について学ぶことと、トップ自身を通じてそのリーダーシップを学ぶことは、常に共通した目的である。	
	人的資源管理論	この科目は、人事・労務管理のうち、主に人が企業に採用されてから退職するまでの一連の処遇を扱う人事管理と、働く人々が仕事の中で抱く感情について扱う人間関係管理、そしてそれらに大きな影響を与える賃金や労働時間などに関する労働条件管理について学ぶ。今日の成果主義的な管理は、働く人々を個別の管理単位として把握しており、どのような側面が重視され、それが賃金や昇進などのような処遇にどのような結びつくのかという点の理解は、様々な雇用形態のさまざまな地位で働く上でも部下を管理する上でも、重要である。企業経営における人の管理については、その全体像は選択必修科目である人事・労務管理概論で学んできた。この科目は、人の管理に関する科目の発展科目と位置づけられる。	
	経営組織論	組織の営みには大きく分けて行為、意思決定、認識の3つの局面がある。この科目では、主要な組織理論をこれら3局面から歴史的に整理し、包括的かつ体系的に組織に関する知識を習得し、それらを用いて現実の複雑な組織現象を論理的に考えることのできる能力を身につけることを目的としている。	
	ビジネスモデル分析	経営戦略領域の応用科目として、優れたビジネスモデルの生成と発展について学ぶ。ビジネスモデルとは、企業が特定の事業において、継続的に売上や利益を生み出す仕組みであり、現代ではこの優劣が企業業績に大きな影響を与えている。本講義では、さまざまな優良企業のビジネスモデルを取り上げつつ、それがどのように生み出され競争優位につながっているかを自ら分析できるようになることを目指す。	
中小企業論	日本企業の99%を占める中小企業は、経済の発展と成長に重要な役割を果たしている。大企業とは異なる特性を持つ中小企業について、その発生過程と歴史的な発展、今日までの研究系譜を理解したうえで、その存在意義とそれが持つ固有の問題点を解明する。経済、社会、自然環境の変化が中小企業に及ぼす影響を確認しながら、新たな役割認識のもとで、経営資源の調達、組織運営、経営行動などの視点から中小企業の生存の方策を探る。		

授 業 科 目 の 概 要				
(経営学部 データサイエンス学科)				
区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考	
専 門 科 目	経 営	技術マネジメント論	この講義では、技術そのものを論じるのではなく、経営戦略的な視点から技術を捉えていくものである。最近の景気が芳しくない状況においても、元気のある企業が存在している。また、同じ業界に属しながらも、企業間の業績の格差が生じている。元気があって好業績を維持している企業は、次々と市場性のある独自の商品やサービスを世の中に提供している。このような競争優位性の高い企業のマネジメント・システムについて事例を踏まえて講義していく。	
		産業と技術	資源の乏しいわが国の進むべき道は科学技術創造立国である。つまり知恵を絞って新たな科学技術を創造することにより産業を発展させていくことである。この技術の原理を理解させ、それがいかに新製品の開発につながっていくかを講義していく。その際、この開発を支えるマネジメントの基礎理論にも触れていく。さらに、技術が消費者の生活スタイルをいかに変えていくかをデジタル技術やライフサイエンス等を取り上げて論じる。	
		経営史	企業は、いかに成長・発展するのか、経営者の理念はいかなるものか、そこにおける経営の方法はどのようなものか、こうした問題についてケース・スタディを積み重ねての歴史的研究が経営史である。したがって、今後学習していく企業経営に対するより高次元の理論的・実践的研究の基盤をなすものである。企業のあり方あるいは企業管理の特質は、それぞれのおかれている歴史的環境に大きく基因する。それ故、特にアメリカと日本を軸にした比較史的視点が重要となる。	
	営 業	経営システム論	この科目は、「システム」というものの見方、認識のしかたを体得することにより、さまざまな経営やマネジメントの基礎的な素養を磨くことを目的とする。授業は、「全体」を見ながら、問題を「構造的に」とらえる方法並びに「複雑性」や「多様性」をシステム的にマネジメントする方法について講義と演習により行う。	
		企業経済学	この科目は、ミクロ経済学の基本的手法とゲーム理論という「道具」を用いて企業にかかわる経営現象を説明する方法の習得を目的としている。ミクロ経済学にかかわっては、各特性の市場における価格決定などを、ゲーム理論では、主に寡占市場についてゲームによる定式化をどのようにおこなうか、それをどのように解法するか、その基本的な考え方を学習する。規模と範囲の経済、製品差別化、価格差別化などについても触れる。	
		ファイナンス特講	ファイナンス特講は、銀行や証券会社や保険会社、その他ファイナンス関係のコンサルタント会社、民間研究所などに籍を置きながら、ファイナンス業務やコンサルティングに携わっている専門家に、ファイナンスにかかわる実践や実務内容を活かした授業として設けられている。ファイナンス領域の発展科目として位置づけられる。	
	科 科	組織心理学	組織の中で働いている人々（たとえば、組織のトップ、ミドル、現場で働いている人々など）の行動、組織と人間との相互作用、組織と環境との相互作用などをこれまでの研究成果、理論、実例をもとに講義する。具体的には、働く人々の「やる気」や満足感、組織のトップやミドルのリーダーシップ、組織の有効性とコミュニケーション、組織成員の選抜・採用・配置・教育訓練のやり方、個人のキャリア開発、組織と個人のコンフリクト、組織コミットメント、働く人々のメンタルヘルス、組織と職務の設計、組織風土や組織文化、組織の活性化などについて論ずる。	
		組織認識論	経営組織論ではこれまで主に、組織における行為、意思決定といった局面に焦点が当てられてきたが、組織を取り巻く環境が激変し続けている現代においては、組織がいかに状況を適切に認識するか、組織的にいかに「知」を獲得するか、さらには新たな「知」をいかに創造するかといったことが、組織の生存にとって極めて重要な課題となりつつある。本科目では、組織認識および組織知に関する、代表的な理論とそれらの実践的応用事例、さらには最先端の研究内容について学ぶ。	
		コーポレートガバナンス論	現代株式会社における所有と支配の問題について学ぶ。「会社は誰のものか」という企業概念について、企業によってまたは国によって考え方が大きく異なる。企業の統治のあり方を学ぶことは、企業の意思決定と監督の実質的な権限および責任の所在を理解する上でも重要である。本科目は企業の統治を学ぶマネジメント関連科目における発展科目である。	
	目 目	ベンチャービジネス論	本科目は、ベンチャービジネスや起業の概念および実態を理解した上で、事業機会の探索、起業、運営に至る具体的な実践的な知識等を提供することを目的とする。本科目では、ベンチャービジネスの特性、起業から成長に至るメカニズム、およびビジネス創造のための発想法などを学ぶとともに、ベンチャービジネスを推進する上で重要なビジネスプラン（事業計画）作成のポイントを体得する。	
基礎ファイナンス分析		エクセルの基本操作能力のみを前提として、受講生が、株価などのデータからある目的の情報を導き出すにはどのような処理をすればについて、さまざま試行錯誤しながら、基本的な数学的知識、ひいてはファイナンスに必要な知識を取得させるということを目的としている。ファイナンス領域の発展科目として位置づけられている。		

授 業 科 目 の 概 要			
(経営学部 データサイエンス学科)			
区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
専 門 科 目	キャリアとリーダーシップ	この科目では、キャリアとリーダーシップという2つのテーマを取り上げ、個人のキャリア発達に影響を与える要因やキャリア成功が意味するもの、リーダーに求められるものなどについて学ぶ。キャリアとリーダーシップを関連づけて学ぶことは、キャリア発達とリーダーとしての成長の関係について理解を深めるだけでなく、偉大なリーダーのキャリアからキャリア発達のヒントを抽出する上で重要である。本科目はキャリア関連科目における3・4年生向けの発展科目に位置づけられる。	
	グローバルビジネス分析	この科目では、具体的な事例研究を積み重ねながら、日系企業のグローバルな事業展開策について、分野横断的に学んでいく。世界やアジアの産業・企業間の関係が深まるなか、「日本の立ち位置」（ポジショニング）について考えることは重要である。1・2年次の基礎学習や経験を踏まえ、事例研究などを通じて、実践的な知識やノウハウを習得することを目指す。	
	アジアのビジネス環境 I	アジアの経済、貿易・投資、産業、経営環境などについて学ぶ。成長するアジアについて知見を得ることは、将来に向けて重要である。1・2年次における経営諸領域の学修を踏まえ、アジアという地域の視点から横断的に学ぶ、専門科目として位置づけられる。	
	アジアの企業と経営 II	アジアの経済・社会・文化環境の中で、企業経営がいかに行われているのかについて学ぶ。日系あるいは現地の企業が、実際にどのような経営を行っているのかを、具体的に学ぶことは重要である。1・2年次における経営諸領域の学修を踏まえ、アジアという地域の視点から、各国の事例研究を中心に横断的に学ぶ、専門科目として位置づけられる。	
	アジアのビジネス環境 II	アジア地域・国に関する経済環境を主たるものとしながら、産業の発展、投資環境の変化など、マクロ環境を中心に明らかにする。ビジネス環境として、経済成長に果たす政府の役割、輸出奨励策、産業育成策、経済成長とアジア地域、地域経済圏、自由貿易圏の形成、アジアの成長可能性と制約面、ASEAN・アジアNIES・中国などの事業環境の推移から企業経営に与える影響を示すものである。これらの環境要因とともに企業がどのように対応してきたのかを地域別の検討や、産業・市場ごとの検討（例えば、製造業、金融業、マーケティング戦略）を毎年異なったテーマで解明する。	
	アジアの企業と経営 III	アジア地域という経済・社会・文化環境の中で、いかなる企業経営が行われているのかを中心に明らかにする。日本企業のアジア地域・国への進出や現地での経営、また現地企業の経営への影響、そして競争関係などを地域的な特性とともに課題も含めて具体的に示す。すなわち企業の進出目的と状況、現地への経営移転、生産管理、人事労務管理、現地化政策、人材育成、現地企業の経営、現地市場での競争、などを最近の具体的な個別のケースを用いて理解を深める。	
	ビジネスイシューズ I	This course aims build to build the students' confidence as speakers of English through the development of discussion and critical thinking skills related to business and international topics. Students learn and utilize appropriate Business English vocabulary and phrases in class discussions and presentations.	
	ビジネスイシューズ II	This course aims build to build the students' confidence as speakers of English through the development of discussion and critical thinking skills related to business and international topics. Students learn and utilize appropriate Business English vocabulary and phrases in class discussions and presentations.	
	流通・マーケティング	日常生活で接する流通とマーケティング活動について学ぶ。流通とマーケティングを取り巻く現象や企業活動、それらを捉えるための理論に興味と関心を持つことは重要である。本科目は、2年次以降の流通およびマーケティング関連科目を学ぶために必要な入門科目である。	
	マネジリアル・マーケティング論	主に製造企業のマーケティングを全社的な視点に立って戦略的観点から学ぶ。顧客志向に立ったマーケティングを学ぶことは、市場環境がダイナミックに日々変化の中で顧客の創造と関係維持を行う上で重要である。本科目は、1年次で学んだマーケティングの入門的内容を踏まえた上で、3年次以降のより専門的な学習につなげるマーケティング関連科目の中核的な基礎科目である。	
流通論	流通と商業に関わる基本概念と理論に加えて流通の社会的機能と役割を学ぶ。日々進化する流通に関わる現象や企業活動を理解するために流通と商業を学ぶことは重要である。本科目は、1年次で学んだマーケティングの入門的内容を踏まえた上で、3年次以降のより専門的な学習につなげるマーケティング関連の中核的な基礎科目である。		

授 業 科 目 の 概 要			
(経営学部 データサイエンス学科)			
区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
専 門 科 目	製品・マネジメント論	プロダクトライフサイクルという考え方に基づいたプロダクトの体系的なマネジメントについて学ぶ。絶え間なく変化する顧客に対応するための創造的破壊（イノベーション）を理解し実践することは組織の持続的な成長を考えるうえで重要である。本科目は、1、2年次で学んだマーケティング関連科目の知識を基礎として、プロダクトの体系的なマネジメントを通じて顧客の創造と維持を学ぶマーケティング関連科目における発展科目である。	
	ブランド・マネジメント論	マーケティングの中心課題の1つであるブランド・マネジメントについて学ぶ。強いブランドを構築・維持していくために、複雑化するマーケティング活動を統合的に管理・実行する必要がある、ブランド・マネジメントを学ぶことはこれらの施策を考える上で重要となる。1、2年次で学んだマーケティングの基礎的な内容を発展させ、本科目はマーケティング諸活動を通じたブランド構築や維持・発展について学ぶマーケティング関連科目における発展科目である。	
	マーケティング・コミュニケーション論	マーケティング論の各論の1つとして、マーケティング・コミュニケーションに関する諸側面を考察する。製品・サービスなどをめぐる売り手と買い手の間の複雑なコミュニケーション活動について、この科目では、ミクロ面（企業経営的視点）の統合型マーケティング・コミュニケーション、広告戦略、媒体論などが主要な検討対象となる	
	サービス・マーケティング論	本質的に無形性を有するサービスを対象とするマーケティングの基本的考え方と適用方法について学習する。まず、プロダクトとしてのサービスの特徴について把握し、サービスマーケティングの基本的なスタンスについて理解する。具体的には、マーケティングの対象であるサービスとモノとの比較から、サービスの特徴を把握し、その特徴から従来のものに対するマーケティングとは異なるアプローチが必要であることを理解し、そのアプローチ法に基づいてサービス業におけるプロダクトを一つ設定し、マーケティングリサーチに基づくプロダクト開発を行い、開発されたサービスプロダクトについて、顧客に対してどのように販売していくかを企画書として提案するところまでを目標とする。	
	消費者行動論	消費者の目に見える顕在的行動が、環境の要因（たとえば、自然的環境、企業的環境、経済的環境、社会的環境、文化的環境、政治的環境など）や目に見えない潜在的行動が環境（心、あるいは意識に近い）によってどのように変化するか、また、消費者の顕在的行動が環境をどのように変化させていくのかというダイナミクスを、これまでの研究成果、理論、さらに、消費者の顕在的行動や潜在的行動を知る方法としての「行動的アプローチ」の有用性についても講義する。	
	マーケティング・リサーチ	市場を理解するために用いられる市場調査の手法やデータ分析の手法について学ぶ。効果的なマーケティング戦略を立案するうえで、マーケティング・リサーチによって得られるデータを活用することは有用であり、その方法と実践を学ぶことは重要である。本科目は、1、2年次で学んだマーケティング関連科目の知識を基礎として、マーケティング・リサーチの方法を実践的に学ぶマーケティング関連科目における発展科目である。	
	ソーシャル・マーケティング論	この科目では、重要度を高める環境問題を、主としてマーケティング論の視点から考察する。環境問題と企業活動の関わり、環境志向の経営およびマーケティングの重要性、環境ビジネスと経営および環境マーケティングの概要と動向の理解を目的とする。講義内容には、地球環境問題と環境要請、環境問題と企業の関わりと取組み、環境マネジメント・システム、環境マーケティング・システム、環境4P、グリーン・コンシューマー論、環境規制などが含まれる。	
	デジタル・マーケティング論	デジタル環境下におけるマーケティングについて学ぶ。昨今のテクノロジーの発展により、マーケティングも日々進展し、特にデジタルを活用したマーケティングは企業業績を左右するほど重要となる。1、2年次で学んだマーケティングの基礎的な内容を発展させ、本科目はデジタル環境に即したマーケティングについて学ぶマーケティング関連科目における発展科目である。	
	グローバル・マーケティング論	グローバル市場におけるマーケティングについて学ぶ。グローバル化が進展し、多くの組織が海外市場で活動を行うことが求められており、グローバル・マーケティングの理論や実践を学ぶことは重要である。本科目は、1、2年次で学んだマーケティング関連科目の知識を基礎として、グローバル市場における組織のマーケティング活動について学ぶマーケティング関連科目における発展科目である。	
	小売マーケティング論	小売企業のマーケティングについて学ぶ。小売企業を取り巻く環境が大きく変化するなかで、小売企業によるマーケティングの基本的考え方とその戦略を学ぶことは、小売機能を有する企業の活動を理解する上で重要である。本科目は、1、2年次で学んだマーケティング関連科目の知識を基礎として、小売企業によるマーケティングを学ぶマーケティング関連科目における発展科目である。	

授 業 科 目 の 概 要			
(経営学部 データサイエンス学科)			
区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
専 門 科 目	サプライチェーン・マネジメント論	企業活動の中でも調達活動（供給）に焦点を当てたサプライチェーンのマネジメントについて学ぶ。顧客に製品（プロダクト）を提供するために必要な原材料と素材などの調達、生産、流通（在庫、輸送・配送）、販売に至るまでの供給連鎖の全体最適化を理解することはビジネスの競争優位を考える上で重要である。本科目は、1、2年次で学んだマーケティング関連科目の知識を基礎として、サプライチェーン全体を通じた最適化を実現するマネジメントを学ぶマーケティング関連科目における発展科目である。	
	産業財マーケティング論	企業・組織を対象とする産業財（生産財）マーケティングについて学ぶ。最終消費者を対象とする消費財マーケティング（BtoC）に加え、営利企業はもちろん公益機関と政府機関も含むビジネス・マーケットにおける産業財マーケティングを理解することは、様々なマーケティングを考察するうえで重要である。本科目は、1、2年次で学んだマーケティング関連科目の知識を基礎として、産業財（生産財）の市場と顧客、そしてBtoBマーケティングの特徴を学ぶマーケティング関連科目における発展科目である。	
	マーケティング・ケーススタディ	企業のマーケティング活動に関するケースを題材に、1、2年次で学んだマーケティングに関する知識を、実際の企業事例に当てはめてマーケティング戦略の立案や議論を行う。ケース分析やクラス討議を通じて実際のマーケティング実務で活用できる知識を習得することは重要である。本科目は、1、2年次で学んだマーケティング関連科目の知識を基礎として、マーケティング上の意思決定について実践的に学ぶマーケティング関連科目における発展科目である。	
	マーケティング論特講	マーケティング論について、理論的・歴史的に理解を深めるだけでなく、実際の諸活動がどのように実践されているのかを体系的に学ぶことも重要である。この科目は、マーケティング領域の特別講義として、企業、コンサルタント会社、研究機関などに籍を置きながら、マーケティングの実務やコンサルティングなどに携わっている専門家に、マーケティングの実践や実務の内容を学生に教授してもらうことを目的として設けられている。マーケティング実務の内容に応じて、適切な授業方式で学習する。	
	会計学	営利・非営利を問わず、現代の企業は経済活動を営む中で様々な取引を実施する。膨大な取引データがただあるだけでは役に立たないので、会計というまとめる作業が必須となる。この科目は、はじめて会計学に触れる学生を対象とし、取引の記録と整理に関する技術的な基礎を習得するとともに、企業・社会における会計の役割について学習する。会計学の学習における入門的位置づけの科目となる。	
	財務会計論	一連の会計手続きによって作成される財務諸表は、企業の内外で活用される。その際、投資家をはじめとする外部のステークホルダーにとっては、一定の基準（会計基準）によって財務諸表が作成されていることが、その活用の必要条件となる。この科目では、1年次に学習した内容を基礎に、より広範囲の会計手続きについて学習する。社会に出ていくにあたり、最低限必要となる会計知識を網羅的に扱う科目である。また3年次以降のより専門的な会計科目の学習につなげる中核的な位置づけとなる基礎科目である。	
	財務会計特講	この科目は、会計必修科目（簿記論・会計学）及び「財務会計論」の学習を前提として、外部報告会計についてより専門的な内容を学習するために開かれている。「財務会計論」（2年次配当）では基本事項を学び、本科目では以下の内容を中心に学習する。金融商品会計基準、減損会計、リース会計、退職給付会計、外貨換算会計等。	
	監査論	この科目は、会計監査論、特に財務諸表監査論の内容を中心として学習する。おもな内容としては会計監査の歴史、会計監査の意義と必要性、監査人の資格、商法における会計監査人監査、証券取引法における公認会計士監査を学習する。公認会計士監査のよりどころとなる監査基準について、一般基準、実施基準、報告基準のそれぞれを具体的に学び、監査計画、監査実施、監査報告の各段階について、実務的に重要と思われる事項を織り交ぜて学習する。	
	財務分析論	一連の会計手続きにより作成された財務諸表も、その活用方法がわからなければ宝の持ち腐れとなってしまう。この科目は、主に有価証券報告書等に掲載されている財務諸表データを用いて、企業の経営成績と財政状態を分析する手法を学習する。財務分析という手法を活用することで、企業の現状を客観的に把握するとともに、問題点を明らかにすることができる。一定の会計知識を習得していることが前提となるため、会計領域の発展科目という位置づけである。	
企業価値評価	商品やサービスを購入する際、我々はそれらの価格よりも、それらを手入することで得られる価値が高いと判断した時に購入している。投資家も同様であり、企業が発行する株式や債券の価値を推定し、その値が現在の価格（販売価格）よりも高ければ、購入を行う。では、どのように企業価値を推定すればよいのだろうか。この科目は、企業価値の測定方法に関する基礎的な理論を踏まえたうえで、有価証券報告書や株式市場などから一般に獲得することができるデータを活用して、実際に企業価値を測定・評価する方法を学習する。		

授 業 科 目 の 概 要				
(経営学部 データサイエンス学科)				
区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考	
専 門 科 目	経 営	管理会計論	経営者の役割は、経営戦略に従って経営計画を設定し、業務活動を監督・指揮し、業績を評価することである。こうした経営者の役割を支えるためには、適切に企業内部での活動を管理することが重要となる。この科目では管理会計の意義を踏まえながら、これまでに考案されてきた一連の管理会計の手法について学習する。会計学にとどまらず、経営学やマーケティングに関する知識を前提としているため、会計領域の発展科目という位置づけである。	
	営	原価計算論	生産、資材の調達、販売、研究開発など経営活動のあらゆる面で原価は発生する。この科目では、原価とはいったい何か（原価の本質や概念）、原価計算は何のために行うのか（原価計算の目的）、そして原価計算にはどのような方法があるのか（原価計算の種類や手続き）を学び、その後価格決定および期間損益計算のための原価計算（工業簿記を含む）、原価管理のための原価計算、そして利益管理のための原価計算について学習する。経営意思決定のための原価計算や設備投資の経済計算については「管理会計論」で学習する。	
	科	データ解析入門	この科目は、経営学部学生が最低限身につけておくべき、表計算を用いた統計的データ処理の方法について講義と実習を通じて学習する。表計算ソフトは、単に表やグラフを作成するためのソフトではない。大量のデータをまとめ、そこから客観的な特徴をつかむためには、統計的な視点は欠かせない。授業では、前半で表計算ソフトExcelの基本操作を学習し、後半では、ヒストグラム、基本統計量、相関と回帰を学習する。IT関連の基礎科目として位置づけられる	
	目	社会調査法	この科目は、社会科学を学ぶ上で必要なさまざまな調査（質問紙法・面接法・観察など）の方法や実施の手続き、そして、その分析について学ぶ。それを通して、卒業論文作成のための研究やゼミなどでのグループ研究などの質を高めていくことができるようになる。それだけではなく、日常生活の中に登場する様々な統計データや社会科学の文献の中で用いられる各種の統計調査が、どのような意図で、どのような対象からデータを集め、どのように分析されているのかを学ぶことは、それらに対する理解を深め、多面的な考察を可能にする。経営学をはじめ社会科学を学ぶための基本的なツールを習得する科目として位置付けられる。	

(注)

- 開設する授業科目の数に応じ、適宜枠の数を増やして記入すること。
- 専門職大学等又は専門職学科を設ける大学若しくは短期大学の授業科目であって同時に授業を行う学生数が40人を超えることを想定するものについては、その旨及び当該想定する学生数を「備考」の欄に記入すること。
- 私立の大学の学部若しくは大学院の研究科又は短期大学の学科若しくは高等専門学校等の収容定員に係る学則の変更の認可を受けようとする場合若しくは届出を行おうとする場合、大学等の設置者の変更の認可を受けようとする場合又は大学等の廃止の認可を受けようとする場合若しくは届出を行おうとする場合は、この書類を作成する必要はない。

## 学校法人亜細亜学園 設置認可等に関わる組織の移行表

令和4年度	入学 定員	編入学 定員	収容 定員	令和5年度	入学 定員	編入学 定員	収容 定員	変更の事由
<b>亜細亜大学</b>				<b>亜細亜大学</b>				
	3年次				3年次			
経営学部経営学科	340	55	1470	経営学部経営学科	<u>325</u>	<u>15</u>	<u>1330</u>	定員変更 (△55)
ホスピタリティ・マネジメント学科	150		600	ホスピタリティ・マネジメント学科	150		600	
				<u>データサイエンス学科</u>	<u>80</u>		<u>320</u>	学科設置 (届出)
経済学部経済学科	250		1000	経済学部経済学科	250		1000	
法学部法律学科	340		1360	法学部法律学科	<u>320</u>		<u>1280</u>	定員変更 (△20)
国際関係学部国際関係学科	140		560	国際関係学部国際関係学科	<u>130</u>		<u>520</u>	定員変更 (△10)
多文化コミュニケーション学科	140		560	多文化コミュニケーション学科	<u>130</u>		<u>520</u>	定員変更 (△10)
	3年次				3年次			
都市創造学部都市創造学科	145	10	600	都市創造学部都市創造学科	145	<u>0</u>	<u>580</u>	定員変更 (△10)
	3年次				3年次			
計	1505	65	6150	計	<u>1530</u>	<u>15</u>	6150	
<b>亜細亜大学大学院</b>				<b>亜細亜大学大学院</b>				
アジア・国際経営戦略研究科				アジア・国際経営戦略研究科				
	アジア・国際経営戦略専攻		(M) 30 (D) 5	(M) 60 (D) 15	アジア・国際経営戦略専攻		(M) 30 (D) 5	(M) 60 (D) 15
経済学研究科				経済学研究科				
	経済学専攻		(M) 15 (D) 3	(M) 30 (D) 9	経済学専攻		(M) 15 (D) 3	(M) 30 (D) 9
法学研究科				法学研究科				
	法律学専攻		(M) 15 (D) 5	(M) 30 (D) 15	法律学専攻		(M) 15 (D) 5	(M) 30 (D) 15
計	73		159	計	73		159	